

「風葉和歌集」の構造に関する研究



米田 明美

目次

序論

第一章 部立構成 ..... 一頁

第二章 四季部の構造

第一節 春(上・下)部 ..... 一九頁

第二節 夏部 ..... 五五頁

第三節 秋(上・下)部 ..... 七三頁

第四節 冬部 ..... 一一一頁

第三章 神祇・釈教部の構造

第一節 神祇部 ..... 一二九頁

第二節 釈教部 ..... 一四九頁

第四章 離別部の構造 ..... 一七七頁

第五章 羈旅部の構造 ..... 一九三頁

第六章 哀傷部の構造 ..... 二一三頁

第七章 賀部の構造 ..... 二四三頁

第八章 恋部の構造

第一節	恋一部	二六七頁
第二節	恋二部	二九五頁
第三節	恋三部	三二一頁
第四節	恋四部	三三七頁
第五節	恋五部	三六九頁

第九章 雑部の構造

第一節	雑一部	三九九頁
第二節	雑二部	四三七頁
第三節	雑三部	四六五頁

第十章 「風葉和歌集」の「よみ人しらず」歌・

「題しらず」歌 について……………四九五頁

第十一章 「風葉和歌集」と「続古今和歌集」……………五二三頁

付 「風葉和歌集」関係参考文献目録……………五四五頁

後記（発表論文掲載誌一覧）

## 序論

文永八年（一二七一年）冬、後嵯峨天皇皇后である大宮院（藤原嬉子）の命により撰せられた「風葉和歌集」（以下「風葉集」と略す）は、当時存在したと思われる二百に及ぶ物語の中から、凡そ千五百余首にもものぼる物語歌を抜き出し配した、我国最初で唯一の物語歌撰集である。その体裁は、巻首に仮名の序文を附し、部位や歌材の配列等は勅撰集の型を継承し、二十卷（但し、現存本はすべて末尾二巻が散逸している）もの内容を有している。

従来この「風葉集」は平安・鎌倉期の散逸物語研究の資料として用いられてきたため、「風葉集」本来の「歌集」という見地からはあまり論じられていなかったと思われる。その序文に、

やまとうたは、やくもたついつもやへかきにはしまり、ならのはの名におふ宮  
にあつめられしより、ことのはしのたのむりのちえよりもしけく、えらはる、  
ことも、うらのはまゆふたひかさなりぬるに、つくりものかたりのうたといふ  
ものなむ、いつはりなれたる人のいひ出たることのみなりて、まめなる所は  
ほにいたすへきにもあらさめれば、わかのうらのいそかくれに、かきすつる  
もくつむなしくつもり、あさか山のたにかけに、ときしらぬうもれ木くちはて  
ぬへくなりになり。そのこゝろを思へは、かゝるへくもなむあらぬ。世の中に

ある人なすことしけきものなれは、みるにもあかすへきくにもあまることを、  
さたかにその人とはなれけれどこの世にいひつたへて、よきをしたひあしき  
をいましむるたよりになりぬはかりしるしおけるなりければ、ひたふるにそら  
ことといひはてむも、ことの心たかひぬへくや。…… 〈注一〉

と記し、後世にまで善悪の判断の手掛りになる様に書き留めて「ひたぶるに空言と言ひ  
果てんも、ことの心違ひぬべくや」と、物語歌の意義と、強い調子で物語歌無視の現状を  
訴えている。また更に

うつせかひのむなしきからをなけくこ、ろこと葉おほくはそへうたのすかたに  
かなひて、うたのおやなるなにはつのなかれにかよへれば、ほかにはあさきこ  
とはをあらはして花鳥のいろをもねをもすす、うちにはふかきこ、ろをこめ  
てをとこ女のコひもうらみもしらせんとよめるなり。夏ころもた、ひとへなら  
むよりも、うたかたのあはれなるところそひてやあらん。

と続き、和歌よりも表裏両意の含まれる物語歌の方が、「あはれなるところ添ひてやあら  
ん」と、情趣が添加されているとし、物語歌の優位性を説いている。しかも

よし野のたきのたえす、みつかきのひさしきよにとまれは、ものかたりをつくれ  
る人は、かくれてもあらはれても、このことのとくにあへるをなんよろこひ、今

の世にみおよひてき、つたへむ人も、はしめてなきあとをおこされぬれば、しきしまのみちさかゆくことを思ひて、……

と、先例のない物語歌集としての撰者の並々ならぬ熱意を汲み取る必要がある。『風葉集』撰集こそ物語歌を集め一つの文学作品を作ろうとするものであり、『歌集』として構造等様々の問題を内包していると考えられる。勅撰集との比較においても、勅撰集の型を受け継ぐという程度で歴代の勅撰集と比較し、その差異・個性等の詳しい研究は立ち遅れていたのではないだろうか。『風葉集』自体勅撰集の形式に則る以上、先行の勅撰集なくしてはその形態は存在し得ないはずであり、外形上或は内容的にも詳細に考察してみることがあると思われる。無論、物語の歌を集めた『風葉集』とその性格の根本的に違う個人の歌を収めた勅撰集を比較すること自体冒険であると言わざるを得ないが、これを糸口とし、『風葉集』の特質の一部でも問題提起できればと、思う次第である。

また、『風葉集』が物語歌集である以上、各物語の内容・各物語場面と無関係には考え難い。『風葉集』の愛誦者は、やはり物語にも精通した物語読者であつたらうと考えられるからである。元來その歌の収載にあつても物語中の名場面の歌が選ばれたのか、秀歌と称される歌が抜き出されたのか、或は「歌集」として配列が優先され歌が採られたのかその基準についても曖昧であつた。自らその基本線も示されよう。

本論文では以上の点を鑑み、『風葉集』を一つの「歌集」とした立場で鑑賞し、先行する勅撰集と比較しつつ、配列を中心に各部の構造について検討し、ひいては独自性まで言

及してみたい。また一方、各歌を各物語場面に戻し、配列とのかかわりを論究し、それより生じる種々の問題を考え、できれば撰集過程・撰者についても私考を加えてみたい。

〔注一〕「風葉集」本文の引用は『増訂校本風葉和歌集』（中野在次・藤井隆各氏校注）による。以下「風葉集」の引用も同じ。

本論

第一章 部立構成

一

「風葉集」成立は、その序文から文永八年後嵯峨天皇の皇后（大宮院）である西園寺（藤原）姞子により命を下されたということが伺えるが、この時期の勅撰集編纂としては、正嘉三年三月藤原為家に、「古今集」から数えて第十一番目の勅撰集「続古今和歌集」撰進の命が後嵯峨天皇によって下されている。従って「風葉集」は、第十二番目の勅撰集に該当するわけである。「風葉集」は、この先行する十一の勅撰集をどのように受け止め、撰収しているのだろうか。

先ず、部立編成の点から言及してみたい。部立が勅撰集各々の特色を物語っていることは、既に多くの先学の諸氏によって指摘されている。歴代の勅撰集——「古今集」から最後の勅撰和歌集である二十一代目の「新統古今和歌集」まで考えても、その部立は必ず



しも同一でない。部立の有無、呼称、巻数、採用歌数等種々の問題がある。無論、どの勅撰集も、先の集を模倣・追従しようとしつつも、新しい部立設立を試みたり、順序等種々の工夫がみられるのである。「風葉集」の場合、部立はどうであろうか。歴代十一の勅撰集と「風葉集」の部立編成を整理すると次の通りになる。

古今集——A + 賀 + 別 + 羈 + 物名 + B + 哀 + C + 雑体 + 大御所御歌・神あそびの歌・

東歌

後撰集——A + B + C + 別・羈 + 賀・哀

拾遺集——A + 賀 + 別 + 物名 + C + 神楽 + B + A + 賀 + C + 哀

C C B

後拾遺集——A + 賀 + 別 + 羈 + 哀 + B + C + 神 + 積 + 俳諧

金葉集——A + 賀 + 別 + B + C

詞花集——A + 賀 + 別 + B + C

千載集——A + 別 + 羈 + 哀 + 賀 + B + C + 積 + 神

新古今集——A + 賀 + 哀 + 別羈 + B + C + 神 + 積

新勅撰集——A + 賀 + 羈 + 神 + 積 + B + C + 物名・雑体

続後撰集——A + 神 + 積 + B + C + 羈 + 賀

続古今集——A + 神 + 積 + 別 + 羈 + B + 哀 + C + 賀

風葉集——A + 神 + 積 + 別 + 羈 + 哀 + 賀 + B + C

A……………春・夏・秋・冬の四季部

この編成をみると、勅撰集個々の特色があるものの、一応一定の基本方式はあったと認められる。しかし詳細にみて行くと、部立の有無に関して「風葉集」と同一の部立を有する勅撰集は、「千載集」・「新古今集」・「統古今集」しか存しない。加えて順序まで考えると、「風葉集」の部立編成は、末尾の四部が入れ替わっているものの、「統古今集」と類似しているように思われる。

ただここで注目すべき点は、「風葉集」は巻首の仮名の序文で、物語歌が無視されている現状を記し、物語歌の本義・価値を述べ、そして皇太后宮の仰せによる撰進過程を記している。その記述は、漢詩に圧倒される和歌の現状を嘆く「古今序」を模っており、「古今集」に範を求めたと言われている。背景に、我国唯一の物語歌集として、しかも皇太后宮の命による勅撰集の色彩の濃い性格のものである故、和歌復興を主張する「古今集」を指摘したこともある。ところが部立編成という点では、先述の如く古今集よりむしろ「統古今集」の影響の方が強いように思われる。含まれる部立数も、「統古今集」と「風葉集」では共通しており、その順序も似通っている。そこに部立意識の類似が伺えるのではないか。「古今集」を指摘しつつも、部立編成は先行する勅撰集の流れを踏襲し、特に「風葉集」の直前に編まれた「統古今集」の影響を多大に受けているのではないだろうか。

次に、勅撰集の各部立に属する歌数をみてみたい。採用歌が多いということは、少ないよりその部を重視しているということが原則として言えよう。勅撰集撰集の場合、各部立の歌数は、その背後の歌壇や歌風の影響、及び当時の政治権力、皇室等と密接にかかわっており、物語歌を集めた「風葉集」とは同等に比較できない部分が多々ある。然れども「風葉集」は序を付し、部立編成等の形式を勅撰集に基づいている以上、採用歌数等の構成において先行する勅撰集と何らかの関係があると考えられよう。部立編成の次に問題とすべき点である。

次の〈表一〉は、「風葉集」と十一の勅撰集の部立採歌数が、全歌数のどのくらいの割合かを調べたものである。(猶、「風葉集」中心とし散逸部分のある雑部を抜いたため、この数字は絶対的なものではない。およその目安としてみただきたい。また恋部は、「風葉集」の場合何首かの脱落があると考えられ、実際この数値は多少変動があると思われる。)

冬	秋	夏	春	部立 勅撰集
29(3.6)	145(17.8)	34(4.2)	134(16.4)	古今
65(5.4)	226(18.7)	70(5.8)	146(12.1)	後撰
48(5.6)	78(9.1)	58(6.8)	78(9.1)	拾遺
48(5.5)	142(16.3)	70(8.0)	164(18.9)	後拾遺
52(9.5)	109(19.8)	66(12.0)	98(17.8)	金葉
21(7.8)	58(21.5)	31(11.5)	48(17.8)	詞花
90(8.6)	161(15.5)	89(8.5)	135(13.0)	千載
56(10.0)	266(17.0)	110(7.0)	174(11.1)	新古今
81(7.9)	169(16.5)	56(5.5)	136(13.3)	新勅撰
74(6.7)	220(20.0)	70(6.4)	158(14.4)	統後撰
46(9.4)	259(16.7)	103(6.6)	181(11.7)	統古今
80(6.9)	153(13.3)	77(6.7)	133(11.5)	風葉

哀 傷	羈 旅	離 別	积 教	神 祇
34(4 . 2)	16(2 . 0)	41(5 . 0)		
40(3 . 3)	18(1 . 5)	46(3 . 8)		
78(9 . 1)		53(6 . 1)		45(5 . 3)
68(7 . 8)	36(4 . 1)	39(4 . 5)	19(2 . 2)	19(2 . 2)
		17(3 . 1)		
		15(5 . 6)		
61(5 . 9)	47(4 . 5)	21(2 . 0)	54(5 . 2)	33(3 . 2)
100(6 . 4)	94(6 . 0)	39(2 . 5)	63(4 . 0)	65(4 . 2)
	46(4 . 5)		56(5 . 5)	34(3 . 3)
	55(5 . 0)		52(4 . 7)	52(4 . 7)
96(6 . 2)	87(5 . 6)	39(2 . 5)	73 4 . 7)	63(4 . 1)
99(8 . 6)	31(2 . 7)	48(4 . 2)	41(3 . 6)	38(3 . 3)

数 歌全	A	恋	賀
1111	815	360(44.1)	22(2.6)
1426	1197	568(47.0)	18(1.5)
1351	855	379(44.3)	38(4.4)
1220	870	229(26.3)	36(4.1)
716	551	179(32.5)	29(5.3)
411	270	84(31.3)	13(4.8)
1285	1043	316(30.3)	35(3.4)
1979	1563	445(28.5)	50(3.2)
1376	1024	395(38.6)	51(5.2)
1368	1101	378(34.3)	42(3.8)
1925	1550	444(28.6)	59(3.8)
[1 420]	1152	395(34.2)	59(5.1)

計部哀離四  
 の傷別季各  
 歌・・・勅  
 数賀羈神撰  
 の・旅祇集  
 合恋・・の

- 数字は各部の採用歌数である。
- ( ) 中の数字は、各勅撰集のAに対するパーセントである。
- 「風葉集」は、末尾二巻が散逸しているため全歌数は( )をつけて記した。

- 「拾遺集」の場合、神楽部の歌数を神祇部として記入した。
- テキストは、「新編国歌大観」を用いた。

この表をみると、各勅撰集の部立の意識にも変遷があることが伺われ、且つ「風葉集」

は一部を除いて実に忠実にその流れを受け止め、歌数に反映していることが知れる。まさに勅撰集の形式を採用歌数の点においてもそのまま継承していると考えられる。ここで注目されることは、物語歌集という性格上、恋部の歌数に何らかの特色が予想されたが、その割合においては歴代の勅撰集に比してさほど際立った特徴はないように思われる。むしろ「風葉集」に関しては、先ず哀傷部の増大が挙げらるのではないだろうか。

哀傷歌は、死に際して生じる悲哀の感情を詠んだもので、この部立の構造については八代集を中心に既に多くの御論歎がある。部立としては必ずしも重きを置かれず、定着した部立とは言い難い。八代集について、哀傷歌自体は何らかの形で雑部等に収められていても、哀傷部そのものとして独立して打立てられていない勅撰集、「金葉集」・「詞花集」とあり、十三代集をみても「新勅撰集」・「続後撰集」そして「風葉集」の後に編纂された「続拾遺集」には存しない。ところが、「風葉集」の哀傷部は、その受容の流れからみても特に秀でており、歌数の点において九十九首と、全詠歌数千九百七十九首を持つ新古今集の百首とわずか一首の差にすぎない。「風葉集」内の歌数のバランスに着目しても四季・雑・恋に次ぐものであり、これら四季・雑・恋の各部が勅撰集の主要な三本柱と言うべき部立であることを考えれば、哀傷部の比重の大きさは評価すべきではないだろうか。

## 二

哀傷部に次いで注目される部立は、離別部と羈旅部であろう。八代集中の離別部と羈旅部とが密接な関係にあることは、既に有吉保氏『新古今和歌集の研究―基盤と構成』「第

四章―離別部の構成と特質」で指摘なさっておられる。つまり「古今集」から「詞花集」までの六代集に関しては、離別部が羈旅部に比して歌数の上で優位を占めているのであるが、「千載集」以降の勅撰集では逆に羈旅部の方が優位を占めるようになり、この両者の分岐点は「千載集」からであるとされているのである。しかもこの傾向は、十三代集にも及び「新勅撰集」・「続後撰集」、そして「続拾遺集」等離別部の立てられていない勅撰集が目立つようになる。

ところが、「風葉集」に問してのみこの立場は逆転し、歌数の点からも離別部優位とになっている。この現象を説明するには、先ず勅撰集の流れの中で「千載集」を境に羈旅部が優位になってゆくその理由を知る必要がある。

この離別部衰退、そして羈旅部増大については有吉保氏がその原因を究明なさっているので、その御考察をまとめさせていただくと、離別部と羈旅部の比重の転換は「千載集」・「新古今集」時代になって旅する生活が多くなつたという事だけでなく、それは「旅の心」を詠めるという詞書が示しているように、心の中に映像を写してみろという作歌態度の新境地がひらかれたためと論じておられる。つまり實際旅に赴かずして歌合等の場で、旅の寂しさ苦しさを生活や人生に置き換え、羈旅歌に託そうとする境地である。この新境地が「千載集」で開かれ、後の勅撰集へ継承されていくのである。

「風葉集」の場合、羈旅歌は三十一首で「千載集」からこの部の増加を考えると極端に少ない。しかも「風葉集」の部立の中では最小の位置を占めている。「風葉集」の直後に編纂された「続拾遺集」(全詠歌数千四百六十一首)の羈旅歌は六十三首とやはり「千載集」からの増加傾向を受継いでいる。勅撰集の羈旅歌部増大の方向でただ一つ衰微の姿を



表しているのが「風葉集」と言えるであろう。

ここで「千載集」で開かれた「旅の心」を詠む歌について注目して考えてみたい。次の表は羈旅部を有する勅撰集について、羈旅部内で歌合及び詞書中に「旅の心を詠める」等の記されている歌数を調査したものである。<sup>（後述）</sup>（勅撰集によっては、羈旅部は存しなくても羈旅歌は雑部・離別部に含まれる集がある。しかし仮に歌を有していても、部立を設けていない以上羈旅部の意識を持っていないと考え、この表からは除外した。）

〈表二〉

歌全 数詠	C	B	の羈 歌旅 数部	勅撰集
1111	16	0	16	古 今
1426	18	0	18	後 撰
1220	36	0	36	後拾遺
1285	14	33	47	千 載
1979	41	53	94	新古今
1376	27	19	46	新勅撰
1368	31	24	55	続後撰
1925	37	50	87	続古今
[1420]	31	0	31	風 葉

B | 歌合、及び詞書中に「旅の心を詠める」等の記されている歌の数

C | 羈旅部の歌数から、Bの歌数を引いた数字（実際に旅にでて詠んだ歌の数を示す）

この表をみると、実際の旅中の哀感を詠んだ歌より、旅に赴かず旅をイメージとしてと

らえた歌が、羈旅部の中で実に大きい割合を示めていることに気付く。「千載集」で開かれた新しい境地の歌は、十三代集の羈旅部にも及んでいることが伺えよう。ところが「風葉集」は物語歌集であって、物語中で登場人物達が各々その感慨を作者の代弁として詠んだ歌を集めてあるのである。平安・鎌倉期の物語において、登場人物達がその物語場面と異なり、イメージとしてつかんだ旅の景物を詠むという箇所が果してあるのだろうか。少なくとも「風葉集」の羈旅部において、現存本については採歌された歌を各物語場面にまで戻って調べても、そのような歌は見出せない。「とりかへばや」「うつほ物語」「源氏物語」等の歌も、實際遠地に赴き、いとしい人や肉親を懐かしむ感情や旅中の悲哀を詠み込んだ歌ばかりである。また散逸物語に関して十一物語十五首が存するが、各々の詞書で判断し得る限り、都を離れた遠隔の地から都や恋しい人を慕う望郷の心情を詠んだ歌で占められていると考察できる。「風葉集」に関しての羈旅部の後退は、その一因に「千載集」で開かれた新しい境地の歌が含まれていないためであると言えよう。

### 結語

以上「風葉集」において、先行する勅撰集と比較し、部立編成の問題と各部立意識についていささか卑考を加えてみた。部立編成の点では、序は「古今集序」を範としつつもその部立は「続古今和歌集」の編成に近似していると思われること。また部立意識をみるに、各部の歌数から判断する限り、四季・恋等（雑部は一部散逸しているので比較不可）の主要各部では先行する勅撰集の採用歌数をそのまま踏襲していると言える。ただ羈旅部の衰

微・離別部の増大が、勅撰集の部立変遷の中で特に注目すべきであると言えよう。その理由については、撰者意識の問題も含まれるが、根本的には勅撰集の形式をとりつつも、物語の歌を集めるという大枠をはめたところに一因があるのではないだろうか。羈旅部の減少に關しても、「旅の心」を詠むという新しい境地の歌が物語歌集である故盛り込められなかったという点に起因していると考えられるし、勅撰集で離別・哀傷部が比較的少ないにもかかわらず、「風葉集」においてこの二部の増大は平安・鎌倉期の物語の傾向を示しているとも言える。逆に言えば、この羈旅・離別・哀傷部が勅撰集という方向からみた「風葉集」の独自性を表していると言えるのではないだろうか。

〈注一〉 厳密に言えば、「風葉集」は勿論勅撰集でなく準勅撰集というべきであろう。

〈注二〉 本田義彦氏（「勅撰和歌集部立考」『熊本女子大学学術紀要』十五―一号昭和三十八年三月）福田秀一氏（「中世勅撰和歌集の撰定意識―序・題号・部立構成からみた―」『成城文芸』四十七号 昭和四十二年七月など）。

〈注三〉 この表は、有吉保氏「第二編 八代集の展開と新古今集の構成」『新古今和歌集の研究 基盤と構成』（昭和四十三年四月 三省堂）を参考にして作製した。

〈注四〉 樋口芳麻呂氏「風葉和歌集序文考―風葉集の成立・撰者について―」『国語と国文学』昭和四十一年一・二月号。

〈注五〉 但し「統古今集」自体その集名・序等をはじめ「新古今集」を模倣しており

、この点更に研究の必要があると思われる。家郷隆文氏「続古今和歌集研究——その外形をめぐって」『国語国文研究』第十号 昭和三十二年四月号、及び同氏「続古今集」『国文学 解釈と鑑賞』昭和四十三年三月号。

〈注六〉

「拾遺集」の春・秋・賀・恋部の歌数が少ないのは、別に雑春・雑秋・雑賀・雑恋各部を設けているためと考えられる。

〈注七〉

「風葉集」の恋部に関しては、藤河家利昭氏（「風葉和歌集恋部の構造」『平安文学研究』第四十六号）に詳しい。

〈注八〉

有吉保氏〈注二〉参照。松田武夫氏「第十章 哀傷部の構造」『古今集の構造に関する研究』（昭和四十年九月 風間書房）有吉保編「第四章 哀傷部の配列構成」『千載和歌集の基礎的研究』（昭和五十一年三月 笠間書院）など。

〈注九〉

福田秀一氏の御指摘によると、哀傷部を設けているのは二十一代集中十二集である。〈注二〉参照。

〈注十〉

この表Bの歌は、歌会・歌合の歌、及び「旅の心を詠める」等の詞書をもつ歌を機械的に数えたもので、歌内容からも詳細に判断する必要があると思われる。



## 第二章 四季部の構造

### 第一節 春(上・下)部

「風葉集」春部は上下二巻に分かれたれ、春上部五十九首・春下部七十四首<sup>七</sup>合わせて百三十三首もの歌数を持つ。「風葉集」内では、恋・雑・秋部に次ぐ位置を占め、先行する勅撰集と比較しても、その部の位置・歌数の割合もほぼ同一である。しかも春部の巻頭歌は、

はるたちける日よませたまひける  
なみのしめゆふみかとの御歌

1 たちかはる春のしるしにけふよりは初鶯よこゑなをしみそ

散逸物語「波のしめゆふ」の帝の歌であるが、勅撰集春部巻頭歌の型通り、「立春」を詠じた歌を位置させている。次の「源氏物語」歌は

冷泉院行幸ありて御あそひともはへりけるついでによませさせたまひける

源氏の朱雀院のおほむ歌

2こ、のへをかすみへたつるすみかにも春とつけつる鶯のこゑ

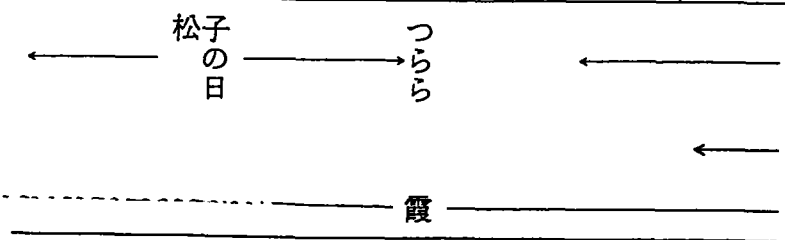
であるが、物語本文に返してみると、冷泉帝が二月二十余日朱雀院に行幸された折の歌で、厳密に考えると「立春」の歌ではないが、「春と告げつる鶯の声」（物語では「春と告げくる」）と春を迎えた喜びを詠じており、「立春」として並べられている。以下その配列も、「梅」「桜」「藤」「山吹」などがその主要な歌材と目され、先行する勅撰集の型を忠実に踏襲していると言えよう。

次に春部（上下）百三十三首について、その内容の展開・配列を示す一覧表を掲げてみたい。

〈春上部〉

歌番号	物語名	詠者	詞書の要約	歌語	配列
2	(1) 波のしめゆ	帝	春立ちける日よませ給 給ひける	たちかはる春 初鶯・声	立春→ 初鶯→ →
源氏物語	朱雀院	冷泉院行幸ありて…	春と告げつる 鶯の声		

(10)	9	8	(7)	(6)	(5)	4	3
しのぶもぢずり		源氏物語	はしたか	いせを	まよふ琴のね	落窪物語	うつほ物語
右大臣	中宮	明石の上	女院	一条院女三の宮	よみ人知らず	よみ人知らず (屏風歌)	右少将仲頼
子の日に野に出でてよみ侍べりける	御返し	子の日に…五葉の枝に移る鶯に	…子日に雪の降り侍りければ	( " )	題知らず	大納言忠頼の七十賀を… 屏風の歌	…春日にまうでて…「あしたのかすみ」といふことをよめる (注)
引く松	松の根 鶯の巣立ち	松ひく 鶯の初音	霞・雪	春ながらまだ ふるとしのつ らら	さえし雪げ かすむ春の日	霞で見ゆる 春や夜のまに越 えてきつらむ	鶯の羽風 霞の衣





(19)	18	17	16	15	14	13	(12)	(11)
づくひひこかし	源氏物語	うつつほ物語		源氏物語		うつつほ物語	はまゆふ	時雨
頭中将	二品内親王(女三の宮)	右大将仲忠	左少将和政	浮舟	小野の尼	孫王の君	兵衛	源大納言家の宰相
：思ふ人に遣はしける	：雪降りける日「心乱るる今朝のあわ雪」と：	( " )	春日の歌の中に	返し	浮舟のかたへ若菜遣はしけるに	：若菜摘みたる形作りたるを：	：若菜摘むを見て	題知らず
霞	春のあわ雪	雪解くる春のわらび	野辺の若菜の老い	雪深き野辺の若菜	雪間の若菜	雪間分けけふの若菜	霞立つ若菜摘むらん	摘める若菜

淡雪 ←

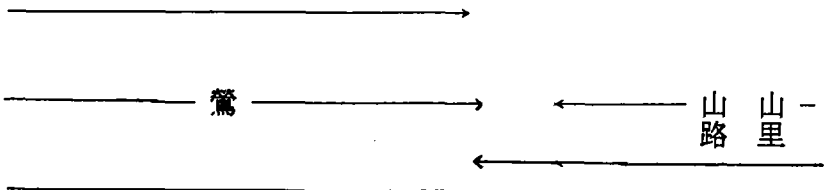
(若菜の老)

(雪間)

若菜 →

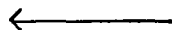
→

(28)	(27)	(26)	(25)	(24)	(23)	(22)	21	(20)
まひぢぬいし	雪るの月	はがため	ぬあたりさら	末葉の露	ささわけ しあさ		源氏物語	うきなみ
納言 女三の宮の中	女二のみこ	侍従	麗景殿の女御	皇后宮	藤宰相の娘	関白	八の宮	藤中納言女
：紅梅のをかしきあけば のを見侍りけるに鶯も一 声鳴きたるに	( " )	題知らず	むつきのころ…	春宮の女御宣耀殿にすみ 侍りけるに…	返し	春のころ女のもとより帰 りて…	：薫大将の侍りけるに遣 はしける	心ならず小野に住みける ころ…
鶯の声 匂ふ梅の枝	鶯梅の花	鶯の花の枝に 鶯の声	鶯の花の枝に	声霞込めたる鶯の	霞込めたる 春の山辺	春の霞 山路	山風 霞吹きとく	霞込めたる 春の山里

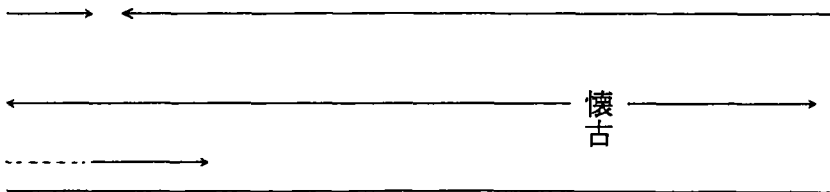


(37)	36	(35)	(34)	(33)	(32)	31	30	29
梅めづる	源氏物語	ひぢぬい しま		女す、み		浜松中納言 物語	源氏物語	源氏物語
宮の君	冷泉院	中務卿の娘	関白	左大将	さきの右大臣	中納言	笛兵部卿宮	匂兵部卿宮
梅の花白き紅合わせ侍りけるに：	玉鬘の内侍のかみまかで侍りけるに：	返し	女のもとにて軒近き梅を折りて	返し	むすめのことを左大将にほのめかし侍るとて	唐土にて梅の木多かる山を 行きて：	六条院の薫物合わせ果てて：	：軒近き紅梅のいとおもしろきを折りて：
梅の花・紅深き	梅の花	梅の花	花咲き匂ふ・梅の花	梅の匂ひに	梅の梢を	梅咲く山	鶯の声 花のあたり	花の香

梅



(45)	44	(43)	(42)	(41)	(40)	(39)	(38)
萩に宿かる	源氏物語	萩に宿かる		しのぶ草	朝倉		逢ふにかふる
帝	浮舟	東三条院女御	中将(中宮か)	入道一品の宮	皇后宮大納言	皇后宮	三位中将
御覧じける春もろともに月を	れば：つま近き紅梅を折らす	御返し	梅壺の花の色濃き枝につけて	関白軒近き梅を見侍りて	御返し	：紅梅の枝に付けられける	女の梅の花折りて見せ侍るとて
月や見し世のそれながら	花の香のあけぼの	雲居の花見し世恋しきもの梢	梅の花ともに見し世の春ぞ恋しき	梅の匂ひいにしへの春ぞ恋しき	過ぎにし春ぞいとど恋しき	梅の枝	紅に匂梅の花



56	55	(54)	53	(52)	51	(50)	(49)	48	(47)	(46)
源氏物語	源氏物語	よその思ひ	うつほ物語	風につれなき	夜の寢覚	女ず、み	火海人の藻塩	ば今とりかへ	おやこの 中	
六条院	六条院	帝	源季明	吉野の院	寢覚の上	右大将	大僧都	君 太政大臣四の	中宮	帝
∴雨のいたう降る日遣はさせ給ひける	∴雁の連れて渡るによませ給うける	∴帰る雁の鳴くを聞かせ	∴雁の列といふ心を	吉野山に行なはせ給ひけるころ∴	て∴あけぼのの空をながめ	女のもとより帰りて遣はしける	( " )	題知らず	御返し	中宮里におはします此∴
春雨	帰る雁がね	帰る雁がね	雁	春のあけぼの	春のあけぼの	春霞 あけぼのの空	袖の月かけ	春の夜・月	春の夜の月	春の夜の月

→ 春雨 ← 帰雁 → ← 月 →

← 春の曙 →

〈春下部〉

(64)	(63)	(62)	(61)	60	(59)	(58)	(57)
ささわけし あさ	しのぶ草	海人の刈藻	川霧	うつほ物語	四季物語	民部卿 あらば逢ふ よのと嘆く	まよふ琴の ね
中納言	関白	権大納言	内大臣	中務卿親王	青柳の宮	内大臣	よみ人しらず
：関白のかたの花の盛り を：	心にもあらぬことのその 夜になりに：	中宮の清涼殿の花御覧じ ける：	春のころ山里にて：	：春日に詣でて：花をい ざなふといふ心を	四季物語の中に	：庭に柳のうちなびくを 見て	和歌の浦の柳をよめる
春霞・花のあたり	春風・花の色	霞・花	霞 花のありか	ひ あかぬ花のには	青柳の糸	青柳	青柳の糸
					青柳 ←		

(75)	(74)	(73)	72	(71)	(70)	69	68	67	(66)	(65)
らゆくへ知			落窪物語	一隠れ養		しいはでし			緒絶えの沼	まひぢぬいし
左大将	白河院	帝	よみ人知らず (屏風歌)	左衛門督	二の宮	帝	法皇	嵯峨院	皇太后宮	式部卿の宮
参りて奏し侍りける	この花を御覧じて	とへ 南殿の桜を一枝大将のも	て：屏風に桜の散るを仰ぎ 立てる人かけるところ	( " )	：桜の咲き初めたるに：	( " )	( " )	法皇六十御賀白河院にて	花の盛りに	春の除目に：
花のしるべ	花	花の盛り	桜花	桜	咲き初むる花	山桜	花の光	ふ花ものどけき匂	ふ花も盛りににはほ	匂ひまさされる花

桜

85	84	83	82	(81)	(80)	(79)	(78)	(77)	(76)
ぶいはでしの	狭衣物語	源氏物語	源氏物語	雲るの月	ぬゆくへ知ら	風につれなき	みたらし川	はみかきが	
嵯峨院	齋院	宇治の中の君	六条院	皇太后	帝	宇治入道関白 太政大臣	内大臣	後春の院	王 入道式部卿親
ひて ：南殿桜を一枝奉らせ給	古里の花おぼし出でて：	りて ：おもしろき花の枝を折りて	そめたるを ：若木の桜ほのかに咲き	を御覧じて ：九重の花を人の奏れる	白河院の花御覧じに：	：桜につけて：	南殿の花の盛りに	取らせ給ふままに	春の院の五十の御賀に：
雲居の桜	花	かざし折る花の たより	桜かざし	雲居の桜	花	花咲き添へん	花	桜をかざす	桜花にほふ

(懐古)

(懐古) かざし

かざし



94	(93)	92	(91)	(90)	(89)	(88)	(87)	86
夜の寝覚	宣旨 心高き春宮	狭衣物語	ふ 夢路にまど	} 扇流し		せ けぶりにむ	夜の寝覚	ぶ いはでしの
関白	御冷泉院	帝	大納言女	宰相中将	源中納言女	新宰相	寝覚の上	臣 一条院の内大
きて ：花の梢に鶯の鳴くを聞	まだ年若かりけるに女に たまはせける	：女をかいはませ給ひて	：桜の枝をおこせて侍り ける返り事に	返し	男の桜を一枝おこせて侍 りけるに	：花をみてよめる	：見し世のこと思ひ出ら れければ	：桜の花を折りて
鶯の 花のあたり 声	鶯 花の色	朽木の桜	山桜 あだにうつろふ	あだなり 春の形見	桜花 あだにのみ散ぬ	花におくれぬ命	咲きにほふ花	花の色

(懐古)

鶯 →

あだ あだ あだ

103	102	101	100	(99)	98	97	(96)	95
将花 桜折る少	源氏物語		源氏物語	火 海人の藻塩	うつほ物語	うつほ物語	緒絶えの沼	うつほ物語
中将	按察大納言北 の方	六条院	北山の上人	大僧都	参議良峰行正	中納言涼	右大臣	中納言実忠
花の散るころ…	御返し…	北山にて紫の上はつかに 御覧じ初めて…	六条院中将と申しける時 <small>〔注三〕</small>	…ふきこしといふ所の花 おもしろかりければ	…野に出でて花を見ると	帰る雁を聞きてよめる	女のもとより帰りて遣は しける	…花のおもしろかりける を見て
散る花を惜しみ おきて	尾の上の桜散ら ぬまを	山桜	花の色(顔)	峰の嵐 桜の花	花散らす風	帰り行く雁 散る花	花のあたり 雁がね	桜花・鶯

(惜花)

(惜花)

(散花)

(散花)

(散花)

← 帰雁 →

(112)	111	110	(109)	(108)	(107)	(106)	(105)	(104)
つまこひか ぬる	うつほ物語	源氏物語	朝霧	源氏物語	川霧	しのお草		かつら
三位中将	右少将仲頼	よみ人知らず (秋好中宮の 女房)	尼	薫大将	内大臣	中納言	関白	兵衛佐
花のころ：	ほ：色を尽くせる花風にき ひて散り交ひ：	六条院にて舟浮けて：	に：白河の花見歩き侍りける	ける花見にまかりてよみ侍りに	春の末つ方	返し	軒の桜を人の折りて見せ 侍りければ	る：花見に立ち入り侍りけ るに：
山桜	花にまがふ	花ぞ散りける	とまらぬ花	散り散らず 山桜	散りまがふ花	風にまかせて散 る	散るだに惜しき 花の色を	うつろふ花を

(散花)

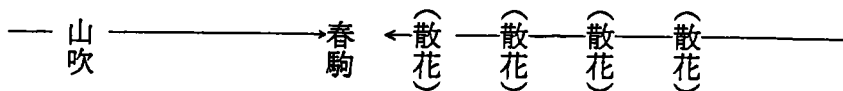
(散花)

(散花)

(惜花)

(惜花)

(121)	(120)	119	(118)	(117)	(116)	115	(114)	(113)
山吹	ふくら雀	源氏物語	四季物語	ねまよふ琴の	うきなみ	浜松中納言物語	みやまがく	ふた葉の松
三位中将	左大臣	六条院	春駒の中納言	よみ人知らず	藤中納言の娘	帥宮中宮(帥宮中の君)	よみ人知らず	中納言
山吹の盛りなる所に：	けて：山吹のえならぬ枝につけて：	じて：山吹の盛りなるを御覧	四季物語の中に	和歌の浦にて花の散るをよめる	ければ：花のころになりて侍り	：花の散るを見て	題知らず	：南殿の桜の盛りなるを見て：
に八重の山吹九重	山吹の花	山吹の花	蔓斑の駒	こそなれ散りて花の波と	消えぬまと頼めし人の名残	雪の名残に(雪のならひに)	散る花は後の春をも待つものを	よ散りぬとも又こん春は思ひ出で

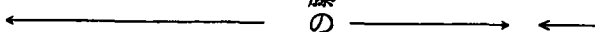


(130)	(129)	128	127	126	125	(124)	123	(122)
四季物語	四季物語	うつほ物語	源氏物語		源氏物語	ねまよふ琴の	源氏物語	ぬあたりさら
霞の女御	頭つつじの木工	紀伊権守	帝	薫大将	言 柏木の権大納	東宮	二条太政大臣	女院
( " )	四季物語の中に	吹上にて人々歌よみ侍りけるに藤の花を	( " )	：藤の花の宴させ給ひけるに	：夕霧の左大臣藤の盛りに	：和歌浦におはしける時に	藤の花の宴し侍りけるに	：八重山吹の開けさして
春霞	岩つつじ	藤の花	花	藤の花	藤の花	藤波	花	山吹 八重に一重を

暮春

岩つつじ

藤の花



133	132	(131)
語 うつほ物		しのぶ草
清原松方	在原時蔭	中納言御息所
上にて春を惜しむ心 を人々よみ侍りけるに		：やよひのつごもりごろ
行く春	惜しむ心	花も散り春もく れなん
三月尽	三月尽	暮春

● 歌番号は、中野莊次・藤井隆校注<sup>各</sup>増訂『風葉和歌集』に依る。また以下の引用もこれによる。

● ( ) の附してある歌番号は、散逸物語及び、現存物語の散逸部分に属していた歌であることを示す。

● 「」の有する歌は、贈答歌或は、連続して物語から抜き出されたことを示す。

● ( ) は、物語歌に返した場合の内容補充を示す。

—

春上の部は、「立春」「初鶯」に始まり、「若菜」「春霞中の山里」そして「梅」「春の月」「帰雁」「青柳」と季を追う順に配されている。「若菜」一つにしても「雪間の若菜」(「雪わけてけふのわかな」13歌中、「雪まのわかな」14歌中、「雪深き野べのわかな」15歌)から「若菜の老い」(16歌中)、そして「雪とくる春のわらび」(17歌中)若菜

を取囲む自然の微妙な変化まで描き出してゐる。

次に「梅」の配列において、梅の咲き誇る様子や匂ひ（25〜39）の後に、「過にし春ぞいとど恋しき」（40歌中）、「いにしへの春ぞ恋しき」（41歌中）、「みしよの春ぞ恋しき」（42歌中）と、梅の香より連想される懐旧を詠じる歌を並べて変化をもたせてゐる。しかも「梅」の次に「月」を配し、「月やあらぬ春やみしよのそれなから」（45歌中）を交じえ、梅は懐古は月と「春の月」を五首も並べてゐる。恐らく「伊勢物語」四段の「五条の后」で、翌年の梅の花盛りに去年を恋しく思い業平が詠じた「月やあらぬ春や昔の春ならぬ我身ひとつはもとの身にして」の歌物語世界を念頭に置き配されたものであろう。先行する勅撰集の春上の部において「梅」の直後に「月」を位置させてゐるのは、「新古今集」の「梅」の後に「朧月夜」（四首）のある以外見 出せず、独自の小世界を作り出していると言えるであらう。

更に「春の曙」（50〜52）と続き、「帰雁」（53〜55）「春雨」（56）「青柳」（57〜59）で春上の部はしめくくられている。

一一

以上春上の部の配列について論じてきたが、各々物語に返して読むと、配列上の位置・詞書と一致しない歌が幾つか存する。

まず、13「うつつほ物語」歌についてであるが、

右大将なかつちのうちにさふらひけるにふちつほの女御しろかねのひさげにわか  
のあつものいれてくろはうをふたにおほひてとるところに女のわかになつみたるか  
たつくりたるをつかはし侍けるにかきつけ侍ける

うつほのそわうのきみ

13 君か為春日の野への雪わけてけふのわかをひとりつみつる

と、「わかなつみたる形作りて」と詞書に記されている通り、実際の若菜摘みの折の歌で  
はない。物語本文に依ると、「蔵開中」の巻において十二月十七日仲忠が先祖の文書を持  
ち参内し、三昼夜宿直して帝の御前で説お講じている時、藤壺の女御からの贈物に附されて  
いたものである。曆日的配列から見ると約一ヶ月のずれであり、季が異ると言える。詞書  
に偽りが記されているわけではないが、厳密に考えると配列上の季と物語本文での季節は  
一致しない。このことは、この「うつほ物語」歌の場合、配列を重んじ配列鑑賞を優先し、  
歌が入集され詞書が附されたことを示唆していることになるう。

次に、「今とりかへばや」の「題しらず」歌について考えてみたい。

たいしらす

48 春のよもみる我からの月なれば心つくしのかけとなりけり  
いまとりかへはやの太政大臣四君



男として育てられた権大納言（後に左大臣・関白に昇進）の姫君は、表向き若君として出仕し、中納言にまで進む。右大臣（後に太政大臣となる）の君と結婚するが、表向きの夫婦であり、四の君は苦悩する。ある春の夜、その満たされぬ思いを独り詠じた折の歌がこの48歌である。その際美しい四の君の姿を垣間見た宰相中将は心動かされ、密通して不義の子出産…と物語が大きく展開する契機となる重要な場面である。「その年もたちかはり、ついたちごろ」「月のあかき」夜、「花（梅）のかけ」うつる頃と記され、物語場面と「風葉集」の配列では曆日的展開から鑑みると多少時間的なずれは存するものの、「梅」「月」では前後の歌の配列と一致している。前述の「うつほ物語」歌（13）の例から見ると著しい矛盾はないと考えられるのに、詞書は「題しらず」である。そも現存本「風葉集」全体では、七十八首の題しらず歌を含んでいる。（この中で四首は、詞書の脱落とも考えられる。）この内、現存物語は十七首のみ（但し、現存物語でも散逸部分に属する歌三首を含んでいる）で、圧倒的に散逸物語が多い。現存部分の歌で調査する限り、「うつほ物語」以外は独詠歌であり、女三の宮のもとへ渡る光源氏を送る紫上の独詠や、入水後助けられた浮舟の歌など物語展開上読者の哀れを誘い、その詠者の苦悩に共感し得る歌が多いという共通性がある。「風葉集」において、この「題しらず」の詞書は何首か連続して説明されることが多く、この48歌の次49散逸物語「女すゝみ」歌にもその意が掛けられていると思われる、勅撰集の型を模倣したものと見えよう。物語本文が存し、詠歌事情が明らかであるにもかかわらず「題しらず」と詞書が付いているのは、単に勅撰集の型を意識したものか、それとも他に物語内部と配列の点から考慮され、何か撰者の意図があっ

たためであらうか。他部をも詳しく調査し、結論を導きたい。

### 三 春下の部

次に春下の部であるが、七十四首中五十八首が花(桜)を中心としており、「春駒」<sup>(118)</sup>・「山吹」<sup>(119)</sup>・「藤の花」<sup>(123)</sup>・「岩つつじ」<sup>(129)</sup>・「暮春」<sup>(130)</sup>・「三月尽」<sup>(132)</sup>・<sup>(133)</sup>と並べられていると考えられよう。この中で注目に値する歌は、卷二(春下部)巻頭歌の「うつほ物語」歌と、現存「源氏物語」諸本にはない歌<sup>(108)</sup>であらうと思われる。

まず、その「源氏物語」歌について考察を加えてみたい。

にほふ兵部卿のみこしらかはの家へ註四に侍りけるに花見にまかりてよみ侍りける

かをる右大将

108 ちりちらすみてこそゆかめ山桜ふる郷人はわれをまつとも

堀部正二氏へ註五が、現存の「源氏物語」中に見出し得ないこの歌を含む四首(他は<sup>849</sup>・<sup>1393</sup>・<sup>1394</sup>)について他の古筆断簡や古系図から散逸した「巢守」の巻の歌ではないかとされた。以来諸先生方により「巢守」巻について論じられ、紫式部同時代に書かれたという説と、院

政期以降の作で、「巢守物語」という「源氏物語」の登場人物を借りた別個の物語という二説に大別されると思われる。特にこの歌の詞書の「白河院」は、藤原良房が白河に別業を所持して以来藤原撰関家所有とされ、「巢守」成立時期推定の論点となっている。「源氏物語」宇治十帖成立・構想論にかかわる問題である。配列をみても、次歌の散逸物語「朝霧」も詞書に「白河」とあり、桜の名所として並べられていることは確かであろう。ただこの「風葉集」の四首を調べて、特に他の「源氏物語」歌と詠者名・詞書上の区別はみられない。「源氏物語」の場合、他の物語と同名の登場人物（例えば、冷泉帝・朱雀院など）以外は物語名を冠しないという唯一独自の記載がされている。「源氏物語」歌が単に歌数だけでなく、他の物語より優位の取扱がなされたと考えられよう。無論当時歌壇においても、「源氏物語」歌は、俊成・定家・顕昭の言う如く重んじられていたことも無視できない。どの歌も充分吟味され配されたと考えられる。

以上の点に鑑み、この四首を含んだ「巢守」については、成立時期についての言及はできないものの、大宮院の女房達や撰者は、恐らく「源氏物語」の一巻として読み伝えていたのではないだろうか。

#### 四

最後に、卷二つまり春下の部巻頭歌について考えてみたい。

左のおほいまうち君春日にまうて、これかれ歌よみ侍けるに花をいさなふといふ

心を

60 わかやとにうつしてしかなのへに出てみれともあかぬ花の匂ひを

で、「うつほ物語」の「春日詣」（一名「梅の花笠」）巻中の歌である。物語本文に依ると、二月廿日源正頼が御願たてべく春日大社に詣で神楽を奉納する。その社頭の歌会の折、源仲頼が作成した和歌序に記された題をもとにし、歌を詠み連ねるのである。和歌序は、

あはれ、けふは春のなかばの月、ねまちを昨日といひて、はなのほひをさそふうぐいすの声をむかへ、たびに春のかりつらなして、かはべのかものともをつらねて、このめのかすがの宮にわたり給へり：（傍線筆者）

と書き起こされている。この歌はその中の「はなのほひをさそふ」を歌題として載き詠じたものである。この「はな」がなにを示しているのかであるが、よく比される紀貫之の「大堰川行幸和歌序」と合わせ考えると、この「春日詣」の和歌序冒頭部も一行の盛儀を称えた内容とみることができよう。正頼一行に供してきた多くの者を「春のかりのつらなして、かはべのかものともをつらねて（春の雁の列をなして、河辺の鴨の供を連ねて）」と対句的に表現し、「このめの（木の芽）「春日」の序詞）かすがの宮にわたり給へり」と対句的である。つまり正頼一行が来て春の盛りを迎えた春日社の様子と解すことができ、

その前半部は、正頼一行の春日参詣の盛儀が「はなのほひをさせ（花の匂ひを誘）」ひ、「うぐいすの声をむかへ」たことになるのではないだろうか。物語本文に戻ると、兵部卿宮が春日の御社のおもしろき梅の花を折らせ、あて宮の許に奉った歌、「たちよれば梅の花がさにほふのもなほわび人はこゝらぬれけり」より、この巻の名が付けられたとされ、梅の咲く頃と考えられる。以上から類推し、和歌序での「はな」は、春日大社に咲き誇っていた「梅」と考えて差し支えないのではないだろうか。

だが「風葉集」に立ち戻ってこの春部全体の配列を鑑みると、前述の一覽表の如くこの歌は「桜」として並べられていると思われる。次の61から66歌まで、詞書・歌ともに「花」とのみ記され、しかもすべて散逸物語歌であるだけに判然としないが、「梅」の配列は、春上の部（44）で終わっていると考えられよう。加えて次歌61「川霧」は、  
春のころ山さとにて見そめて侍りける女を思ひやりて

かはきりの内大臣

61たちかくす霞はとほくへたつれと花のありかに心をそやる

あるが、この歌の詠まれた時点と近似すると思われる歌が、同じ春下に存する。

春のすゑつかた山さとにすみ侍りける女のもとよりかへり侍けるみちすから引と  
ゝめらるゝこゝちし侍ければ

河きりの内大臣

107 ちりまかふ花に心のうつりつゝ家路をさへも忘れぬる哉

この「山さとにて見そめて侍りける女」(61詞書と107詞書「山さとにすみ侍ける女」は同一人物であろう。内大臣が女を見初めて通うようになったわけで、各々の詞書「春のころ」「春のすゑつかた」はその時節を示すものである。61歌中の「花」も107と同じ「花」である可能性が強く、春の末に花が散ることから、「桜」を示していると考えられよう。また62の散逸物語「あまのかるも」歌は、

中宮の清涼殿の花御覽しける明ほのを見たてまつりて

あまのかるもの権大納言

62 九重の霞のまより花をみて哀こゝろのみたれそめぬる

であるが、この歌は「物語二百番歌合」にも採歌（註九）されている。「風葉集」「物語二百番歌合」各々の詞書等から、歌こそ記されていないものの現存本「海人の刈藻」にこの場面とおぼしき箇所が存することが、小木喬（註十）氏により指摘されており、「清涼殿の花」は「桜」を示していると言えよう。

次の63「しのぶ草」64「ささわけしあさ」65「ひぢぬいしま」の各歌（註十一）は、すべて散逸物語であり、他の資料から考察しても歌の示す「花」を「桜」とする決め手は見出せず、判然としない。66「緒絶えの沼」も散逸しているが、

花のさかりにちゝおとゝ「よはひはふりぬ」など申侍けるに

66 心ありて風ものとききやとからや花も盛ににほふなるらん

詞書中の「よはび<sup>ひ</sup>ふりぬ」は、「古今集」春上の部の前太政大臣藤原良房の歌と何らかの關係があることが松尾<sup>松尾</sup>聡<sup>聡</sup>氏により示されている。文徳天皇の皇后明子を花（桜）によそえて詠んだ良房の歌から、この66歌・詞書の「花」も「桜」と考えて良いのではないだろうか。また、67から69までの「いはでしのぶ」歌三首は歌中に「山ざくら」と示され、次の7071の「隠れ養」歌は、詞書中に「さくら咲はじめたる」と記されている。

以上の点からこの春下の部の冒頭部は、散逸物語が六首連続して位置しているものの、「桜」を中心としてまとまっていると言えよう。それ故春下の部巻頭の「うつほ物語」歌については、撰者の曲解の上「桜」の「花」として並べたと考えられるのではないか。

「新古今集」春下の部の俊成卿女の歌（112）が、「千五百番歌合」で詠じた折の「花の香」は「梅」であったと推定されるのに、「新古今集」の配列では「桜」の歌群に位置している先例や、この位置が春下の部つまり巻二において巻頭であることを考え合わせる必要がある。古来勅撰集において各巻歌<sup>巻</sup>については特別な考慮がなされており、「風葉集」も勅撰集の型式を忠実に踏襲している以上、同様の配慮をしてもおかしくはないと考えられるからである。ここで先行する勅撰集巻二（春下の部）の巻頭歌を掲げてみたい。

古今集  
(春下)

69 春霞たなびく山のさくら花うつろはむとや色かはりゆく  
よみ人しらす

「後撰集」卷二は春中の部である  
「拾遺集」卷二は夏の部である

後拾遺集  
(春下)

三月三日もものはなをご覧じて 花山院御製  
みちよへてなりにけるものをなどてかはももとしもはたなづ  
けそめけん

「金葉集」 「詞花集」の卷二は夏の部である

千載集  
(春下)

鳥羽殿におはしましけるころ、常見花といへる心ををのこど  
もつかうまつりけるついでに、よませ給うける  
77 ささしよりちるまでみれば木のもとに花も日かずもつもりぬ  
るかな 白河院御製

新古今集  
(春下)

釈阿、和歌所にて九十賀し侍りしをり、屏風に、山にさくら  
さきたるところを 太上天皇  
99 さくらさく遠山どりのしだりえをながながし日もあかぬ色か  
な

新勅撰集  
(春下)

73 みこにおはしましける時の御うた 光孝天皇御製  
山ざくらたちのみかくすはるがすみいつしかはれてみるよし



もがな

「統後撰集」卷二は春中の部である

統古今集  
(春下)

100 龜山の仙洞によしの山のさくらをあまたうつつしうゑ侍りしが  
はなのさけるを見て 太上天皇  
はるごとにおもひやられしみよしののはなはけふこそやどに  
さきけれ

引用は『新編国歌大観』を用いた。各歌番号も、それに依る。

この表を一見すると、春部を三巻に分けた「後撰集」「統後撰集」を除き、「後拾遺集」を例外として、卷二(春下)はその巻頭に「桜」を位置させる傾向があることがえよう。次に、「後拾遺集」以降、天皇或は院の御製を巻頭に載っている集が多いということが知れる。しかも後藤重郎氏の御指摘に依ると、特に卷二については、「新古今集」で初めて勅撰下令者が巻頭歌人となったが、その後「統古今集」「玉葉集」「風雅集」「新統古今集」の四集がその影響を受け、同様の配慮がなされていると論じられている。更にこの四集はともに、神祇・釈教の各冒頭歌に神詠・仏詠の歌群をもち(但し「統古今集」は神詠のみ)、外形上の類似の意味で重なり合うことも付け加えられるであろう。

以上から、論考を加えるに、撰者は勅撰集の配列に熟知した人物と考えられる故、「風葉集」卷二巻頭歌において「うつほ物語」歌は何らかの意味を持たせて置かれたと言えるのではないだろうか。その理由として、一つは詞書に記されている「春日にまうでて」の意を汲取り、「風葉集」下令者大宮院を含む藤原一族賛美を読み取ることができよう。春

日大社は藤原氏の氏神であり、大宮院、そしてその父であり時の権力者西園寺実氏も師輔の子公季から別れた藤原氏である。

更に付加<sup>け</sup>えるならば、「続古今集」春下の部との関連が指摘されるのではあるまいか。

「続古今集」巻二巻頭歌は、後嵯峨天皇の御所亀山院の桜をめてた歌である。この桜は、詞書に示されている通り、建長七年十月に完成した亀山殿造営の折に移し植えられた吉野山の桜で、後嵯峨天皇はこの桜を見て詠まれたのである。「五代帝王物語」にも

さて院は、西郊亀山の麓に御所を立て、亀山殿と名付、常に渡らせ給ふ。大井河嵐の山に向て棧敷を造て、向の山にはよしの山の桜を移し植られたり。自然の風流求めざるに眼をやしなふ、まことに昔より名をえたる勝地とみえたり。(群書類従)

と、後嵯峨院の権勢を表す記述として説明されている。この「続古今集」巻二巻頭歌の詞書の亀山殿に移し植えられた吉野の桜を踏<sup>ふ</sup>ま<sup>づ</sup>つ、「風葉集」巻二巻頭歌「わかやとにうつしてしかなのへに出てみれともあかぬ花の匂ひを」を再考すると、「花を我家に移しめ<sup>る</sup>」という類似の趣向がみられよう。他の部での「風葉集」と「続古今集」の構造上の類似の傾向も踏まえて鑑みると、単なる偶然とみるよりやはり「続古今集」巻二巻頭歌を意識して配したと考えるほうが妥当ではないだろうか。「風葉集」撰者は、「うつほ物語」歌(60)を、巻二巻頭に位置させることにより、「風葉集」下命者である大宮院を含む藤原(西園寺)一族を頌功し、かつ後嵯峨院の栄華鑽仰を暗<sup>く</sup>し<sup>よ</sup>うとしたのではないだろうか。「風葉集」は、単なる物語歌の秀歌選ではなく、後嵯峨院と後嵯峨院皇后(大宮院)を称えた物語歌撰集として、後嵯峨院当代の勅撰集と同様の位置付けができるので

はないだろうか。<sup>（註十五）</sup>「風葉集」撰者は、「続後撰集」（単独撰）・「続古今集」の撰者の一人藤原為家と目されているが、<sup>（註十六）</sup>「風葉集」の配列には「続古今集」の構成が色濃く加味されていることが指摘できよう。

### 結語

以上、「風葉集」巻一・巻二の春上下部について、その配列と物語内へ返した場合の矛盾等いささか卑考を加えてみた。

春上の部は、「立春」に始まり、「若菜」「春霞中の山里」「梅」「春の月」「帰雁」「青柳」と、勅撰集の型に則り、季に従い歌材が並べられている。この中で、「うつほ物語」歌（13）が物語本文では十二月に詠じられ、しかも実際の若菜摘みの折の歌ではないのに、配列上は「若菜」中に位置していること。また逆に、「今とりかへばや」歌（48）は、物語本文が現存しその場面も春の配列とほぼ一致していると考えられるのに、「題しらず」と詞書が附されていることなどが、物語内へ返し検討した結果の問題点と言えよう。

春下の部については、「桜」「春駒」「山吹」「藤の花」「岩つつじ」と並べられ、最後には「暮春」「三月尽」と丁寧<sup>（註十七）</sup>に春の暮れ行く様子が、やはり勅撰集の型通り配されていると言える。その中で、現存の「源氏物語」諸本にはない歌（108）の存在。加えて（春下の部）巻頭の「うつほ物語」歌（60）は、「続古今集」巻二巻頭歌を意識して置かれたことが問題点として挙げられよう。

特に巻頭歌の問題は西園寺藤原一族賛美、そして後嵯峨院御繁栄の意を込めて配された

と言えると思われる。物語歌 撰集「風葉集」と「続古今集」の構成の類似は、ますます顕著なものになってきたと言えるのではないだろうか。

へ注一この「うつほ物語」歌は、

左のおほいまちきみかすかにまうて、これかれうたよみ侍けるにあしたの霞といふことをよめる  
うつほの右少将仲頼

3 鶯の羽風をさむみかすか山かすみの衣けさはたつとも

であるが、この歌は「続後撰集」春上部（17）に、「題しらず」「よみ人しらず」として収載されている。但し、第三句は「春日野」、第五句は「いまはたつらん」である。「続後撰集」の場合、「うつほ物語」から撰抜したのではなく、「古今和歌六帖」から採歌しかとされているが、勅撰集に詳しい「風葉集」撰者がほとんど同一の歌形であることに気付かぬはずはなからう。「風葉集」はその序文に、勅撰集に選入された物語歌の扱いを述べており、物語の方が先に成立しているとしてこれらを除くことはしないと述べている。しかし同じ後嵯峨院の御世、遡ること凡そ二十年前の勅撰集に選歌された歌を、雑部でなく春上の部の三番目に位置させているのは、いささか大胆すぎはしないだろうか。何か撰者の意図が込められてはいないだろうか、更に検討を加えたい。

参考文献—中村忠行氏「物語歌の一側面」『宇津保物語新巧』昭和四十一年、  
文庫刊。樋口歌麻呂氏「和歌と物語のはざま—物語歌撰集の誕生」『文学・語学』昭和六十三年八月）

〈注二〉この「源氏物語」歌は、

六条院中将と申しける時わらわやみにわつらひ給へてたつねおはしましたりけ  
に  
源氏の北山の上人

100

おくやまのむろのとほそをまれにあげてまたみぬ花の色をみるかな

であり、「風葉集」諸本一致している。だが「源氏物語」本文はひとしく、第二句「松のとほそを」。第五句「かほをみるかな」となっている。このことは「風葉集」内の「源氏物語」本文は、青表紙本・河内本いずれにも属さない別本系統の古写本の一本に依拠していたことの説明に通じる。(参考文献―稲賀敬二氏「第一章中世源氏物語梗概書の諸問題」『源氏物語の研究』昭和四十二年九月笠間書院など)

〈注三〉「題しらず」歌については、本稿第十章「『風葉和歌集』の『よみ人しらず』歌・『題しらず歌』について」参照。

〈注四〉「白河院」とあるのは、穂久<sup>100</sup>文庫蔵永元年写本。「しらかはの院」は、久曾神本の本文であるが久曾神本において校合されている異本は、底本(丹鶴本と同じである)。(『増訂<sup>101</sup>風葉和歌集』参照)

〈注五〉『中世日本文学の研究』昭和十八年 教育図書株式会社。

〈注六〉池田亀鑑氏『源氏物語大成』。長谷川和子氏『源氏物語の研究』昭和三十二年 東宝書房。岡一男氏『古典の再評価』昭和四十三年有精堂。中野幸一氏「『すもり物語』覚書」『文学・語学』十二号昭和三十四年六月。「源氏物語傑作の

卷「『国文学』昭和三十六年五月。須田哲夫氏「巢守三位と『紅梅』『蜻蛉』の巻」『国文学研究』十九号昭和三十四年。藤村潔氏『源氏物語の構造』昭和四十一年桜楓社。稻賀敬二氏『源氏物語の研究』昭和四十二年 笠間書院。常磐井（長谷川）和子氏『源氏物語古系図の研究』昭和四十八年 笠間書院。石川徹氏・樋口芳麻呂氏「伝慈円筆物語歌集断簡と源氏物語巢守巻との関係について」『国語学国文学報』二十六集。尾田敬子氏「散逸『巢守』についての一試論」『国語国文』三卷十一号 昭和五十九年十一月など。

〈注七〉「源氏見ざる歌よみは遺恨の事なり」（「六百番歌合」俊成）、「左歌、これも源氏物語の心にかよへるにや、詞えんには侍るべし」（「千五百番歌合」定家）、「源氏、世継、伊勢物語、大和物語とて歌読の見るべき歌とうけたまはれば、狭衣も同じ事（<sup>定家</sup>）」（「千五百番歌合」顕昭）など。

〈注八〉この「春日詣」巻の和歌序の解釈は、室城秀之氏の御論文（『うつほ物語』における和歌へ「春日詣」の巻の和歌序をめぐる』）『国語白百合』十七号）を参考させていただいた。ただこの「花」について、岩波日本古典文学大系『宇津保物語一』では、「梅」と注記されているものの、樋口芳麻呂氏は「桜」ではないかとの御指摘をいただいた。慎重を用する問題であり、更に検討を加えたい。

〈注九〉「物語二百番歌合」の詞書は、「ふじつばにて、もののひさまよりさきの宮をほのかに見たてまつりけるあけぼのに 権大納言」とある。

〈注十〉『散逸物語の研究平安・鎌倉時代編』昭和四十八年 笠間書院。

へ注十一へただ、65「ひぢぬいしま」の歌は、

春の除目にかすより外の權大納言になりたる人のまうてきて侍けるに

ひぢぬいしまの式部卿のみこ

65春をたにしらて過ぎぬるわか宿に匂ひまされる花をみる哉

とあり詞書の「春の除目」は通例正月十一日に始まって十三日に終る県召除目と考えられる。物語本文において日程等も通例であれば、この歌の「花」は「梅」の可能性もあろう。

へ注十二へ『平安時代物語の研究』昭和三十年東宝書房。猶、藤原良房の歌は、

そめどののさきのおまへに花がめにさくらの花をささせ給へるを見てよめる

さきのおほきおほいまうちぎみ

年ふればよはひはおいぬしかはあれど花をし見ればもの思ひもなし

ぞめる。

(傍線筆者)

へ注十三へ「新古今集」春下の部に

千五百番歌合に

112 風かよふ寝覚めの袖の花の香にかをる枕の春の夜の夢

がある。「千五百番歌合」では、顕昭の「梅の香を夜半の嵐さそはずは闔のいた間をいかでもらまし」の作と番えられて「左右の花の香、ともによろしく侍りれど、右すこしをかしく侍り、勝とすべし。」と判されている。(参

考文献 一久保田淳氏『新古今和歌集全評釈第一卷』昭和五十一年 講談社)

〈注十四〉「第三章 第二節 卷頭歌に関する問題」『新古今和歌集の基礎的研究』昭和四十三年 塙書房。

〈注十五〉後嵯峨院御世の勅撰集の性格については、佐藤恒雄氏「統後撰集の当代的性格」『国語国文』第三十七卷三号。「後嵯峨院の時代とその歌壇」『国語と国文学』昭和五十二年五月。安田徳子氏「続古今和歌集」賀部の考察―撰集意図との関わりをめぐって―『和歌文学研究』第四十六号などに詳しい。

〈注十六〉樋口芳麻呂氏『平安鎌倉時代散逸物語の研究』昭和五十七年 ひたたく書房。





## 第二節

### 夏部

勅撰集において、夏部と冬部の歌数は、撰者や歌壇の嗜好を表していると言われ、密接な関係があると言われている。夏部と冬部については、先行する勅撰集において四季部の割合からみると、「千載集」「新古今集」期に至って始めて冬部の歌数が優位になることが、有吉保氏により既に指摘されている。しかもその傾向は、「新古今集」以後も受け継がれている。「風葉集」の次の「続拾遺集」までの夏部・冬部の割合（四季部内においての割合→雑春・雑秋部は含まない）については、次の〈表〉の通りである。

四季 合計	冬 部	夏 部	勅撰集
342	29	34	古 今
507	65	70	後 撰
262	48	58	拾 遺
424	48	70	後拾遺
325	52	66	金 葉
158	21	31	詞 花
475	90	89	千 載
706	156 (22, 1)	110 (15, 6)	新古今
442	81 (18, 3)	56 (12, 7)	新勅撰
522	74 (13, 4)	70 (12, 7)	続後撰
689	146 (21, 2)	103 (14, 9)	続古今
448	80 (17, 9)	77 (17, 2)	風 葉
468	92 (19, 7)	69 (14, 7)	続拾遺
	歌 数(%)	歌 数(%)	

「千載集」では、夏部・冬部の差位がわずか一首であったものの、次の「新古今集」で冬部に四十六首もの急増がみられた。以降、「続後撰集」を除き、勅撰集で冬部は、夏部に對し三十〜四十首の優勢となっている。「風葉集」の場合、冬部優位の傾向はそのまま継承しているものの、その差は三首にすぎず、「続後撰集」の四首の差とほぼ同じと言えよう。ただ〈表〉より四季部全体の比率から考察すると「続後撰集」は冬部の割合が低く、

「風葉集」は夏部の割合が高いという結果になった。つまり「続後撰集」は割合からみて冬部の歌数が少ないのに対し、「風葉集」は夏部の採歌数が多いため各々その差が接近したことになる。 「風葉集」の夏部の増加は、一つの特色と言って良いであろう。以上の点を踏まえて、まず夏部の構成・配列を探って行きたい。

一

夏部の巻頭歌群は、

やよひのつこもりのよ右大将御とのいして侍けるをあけはてゝていとま給はずとて  
よませ給ひける

よその思ひの御門の御歌

134 かさねつる袖のなこりもとまらしなけふたちかふる蟬のは衣

寒

冷泉院御息所いまたまるり侍らさりけるにうつきのついたちころに申つかはし侍け  
る

源氏宰相中将

135 花をみて春はくらしつけふよりやしきなけきのたにまとはん

関白のもとにまかれりけるに右大将のさなく侍けるをみてにはのさくらの一むらをおしをりてよめる

しのぶくさの宮の中將

136 さくら花梢に残るひとむらや過にし春のかたみなるらむ<sup>（註二）</sup>

である。巻頭歌は、散逸物語「よその思ひ」だが、詞書に「やよひのつごもりの夜」、歌中「今日たちかふる蟬の羽衣」と示される如く、春から夏への狭間の夜の思いと更衣について詠じた歌で、夏部巻頭を飾るのにふさわしいと言えよう。次の<sup>135</sup>「源氏物語」歌は、詞書に「卯月の一日ごろ」と記され、夏の始まりを示した配置であろう。<sup>136</sup>の散逸物語で「しのぶ草」歌も、梢に残る桜の花の一群を見て「過にし春の形見」と詠み、春の名残を挿入させつつ夏の訪れを語るといふ配列で、初夏の微妙な自然の移ろいを表していると思われる。次に「風葉集」夏部の配列を示す一覽表を掲げてみたい。

歌番号	物語名	詠者	詞書の要約	歌語	配列
134	よその思ひ	帝	やよひのつごもり夜…	今日たちかふる	更衣
135	源氏物語	宰相中將（ 夕霧の子）	…うづきのついたりちごろ に…	今日よりやしげ き嘆きの	卯月
136	しのぶ草	宮の中將	…庭の桜の一群残れるを 押し折てよめる	春の形見	春の形見
137	四季物語	ほととぎすの 帝	四季物語の中に	卯の花	卯の花

146	(145)	(144)	(143)	(142)	(141)	(140)	139	(138)
狭衣物語	一みれども あかぬ		うきなみ	流れて早き あすか川	一ふせじ		落窪物語	
帝(一狭衣大 将)	関白	中将	権中納言	東宮	侍従内侍	頭中将	よみ人しらず (屏風歌)	卯の花の女御
祭りの日、近衛づかさの 齋院に参るを……	これを立ち聞きて	……ほととぎすの鳴くのを 聞きて	……ほととぎすのほか に鳴 けば	題しらず	返し	……夏の初めつく方夜更けて	……七十賀屏風にほととぎ すを待てる所	御返し
葵草 今日はかざし	深山をいでしも ほととぎす	深山を出づるほ ととぎす	忍び音に鳴きて 侍ちけるほとと ぎす	ほととぎす 忍び音の声	忍び音 ほととぎす	ほととぎす忍び かねたる	ほととぎす待ち つる宵の忍び音	卯の花

卯の花

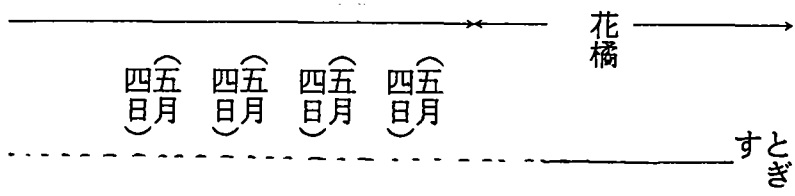
→  
…… — (初音) — (初音) — (初音) — (忍び音) — (忍び音) — (忍び音) — (忍び音) →

155	154	153	152	151	150	149	148	147
うきなみ		みかきがは	狭衣物語	宇治の河浪	源氏物語	しのぶ草		みかにはに咲ける
藤中納言女	権中納言	内大臣	帝(≡狭衣大将)	藤中納言女	夕霧の左大臣	前齋院	中納言	前関白
返し	きて :ほととぎすの鳴くを聞	ほととぎすの忍び音あらはれて語らひるたる声も	鳴くを聞かせ給ひて :ほととぎすのほのかに	祭のころ:	藤典侍、祭の女使し侍りけるに:	返し	祭の日:	「あふひてふ名をかけて見せなん」と申して侍りける女の返し
音 ほととぎすなく	ほととぎす	なので過ぎよ ほととぎす	ほととぎす	名をだにも聞か で年降る草	今日のかざし	もろかづら かざし	もろはぐさ かざし	あふひ 今日のかざし

ほと

賀茂祭

(164)	163	162	161	160	(159)	(158)	(157)	156
れみやまがく	岩清水物語		狭衣物語		なると	いせを	岩垣沼	浜松中納言物語
の式部卿のみこの女	兵部卿のみこ	秋の大將	(狭衣大將)	中務卿のみこの家の小宰相	中納言	左大將	頭中將	中納言
題しらず	返し、娘に代りて	五月五日女のもとに遣わしけるに	御返し	…五月四日の夕つかたに… …軒のあやめを引き落と… して…	…蘆橋を取りて	題しらず	…間近き橋にほととぎすの鳴くを聞きて	ば…ほととぎすの鳴きけれ
あやめ草	あやめ草	根(音)引けるあやめの	軒のあやめ	あやめ	花橋	ほととぎす 花橋	ほととぎす 花橋	ほととぎす 花橋





(172)	171	(170)	(169)	(168)	(167)	(166)	(165)
はしたか	源氏物語	朝倉	あらば逢ふよの と嘆く民部 卿		あしのやへぶき		ものねたみ
関白	蛭兵部卿のみ	三条院	よみ人しらず	よみ人しらず	家の少将	按察大納言女	登華殿御息所
娘のもとに忍びて侍りける文をみて：	けり ：ためしにも引き出でつべき根に付けて遣はし侍	五月五日いみじう長き根を皇后宮に奉らせ給ふとて：	( " )	院の姫君の根合の歌	( " )	( " )	題しらず
あやめの根 (音忍びしに声あらはれてほととぎす)	あやめの根 (音)	あやめ草 長き例	あやめ草 深き根	あやめ草 長き例	あやめ草 例に引ける	あやめ草 うきね	あやめ草うきね をかくる

あやめ

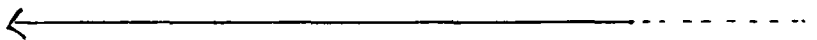
(五月  
日)

(181)	(180)	179	178	177	176	(175)	(174)	(173)
かみれどもあ ぬ	古郷をたづ ぬる	うつほ物語	源氏物語		松浦宮物語	物語名不詳	左も右も袖 ぬらす	あらば逢ふ よのと嘆く 民部卿
関白	権大納言	源太政大臣	よみ人しらす	六条院	参議氏忠	詠者名不詳	准后	姫君の中納言
( " )	題しらす	：五月雨になり にけりと 申しければ	御返し	：ほととぎす も催し聞こえ 顔なれば	：ほととぎす ぬを聞きて	：ほととぎす きて	山里に住み 侍りける太 政大臣	五日、ほととぎ すを聞き
五月雨の空	五月雨の空	ほととぎす 音久しく五月 雨	ほととぎすの 語らふ声	ほととぎすの 語らひし	ほととぎす	ほととぎす 鳴きて過ぐ なり	ほととぎす	ほととぎす 空に鳴く音

←  
(五月  
五日)

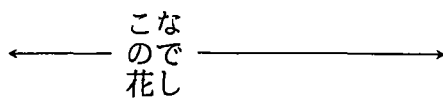
(190)	189	(188)	(187)	(186)	(185)	(184)	183	(182)
やせ川	うつほ物語	萩に宿かる	しのぶ	隠れ蓑		雲るの月	うつほ物語	心高き東宮 宣旨
衛門佐	侍従仲澄	院の女御の母	新大納言	中納言家の宰相	左大将	左大臣	彈正親王 (三のみこ)	右大臣
ば：ほととぎすの鳴きけれ	び：ほととぎすのあまたた び鳴くを聞きて：	(題しらず)	題しらず	返し	五月のころ女のもとに遣 はしける	五月ばかり：ほととぎす の鳴きければ	女に遣はしける	五月雨のころ：
ほととぎす	ほととぎす	ほととぎす	山ほととぎす	ほととぎす	五月雨 ほととぎす	五月雨 ほととぎす	五月雨	五月雨

五月雨



199	(198)	197	196	195	(194)	193	192	191
うつほ物語	物語名不詳	源氏物語		石清水物語	朝倉	狭衣物語	源氏物語	
兵部卿の宮	詠者名不詳	薄雲の女院	六条院	中関白	式部卿のみこ	帝(=狭衣大将)	六条院	花散里
藤壺の女御いまだ参り侍らざりけるころ遣はしける	むすめを(以下欠脱)	御返し	：前裁のなかにとこなつのはなやかに咲きたるを折らせ給ひて：	：なでしこにつけて遣はし侍りける	なでしこにつけて女に遣はしける	：蚊遣火さへ煙りてわりなければ	御返し	：くひなの始めて鳴きければ
夏山の茂き嘆き	なでしこの花	露のゆかりやまとなでしこ	露けきなでしこの花	涙露けきとこなつの花	露けきとこなつの花	蚊遣火	くひな・月	くひな・月

夏山



蚊遣火

くひな

くひな

(208)	207	(206)	205	(204)	203	202	201	(200)
なると	うつほ物語	物語名不詳	源氏物語	流れて早き あすか川	源氏物語		源氏物語	左も右も袖 ぬらす
娘中務卿みこの	左大臣	詠者名不詳	紫の上	院	玉鬘内侍	螢兵部卿の宮	六条院	太政大臣
六月のつごもりに 川原に出で侍りて 祓しに	暑き日釣殿に涼みて…	ける ：蓮の葉に書きつけ侍り	いに露の玉の花咲き渡れる いだしてやうなるを見る	ぬ螢の夜もすがら燃え明かす ぬるの光も明け行けば消え	返し	包み置き給ひて…にはか に光るを…	(題しらず)	題しらず
祓	木隠れに人松風	蓮	蓮の露	夏虫	螢	虫	螢	うつせみ

六月祓

納涼

蓮

蓮

← 螢 →

蟬

(210)	(209)
まよふ琴 のね	
東宮	東宮
和歌の浦にて六月祓し給ふとて	その夜も更けて風の音も涼しくなりにければ
夏越し	夏過ぎて
六月祓	暮夏

二

この一覧表の通り巻頭歌群の後、配列は「卯の花」「ほととぎす」へと展開し、凡そ勅撰集の型通り並べられ、<sup>143</sup>「ほととぎす」のが理解できよう。その「ほととぎす」にしても、「忍び音」<sup>139</sup>、<sup>142</sup>から初音<sup>143</sup>、<sup>145</sup>と時間的推移を丁寧に示そうとする苦心がみられる。「ほととぎす」は「風葉集」夏部では、その歌数として第一位を占め、三か所に分散して置かれている。これは先行する勅撰集においても、夏部の主要な歌材として歌数も多く、また四月の忍び音、五月雨の折と各所に散在している傾向をそのまま踏襲していると言えるであろう。その中で以下の配列で注目されるのは、「賀茂祭」にまつわる六首と「あやめ」（節供・根合せ等）の十三首の小歌群についてであろう。

まず賀茂祭に関する六首（<sup>146</sup>、<sup>151</sup>）であるが、賀茂祭は通例四月の中の酉の日に催され、勅撰集ではそれに因む歌材の「葵」・「祭」として置かれていることが多い。夏部として

は、「後撰集」「詞花集」「千載集」「新古今集」に各二首ずつ採られ、「新勅撰集」

「続後撰集」に三首ずつ入首している。(「続後撰集」にはない。)  
「詞花集」頃から夏部として定着してきたものの二、三首程度であり、「風葉集」の六首はその倍ということが多いと言えるであろう。賀茂祭は作り物語に必ずと言って良い程登場する祭であり、物語ではこの祭により季節を知り話が展開するのである。「源氏物語」葵の巻の葵の上と六条御息所の車争いの場面は有名であり、また賀茂の齋院に選ばれた女性を巡っての悲喜劇は「狭衣物語」に代表され、以後の作り物語にも多大な影響を与えている。祭の日髪飾りとして付ける葵の葉は、「逢ふ日」に掛け男女の恋の駆引きの場で詠じられる。ただ「風葉集」では単に「葵」としてではなく、<sup>148</sup><sup>149</sup>の散逸物語「しのお草」の様に、「祭の日さきの齋院にきこえ侍ける」と詞書されるものの、歌には「もろかづら」「かざし」が詠み込まれている。同じことは次の<sup>150</sup>「源氏物語」歌においても詞書には「藤典侍まつりの女つかひし侍けるに…」とあるものの歌中には「けふのかざし」であり、<sup>151</sup>の散逸物語「宇治の河浪」歌にも詞書に「まつりのころ…」と記されるものの歌には「名をだにも聞かで年降る草」と「葵(あふ日)」の名を婉曲に表現した歌が続いている。つまり各勅撰集の様に単なる「葵」「祭」の歌語を含んだ歌群でなく、賀茂祭としてその種々の姿を描き出すとする小歌群なのではないだろうか。

次に「あやめ」十三首(160、172)について考えてみたい。「あやめ」が勅撰集夏部の配列に加えられるのは、「拾遺集」以後であるが、八代集では「金葉集」の八首を除き凡そ一、三、四首どまりである。八代集以後についても「新勅撰集」三首、「続古今集」四首(「続後撰集」はない)であり、やはり「風葉集」の十三首は秀でていると言わざるを得

ないであろう。「あやめ」もまた作り物語になくてはならぬものである。「枕冊子」三十七段に五月の節日になると、内裏を始め貴族・庶民に至るまでこと如く屋根に葺いたことが綴られている様に、季節を示す描写として必ず登場し、また根合せなども頻繁に行われる。「あやめ」は泥中に生えることから、「浮き根」と恋に悩み泣く「憂き音」が掛けられることが多く、縁語としても「流れ（泣かれ）」「長きためし」「水」等が詠み込まれ、男女の贈答歌の恰好の歌材となったのであろう。

恐らく作り物語において、「葵」「あやめ」は季節の行事の一つとして描かれているだけではなく、互いの愛情を確認し合う、或は報われない自らを嘆く主人公達の気持ちを代弁する歌語として「逢ふ日」「憂き音」という意で提供され、数多く詠まれたであろう。「風葉集」での「賀茂祭」「あやめ」に関する歌数の多さは、そのまま作り物語中で登場人物達が恋に悩んだその数を示し、その場で詠じられた歌の多さを物語っていることになるのではないだろうか。加えて、「賀茂祭」「あやめ」の歌数の増加が、或は「風葉集」夏部膨張の一因と言えるのではないだろうか。

### 三

以上勅撰集と比した上での配列について論じてきたが、次に各歌を物語本文に返した場合の問題点について触れてみたい。

(たいしらす)

六条院御歌



201 よるをしる蛍をみてもかなしきは時そともなき思ひ也けり

玉かつらの尚侍のもとにたちよりて侍けるに六条院几帳のかたひらに蛍をつゝみ置  
給てうちかけたまへにはかにひかるをほとなくまきはしかくしければ

ほたるの兵部卿のみこ

202 なくこゑのきこえぬ虫の思ひたに人のけつには消る物かは

かへし

203 声はせて身をのみこかす蛍こそいふにまさる思はなるらめ

まず光源氏の詠じた<sup>201</sup>歌は、詞書には附されていないものの、前の散逸物語「左も右も袖ぬらす」歌の「題しらず」を受けていると考えられよう。「物語二百番歌合」に採用されている同歌が「紫の上かくれ給ひて後、蛍の飛び交を御覧じて」と詞書が附されている如く物語場面に返すと、紫の上の死後蛍の飛ぶを見て、光源氏が自らの悲嘆を独詠したものである。物語本文にも暦日は示されないものの、「いと暑きころ、涼しき方にてながめたまふに」とあり、「蛍のいと多く飛びかふも」と「風葉集」の前後の配列と矛盾はみられない。だが「題しらず」と詞書されているのである。物語本文は伝わっており、しかも配列との相違もみられないのに、「題しらず」と記されているのは、何か撰者の思わくがあるのであろう。春(上・下)部でもこの「題しらず」歌について述べたが、詠者の悲愴感漂う歌が多く、それはこの<sup>201</sup>歌にも当てはまるであろう。詞書を附さないということ、逆に詠者の苦悩を読者に推しはからそうとする手法なのではないだろうか。更に他部にも調査した上で結論を導きたい。

次の<sup>202</sup>歌は、玉鬘を恋する螢兵部卿宮の前で、光源氏が螢の光で玉鬘を浮かび上げさせるという有名な場面の後、玉鬘と螢兵部卿宮の贈答歌である。物語場面としては、同じ夏部<sup>171</sup>の歌

玉かつらの尚侍のもとにためしにもひきいてつへきねにつけてつかはし侍ける

ほたるの兵部卿のみこ

<sup>171</sup>けふさへやひく人もなきかくれにおふるあやめのねのみなかれん

の前に存する。物語中の暦日では、<sup>171</sup>歌が五月五日で、この<sup>202</sup>歌はその前の五月三・四日頃のことかと推定される。「風葉集」の配列からみると、間に三十首もの歌が置かれている故、何日もの隔たりがあるような錯覚を感じてしまう。逆に言えば、「風葉集」独自の配列鑑賞を優先させ、物語歌並べられたのであり、「源氏物語」でさえもそのストーリーは解体され、一首の物語歌として位置付けられていることが指摘できよう。

### 結語

以上夏部について種々考察を加えてきたが、まず「風葉集」の場合先行する勅撰集と同様に夏冬部歌数を比較した場合、冬部が数の上では優勢なもの、割合から見ると夏部の歌数が秀でているという結果となった。この夏部増大は、一つの特色と言って良いであろう。

配列では、「更衣」に始まり、「卯月」「卯の花」「ほととぎす」「賀茂祭」「花橘」「あやめ」「五月雨」「くいな」「蚊遣火」「なでしこ」「夏山」「蟬」「螢」「蓮」

「納涼」「六月祓」「暮夏」と勅撰集の型通り並べられている。その中で、「賀茂祭」「あやめ」が、作り物語の中で男女の恋の駆引きの場で、また季節感を与える内容として頻繁に登場することを反映してか、数多く入集されていることが問題点として挙げられよう。また各歌を物語本文に返した場合、物語本文が存しかつ配列と矛盾はないと考えられるのに「題しらず」の詞書された光源氏の独詠歌の存在、「源氏物語」歌でさえもそのストーリーは解体され、「風葉集」独自の世界を鑑賞すべく配列に則って位置していること―このことは、いかに配列に工夫がこらされた歌集であるかを示していよう。

〈注一〉有吉保氏「第一章四季部の構造と特質」『新古今和歌集の研究―基盤と構成』昭和四十三年四月。

〈注二〉「題しらず」歌については本稿第十一章参照。

第三節

秋(上・下)部

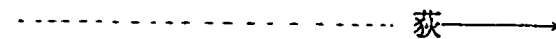
四季部の中の秋(上・下)百五十三首(十)に關し、その配列を分析し、かつ先行する勅撰集と比しその問題点を探って行きたい。また、各歌を物語本文に返した場合の疑問点等についても検討して行きたいと思う。

—

まず秋上部について、その配列をみてみたい。

(212)	211	歌番号
まよふ琴	うつほ物語	物語名
	朱雀院	詠者名
東宮	文月の初めつ方、風涼しく……	詞書の要約
和歌の浦におはしましけるころ……	今日初秋と告ぐるなりけり	歌語
秋ぞ来にける		配列

(221)	(220)	219	218	(217)	(216)	(215)	(214)	(213)
道心すゝむ	忍び音	うつほ 物語		いせを	心高き東宮 宣旨	女すゝみ	女すゝみ	のね
右大臣	帝	藤壺女御(11 あて宮)	中務卿宮北の 方	前関白中の君	右大臣	中宮	前右大臣の三 の君	〃
み侍りける ：七日よそながら見てよ	：七日のたまはせける	( 〃 )	七月七日川原に出でて：	七月七日の夕べ萩の風に なびくを聞きて	：萩吹く風の心あわただ しきままでに聞こえければ	左大将真野の浦にこもり ゐて侍りけるころ：	題しらず	( 〃 )
行き逢ひの空	七夕の逢ふ夜	七夕の逢ふ夜	天の川 秋を浅み	七夕・ 待つ宵の萩の上 風	萩の上風 秋の夕暮	秋の初風	秋は来にけり	秋も来にけり



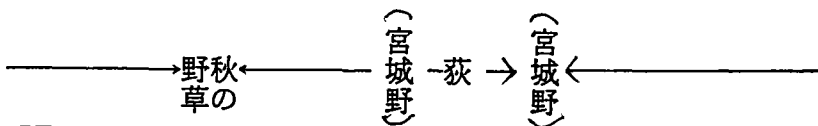
230	(229)	228	227	226	(225)	(224)	(223)	(222)
源氏物語	夜の寝覚	狭衣物語			あさ	ゆるぎ	のち悔ゆる	心高き東宮 宣旨
薫大将	広沢の准后(寝覚の上)	〃	嵯峨院女二の宮	帝(狭衣大將)	八条院	帝	帝	後冷泉院
ひ寄せらるることやあり	：秋の夕べ描きたるに思 りしかどいとかうはあらざ りきかしのながめわびて	〃	この御文の傍らに	て ：女二の宮に聞かせ給ふ ことを侍らんをなどか	同じ日：	：七日遣はさせ給ひける	：みこにおはしましける時	宣旨里に侍りけるにたま はせける
露吹き結ぶ秋風	萩の葉 秋の初風	末越す風	下萩	末越す風	七夕 別れての明日	七夕の逢はぬ嘆 き・契り	七夕・契・嘆き	行き逢ひの空

秋風

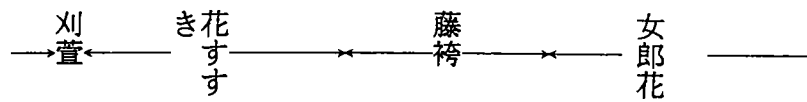
七夕

237	236	(235)	(234)	233	(232)	(231)
うつほ物語	源氏物語	四季物語	朝倉	源氏物語	「風につれ なき	
朱雀院	夕霧の左大臣	月の帝	皇太后大納言	賢木の院（ <small>桐壺帝</small> ）	冷泉院一の宮	太政大臣
をみなへしをよませ給ひける	れば く「しをるる野辺をいづとて」と申して侍りければ	四季物語の中に	はせて侍りける御返し るかの宮より「露ぞこぼるる秋萩の花」とのたま	野分だちたる夕べ：	れば かく渡れるよし聞こえければ	がひてほろほろとこぼる露に： けん書きて：
露の心	秋の野草	萩が花摺	宮城野の小萩が花の露	宮城野の露吹結 ぶ風の音 小萩	秋風にそよめく 萩の音	秋風 萩の上葉の露

← 秋風



(246)	245	(244)	243	(242)	(241)	(240)	(239)	238
れか やが 下折	うつ ほ物語	こゆ み	源氏 物語	四季 物語	うつ せみし らぬ	よその 思ひ	物語名 不詳	狭衣 物語
嵯峨 院中 宮	太政 大臣 <small>へまー</small>	大納 言	匂兵 部卿 宮	秋霧 の中 将	宰相 中將	右大 將	内大 臣	帝(Ⅱ) 狭衣大
前裁の刈萱のにはかに吹 き過ぐる風に乱れて:	見:尾花の折れ返し招くを 見てよみ侍る	に:薄に書きて遣はしける	前裁の中に尾花のまだ穂 に出でさしたるも:	四季物語の中に	野分の朝藤袴に付けて女 に遣はしける	内わたりにてつれなかり ける女の:	取りて悩むを聞きて	間:をみなへしの露の絶え じてもわりなげなるを御覽 じて
露か るか や けさ	花す すき	花す すき	穂に出でぬ物思 ふらししのす き	露のまがきの藤 袴	露や まさ らん	をみな へし 露こ ぼる らん	女郎 花	を み な へ し





(255)	(254)	253	(252)	(251)	(250)	(249)	(248)	247
末葉の露	をぐら山た づぬる	源氏物語	露分けわぶ る	みづから くゆる		みかきがは ら	朝倉	源氏物語
右大臣	女院大納言	小野の尼	右大将	宰相中将	源宰相	嵯峨院	皇太后宮大納 言	六条院
題しらず	夜もすがら置きわたせ る露も：	ひぬ「また萩原の露にまど ひぬ」といひけるかへし	八月ばかり：	〃	左大将大内山に住み侍り けるころ：	御賀の折：	朝顔の吹きわたれるあけ ぼのを：	前裁の色々乱れたるを
玉浅芽が原 の露	野辺の白露	秋の野の露分け 来たる	浅芽生の露分け わぶる	山里の秋の盛り	秋の気色	秋の野辺の色露 の光	置く露 朝顔	朝顔

野秋の

朝顔

←-----→

(264)	263	262	261	(260)	259	258	257	256
き風につれなき	のいはずはでし		浜松中納言物語	よその思ひ	源氏物語	源氏物語	源氏物語	源氏物語
吉野の院	(右大将)	左衛門督	中納言	帝	明石の上	中の君	六条院	浮舟
秋の夕べ：	返し	がめ侍りければ	し侍りけるころ：	奉らせ給ひける	野分の朝よめる	ろしには劣りて思ひ：	寄せ侍るべからんと：	と多くて
秋のあはれは	ながむる秋の夕	人もあやしき秋の夕暮	あはれ知る秋の夕べを	身にぞしむただ夕暮の秋の風	風の音も憂き身一つに	身にしむ秋の風	我が身にしむ秋の夕風	秋の夕べ



(273)	(272)	(271)	270	(269)	(268)	(267)	(266)	265
夢の通ひ路	雪のうち	おやこの中	源氏物語	扇流し	逢ふにかか る	をぐるま	水浅み	源氏物語
中の君	梅壺の女御	内大臣	昔の婿の中將	源中納言女	梅壺の女御	麗景殿の女御	承香殿の女御	六条院
題しらず	注輪に住み侍りけるころ 月を見て	女のもとにまかりて独り 明かしてよめる	：月出でてをかしきほど に立ち寄りて侍るに：	( " )	( " )	か(「題しらず」を脱した	物思ひける秋のころ…	風荒らかに吹き時雨した る夕べ：
月秋は露けき	月の夜な夜な	秋の夜な夜な	山里の秋の夜深 き物思ふ人	物思ふ袖 の夜	物思ふ袖の涙 夜半の白露	秋の夕べも涙な りし	いとど露けき 夕されば	物思ふ秋 袖は露けけれ

秋の夜

(282)	281	280	(279)	(278)	(277)	276	(275)	(274)
岩うつ波	我身にたどる姫君	源氏物語	らみかきがは	らみかきがは	ちぢにくだくる	狭衣物語	水の白波	をのへ
朱雀院	宮の大將	冷泉院	中宮	一品宮	按察御息所	齋院	冷泉院	大納言家の少大輔
同じ夜：	八月十五夜月くまなきに	：八月十五夜六条院に聞こえさせ給ひける	皇后宮内に入らせ給ひて	：月さし出でてをかしきほどなりければ	八月ばかり：	内より「涙に曇る月影は宿をとめてもやぬるる顔なる」：	( " )	( " )
月	秋の月	雲の上の秋の夜の月	雲の上の秋の夜の月	月はすみけれ	月影風ぞ身にしむ	秋の月影ながめ	物思ふ涙の夜の月	姥捨の月き物ぞ悲しき

月

(八月十五夜)

( " )

285	(284)	(283)
うつほ物語	火海人の藻塩	~
侍従仲純	仁和寺の親王	宰相更衣
雁十賀の屏風に八月十五夜 飛べる所	嵯峨院のきさいの宮の六 ける時八月十五夜に許し たまはせたりけるを	( " )
今宵の月 初かりがね	光添へたる夜半 の杯	夜の月
← ( " )	( " )	( " )

—

秋上の巻頭歌は、

ふ月のはしめつかた風すゝしく吹出たる夕へによませ給ける

うつほの朱雀院の御歌

211 めつらしく吹いつる風のすゝしきはけふ初秋とつくる也けり

と、「うつほ物語」「初秋」の巻に存する朱雀院の詠歌である。この歌によりこの巻が命名されたのであるが、物語本文に返してみると、「なほいと七月十日ばかりのほどに」とし、人々が「けふ秋たつ日にこそあれ」と話す様子が記されている。物語本文の「七月十日ばかり」を「風葉集」の詞書では「ふ月のはじめつかた」と曖昧な表現に改めたのは、恐らくこの「立秋」「秋の初風」の配列の後に九首の「七夕」の歌群を有しているため、その「七夕」の七月七日を意識した上のことであろう。またこの歌の末尾「初秋とつくる也けり」の本文をもつものは「風葉集」のみで、物語本文では「つくるなるべし」となっている。次の<sup>212</sup>から三首は、散逸物語「まよふ琴のね」と「女すゝみ」の歌である。

わかのうちらにおはしましける頃よませ給ひける

まよふきんのねの春

<sup>212</sup> みきはなるあしのうら葉のおときけはひとよの程に秋そきにける

<sup>213</sup> もしほやく烟ひまなきわかのうちらに霧の立ちそふ秋もきにけり

たいしらす

女すゝみの前右大臣の三の君

<sup>214</sup> ほしわふる袖より外におきそへて世さへ露けき秋はきにけり

この三首の末句「秋そきにけり」(212)、「秋もきにけり」(213)、「秋はきにけり」

(214)の配列は、実に見事であると言わざるを得ない。秋の発見、感動そして確認と、秋を待ち焦がれその訪れを喜ぶ微妙な心の変化を、この配列で書き表していると言えよう。

以下、「秋の初風」「七夕」と続き「萩」「女郎花」「藤袴」「花すすき」「刈萱」



のかもし出す霧囲気により詠者の心がいつの間にか寂寞とした心になり、秋の素材「野草」「虫」などをを用いてその心中を託すという霧囲気が先行するものであるが、物語歌はその登場人物が物思いに浸っている間に秋の訪れに気付くといった詠まれ方のように思われる。それ故、「風葉集」では、「秋夕」「秋夜」そのどれをとっても「秋思」と密接につながっており、その数の多さは勿論のこと、物語歌撰集として独自の小世界を描いていると言えるであろう。「秋夕」「秋夜」の歌の多さは、そのまま苦悩する物語主人公達の夜の長さを示していると思われる。

「秋の夕べ」「秋の夜」「秋の夜な夜な」と歌語が展開し、次の「月」の小歌群へと連続させている。その「月」十四首で、秋上部は締めくくられている。特に巻末部の六首は「源氏物語」中の退位した冷泉院が月にその心中を託す歌から始まり、詞書に「御位おりさせ給ひて八月十五夜六条院に聞こえさせ給ひける」と記されている通り、「八月十五夜」でまとまっている。以下、「八月十五夜月くまなきにさかの院にまゐりて」(281 詞書)「おなじ夜」(282・283 詞書)「大僧都いまだわらはに侍るとき八月十五夜ゆるし給はせけるを」(284 詞書)「さかの院のきさいの宮の六十賀の屏風に八月十五夜かりとへる処」(285 詞書)となっている。これは、同じ「月」でも、秋巻末に「月」を置いているのは、「千載集」で初めて試みられて以来、「新古今集」「続古今集」で受け継がれており、「風葉集」もその流れを踏襲したものと見えようである。

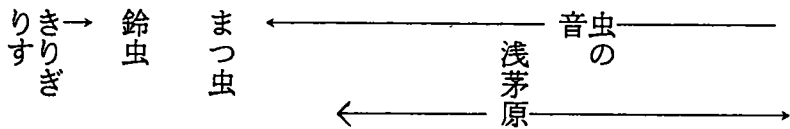
秋下部に存する「九月十三夜」の小歌群と対応して  
いると言えよう。



(291)	(290)	(289)	(288)	287	286	歌番号
袖ぬらす	ゆるみづから悔	萩に宿かる	おやこの中	源氏物語	き風につれなき	物語名
准后	左大将	大将	内大臣	夕霧の左大臣	太政大臣	詠者名
題しらず	侍ける ：雁の鳴きて渡るによみ	( " )	( " )	( " )	題しらず	詞書の要約
浅茅原 虫の音	雲居に渡るかりがね	雲居に雁の告げ	雁の寢覚の声	かりがね	雁の音	歌語
						配  列

次に秋下<sub>下</sub>についてその配列・展開を考えたい。

300	299	298	(297)	(296)	(295)	(294)	293	292
うつほ物語	源氏物語	あさぢか露	親子の中	く もとのしづ		せれう	狭衣物語	うつほ物語
中納言正明	負の命婦	尚侍	内大臣	太政大臣の娘	大將	中納言	嵯峨の院	右大臣
秋のころ女に遣はしける	顔なれば ：草むらの虫の声々催し	き付け侍りける ：夕べながめたる所に書	：虫の音を聞きて	返し	る ：荒れたるところに住むべき女のもとに遣はしける	早う住み侍りけるところ の荒れにけるを：	：一葎の宿を行き過ぎて 「ときこえ給へる御返し	女のもとをいたく荒れたるを分け入るとて
きりぎりす	鈴虫	まつ虫の声	虫の音	浅茅に鳴く虫	音 浅茅が原の虫の	虫の鶉鳴く野 の声々	浅茅が末 虫の音しげき	虫 浅茅原



309	(308)	(307)	(306)	(305)	(304)	(303)	302	(301)
源氏物語	時雨	初音	風につれ なき		水あさみ		源氏物語	かいばみ
勾兵部卿宮	源大納言女	しかまの太政大臣女	女二の宮	一品の宮	家の弁	右大臣の中の君	勾兵部卿宮	右大将
霧深きあしたに女に遣はしける	題しらず	…鹿の鳴くを聞きて…	( “ )	れば…鹿いとあはれに鳴きけ	( “ )	…鹿の鳴くを聞きて	山里に物思ひける人を思ひやりて…	題しらず
鹿朝霧の音	鹿も鳴くなり	しかばかり	秋のあはれ	深山の奥の鹿	しかもろとも	妻恋ふる同じね	夕暮	きりぎりす

鹿

(318)	(317)	316	(315)	(314)	313	312	311	310
のち悔ゆる	めもあはぬ	源氏物語	あだ波	末葉の露	源氏物語		源氏物語	源氏物語
大将の女御	後の宮の弁	六条院	院	東宮の宣旨	女二の宮	夕霧の左大臣	六条院	薫大将
：菊の枝を見よとてたまはせたりければ	：帝菊の枝のおもしろきをたまはせたりければ	物おぼしけるころ菊の花を御覧じて	みこにおはしましける時菊の宴せさせ給ふに：	迷ふ ：荻の上風荒らかに吹き	返し	：霧のただこの軒のもとまで立ち渡れるに：	：霧いたう降りてただならぬ朝ぼらけに：	宇治にまかれりけるに霧いと深く立ち渡りて：
白菊の花	白菊	菊の朝露	白菊の花	夕霧	立つ霧	夕霧	霧な隔てそ	朝ぼらけ霧こめて

(夕霧)
(夕霧)
(朝霧)
(朝霧)

菊 ————— 霧 —————

(327)	(326)	(325)	(324)	(323)	(322)	(321)	320	319
よその	桂	みかきかは	吉野山	いせをの	まよふ琴の音		源氏物語	うつほ物語
	中宮	関白北の方	前左大臣の三の宮	中宮	右衛門督	中納言	按察大納言	六条院
	宇治におはしましけるころ月を御覧じて：	桂に住み侍りけるころ月を見て	：夜深き月に尋ねまうで来て侍りければ	吉野にて月を御覧じて	同じ夜：	( " )	九月十三夜内に参りてよめる	冷泉院の行幸侍りけるに菊を折らせ給ひて：
	月の色かな	桂の里月はすみけり	伏見の里の秋の夜の月	吉野山にすめる月影	くまなき空の月影	秋の夜の月	長月の月	色まさるまがきの菊
(宇治山)	(桂の月)	(吉野山)	(九月十三夜)	(九月十三夜)				

(335)	334	(333)	(332)	(331)	(330)	329	(328)
-------	-----	-------	-------	-------	-------	-----	-------

かいばみ

	ぶいはでしの	四季物語		風につれ なき		源氏物語	思ひ
右大将	関白	鈴虫の少将	月の帝	右大臣	関白	六条院	帝
：明け行く空の月をみて	長月の末つ方：	御返し	四季物語の中に	（ ” ）	九月ばかり：月影に鹿の 声あはれに聞こえ侍りけ れば	ことおぼし出でられけれ ば：	同じころ：
有明の月	草葉に宿る月影 行く秋	有明 虫の声弱る	山の端にかたぶ く月 鈴虫	の月 牡鹿の深山の奥	鹿の 月のすむ峰 声	月影	秋の月 宇治山

(有明月)

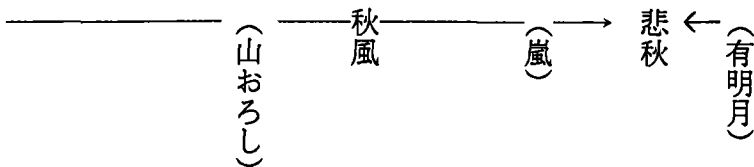
(有明月)

(比叡山)

(比叡山)

(宇治山)

343	(342)	341	340	339	338	(337)	(336)
うつほ物語	玉藻に遊ぶ 権大納言	源氏物語	うつほ物語	源氏物語		道心すすむ	ゝ
帝	関白	薫大将	兵部卿の宮	紫の上	六条院	右大臣	太政大臣の娘
藤壺の女御いまだ参り侍らざりけるころ…	風荒く吹きけるあした…	：荒ましき風のきほひに ほろほろと落ち乱るる木の葉の露…	秋のころ女に遣はしける	返し	秋の野も御覧じがてら…	秋悲不到貴人心といふ心を	返し
秋風の吹く夕暮	吹き払ふ風 白露	山おろしの葉の露	衣打つ置く露に萩の下葉は色付けど	風吹けば色変る浅茅が露	四方の嵐	秋の悲しさ	有明の心尽くし



(352)	(351)	350	349	348	347	346	345	344
心高き東 宮宣旨	巻しづのをだ き	うつほ物語	狭衣物語	源氏物語	源氏物語		うつほ物語	うつほ物語
宣旨	左近の府生	右大将仲忠	帝(狭衣 大将)	冷泉院后宮	大君	薰大将	参議実頼	右大将仲忠
：手習ひしにて侍りける	思ふことありて初瀬にま うでて：	：色濃き紅葉を折りて	：木々の梢も色づきわた るころなりければ：	：長月ばかり箱のふたに 色々の花紅葉こきまぜて 遣はさるとて	返し	：青き枝の片枝いと濃く もみちたるを：	嵯峨院のきさいの宮の六 十賀の屏風にもみち見る 人山辺に：	同じ女御のもとに：
こき交ぜに	紅葉の錦	我がもる枝	梢色増す	紅葉	山姫の染むる心	同じ枝を分きて 染める	折り敷ける秋の 薄(錦)	秋風の萩の下葉 を吹くごとに

(青葉の  
山)

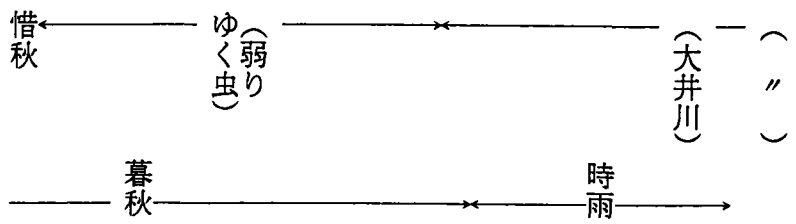
(佐保山)

(志賀)

(紅葉)



(361)	(360)	(359)	(358)	(357)	(356)	(355)	(354)	(353)
秋の夜なが むる	おやこの中	渡らぬ中	風につれな き	のち悔ゆる	一みかきが はら		みふね	
少将	中宮の母	承香殿女御	吉野の院	大将の女御	皇太后宮	春の院	太政大臣	右大臣
紅葉の暮に法輪にまうでし 紅葉の水に流るるを見て	( " )	( " )	題しらず	∴長月ばかりによめる	御返し	∴うちしぐれたる夕べに 奉らせ給ひける	秋の末つ方∴しぐれに袖 のぬれければ	これを見て
紅葉ば流す水 秋の行方	あるかなきかに 鳴く虫 あき果つる	弱りゆく虫の音 秋果つる身	虫の音も秋果て がた	まつ虫 秋の暮れ	時雨の空	染むれども しぐれまちわび ぬれ	やよ時雨 もみじに飽かぬ	色々に



(363)	362			
たゆみなき	風につれなき	中將	吉野の院	
		九月のつごもり…	神無月に参るべしときこ えける人に秋の暮にたま はせける	
の気色を	こよひに限る		暮れぬべき秋を 人は惜しむらん	惜秋
		九月尽		

三

秋下巻頭歌は、

286 雲る行雁のねにさへいかなれは物思ふ袖はかゝるなみたそ  
たいしらす 風につれなきのおほきおほいまうち君

287 さよなかに友よひわたる雁かねにうたて吹そふをきのうは風  
である。この「題しらす」は次の288 散逸物語「おやまの中」、289 散逸した「萩に宿かる」に

もかかっていると思われる。更に次の散逸物語「みづから悔ゆる」歌を含めて、この五首には歌中に「雁の音」「かりがね」等が詠込まれており、巻頭歌群は「かりがね」でましまっていると見える。これは秋上巻末の歌が、

さかの院のきさいの宮の六十賀の屏風に八月十五夜かりとへる処

うつほの侍従なかずみ

285 秋毎にこよひの月を、しむとて初雁かねを聞きならしつる

であり、八月十五夜の「月」とともに「初雁がね」が詠込まれているため、この歌を受けて秋下部巻頭歌は「雁がね」の小歌群が展開されているのであろう。

ただ秋部を上下二巻に分けた先行の勅撰集の秋下部巻頭歌は、次の通りになり、

「古今集」―「あらし」―「秋風」―三首

「後拾遺集」―「砧打つ」―三首

「千載集」―「秋」―四首

「新古今集」―「鹿」―十六首

「新勅撰集」―「九月の月」―十四首

「続古今集」―「鹿」―二十首

秋下部巻頭の展開は、このどれにも当てはまらず「風葉集」独自のものと言って良いであろう。しかもこの「風葉集」秋下部巻頭の四首は前述した通り「題しらず」歌を位置させているのはここだけである。この「題しらず」歌であるが、現存物語歌で調査した限り「うつほ物語」歌以外は独詠歌であり物語本文に返すと読み手の哀れを誘い、その詠者の苦悩に共感し得る歌が多いと思われ<sup>286</sup>。この歌は「風につれなき」の現存首巻中の歌で、

関白の姫君に恋焦がれる権中納言（後に太政大臣となる）だが、姫君のつれない態度に嘆き、独り中門のもとで詠じた歌である。<sup>287</sup>「源氏物語」歌は「少女」の巻であるが、内大臣の怒りに触れ、夕霧と雲居雁は同じ邸内にいながら会うこともできず、一晚中嘆き明かした夕霧がその心中を独白した歌である。どちらの歌も暦日までは示されていないが、物語場面に雁の鳴き渡る姿が描かれ、「風葉集」の季節配列と一致している。もし同様に次の散逸物語歌<sup>288</sup>・<sup>289</sup>の「題しらず」歌二首も独詠とすると、この巻頭歌群は、やるせない思うにまかせられない心中を「雁がね」に託し独り詠じる歌を中心にまとまっていると言えよう。

次の<sup>291</sup>歌から十一首「虫」が続く。このうち<sup>291</sup>から<sup>297</sup>歌までの七首は単なる「虫」で、うち六首は「浅茅原」とともに詠まれている。<sup>292</sup>「うつほ物語」歌の俊蔭の娘に代表されるべく、寄る方なく没落した姫君のもとに高貴な貴公子が好き心から通うようになり、後その姫君が幸福を得るといふプロットは、平安鎌倉期の物語に型を変えつつも枚挙のいとまない程多い。この配列もそれを反映したものと思われよう。以下、「まつ虫」「鈴虫」「きりぎりす」と虫毎に並べられており、先行する勅撰集の型通りである。

「虫」の後、「鹿」<sup>302</sup>、<sup>309</sup>「霧」<sup>309</sup>、<sup>314</sup>「菊」<sup>315</sup>、<sup>320</sup>と、秋を代表する歌材が並べられ、「月」へと導かれている。この秋下部の「月」は、<sup>321</sup>歌詞書に「九月十三夜内にまわりてよめる」と記されている如く秋上部の「八月十五夜」とは異なり、「九月十三夜の月」をめだ歌で始まり、以下名所の月となっている。<sup>324</sup>歌が「吉野山」、<sup>325</sup>歌「伏見」歌「桂」、そして<sup>327</sup>・<sup>328</sup>歌が、「宇治」である。秋上部では「千載集」に、秋

下部では「続古今集」の「月」の歌群に「更科」「桂」「明石」等「月」の名所が置かれているのを先例としてみる事ができよう。「風葉集」では続いて「懐古の月」や「鹿」・「鈴虫」と組み合わせられた「月」と続き、「有明の月」を示して「月」の歌群は締め括られている。

<sup>337</sup>の散逸物語「道心すすむる」歌は詞書・歌より「秋悲」として位置し、次の<sup>338</sup>「源氏物語」歌から<sup>344</sup>の「うつほ物語」歌まで七首は、「秋風」としてまとめられている。「秋風」と言っても、「四方の嵐」(<sup>338</sup>歌中)、「風」(<sup>339</sup>歌中)、「山おろし」(<sup>341</sup>歌中)「ふきはらふ風」(<sup>342</sup>歌中)、「秋風」(<sup>343</sup>・<sup>344</sup>歌中)と、木の葉に置く露を吹き散らす強い風として並べられ、秋上部の萩の葉をそよそよと揺らす、秋を告げる秋風とは異なっている。

以下「紅葉」十二首と続くが、この「紅葉」も初めは「源氏物語」「総角」の巻で薫と宇治の大君の贈答歌より、一本の枝の片方だけが紅く染まっている紅葉を示し、<sup>349</sup>の「狭衣物語」歌で「梢色増す秋の夕くれ」(<sup>349</sup>歌中)と紅葉の色付いていく様子を順を追いつている。更に<sup>354</sup>歌中から三首は、その紅葉を散らす無情の時雨を並べ、紅葉の景の変化する姿を丁寧に時間を追い置いている。<sup>357</sup>から六首は「暮秋」としてまとめられようか。<sup>357</sup>歌は「人まつ虫」そして「虫の音も秋果てがた」(<sup>358</sup>歌中)「弱り行く虫の音」(<sup>359</sup>歌中)「あるかなきかに鳴く虫」(<sup>360</sup>歌中)と、冬に向かい弱りがちな虫の姿と暮れ行く秋の景色を表現している。<sup>361</sup>歌で散り果て水に流れる紅葉に秋の行方を問い、<sup>362</sup>歌では「暮れぬべき秋をや人は惜しむらん」と秋を惜しむ歌へと続く。

そして秋下部巻末歌は

九月つこもりつれなかりける女のもとにまかりてよめる　たゆみなきの中將

363 いて、みよさこそつらさはつきすとも今夜に限る秋のけしきを

である。この散逸物語「たゆみなき」歌は、詞書に「九月つごもり」歌中に「今夜に限る秋のけしきを」と、明日からは冬・神無月であることを意味し、この歌材は、「九月尽」と言うべきか。「古今集」秋部巻末で「長月のつごもりの日大井にてよめる」、同じく「後撰集」で「長月のつごもりの日：」以来の勅撰集の型通りの詞書の附し方であり、忠実に踏襲していると言つて良いであろう。

以上、秋上下部の配列を考察してきたが、凡そ先行する勅撰集の配列の大枠内に納まっていると言える。ただ秋下部巻頭歌群が「雁がね」で始まり、先例がない点独自の配列と思われる。また、「千載集」に初出し、以後の勅撰集では十首前後は採られている「砧打つ」という歌が、<sup>340</sup>「うつほ物語」歌のみで他は見受けられないこと。また同様に「後拾遺集」秋上部に初出して以来勅撰集に数多く採歌されている「鶉鳴く」も、<sup>294</sup>散逸物語「せれう」のみであることが、勅撰集との相違として挙げられよう。思うにこの二つの歌材は、作り物語の中で登場人物によって詠まれることが少なかつたためではあるまいか、『物語和歌総覧』の索引で「砧」「衣打つ」「鶉」を調査しても、「風葉集」に入集しているこの二首のみで、他は御伽草子の類に何首か見出せる程度である。恐らく採歌しようとしても、当時存した物語にも少なかつたのではないだろうか。

歌番号 (風)	詠者名	巻名	歌番号 (源)	「源氏物語」 中での暦日	「風葉集」詞書の要約	配列
------------	-----	----	------------	-----------------	------------	----

文月の初めつ方…

次に各物語歌を物語本文に返した場合の問題点について考えてみたい。「源氏物語」は、秋上部に十三首、秋下部に十七首合わせて三十首もの多きにわたり歌が採られている。同じく上下合わせて二十五首を含む春部は、その主要な歌材が、「梅」「桜」であることから、物語に返しても季節・暦日と配列上の矛盾はあまり見られないが、秋上下部は部自体歌材が多い。また部の歌数との割合からみると、「源氏物語」歌の占める割合の一番多い部は哀傷部である。次いでこの秋上下部であるが、これは桐壺の更衣・葵の上・紫の上・八の宮と主要人物の死や思い出が秋に語られているためと考えられる。つまり秋部はそれだけ選歌の対象となる歌が多いと思われる。次の表は、秋上下部で採られた「源氏物語」歌を、部の配列順に並べ、物語へ返した場合の暦日を示したものである。配列で記されている詞書の要約、そして他の物語で示されている秋部の暦日も引用しておいた。

四

257	256	253	252	247	243	236	233	230
光源氏	浮舟	小野の尼		光源氏	勾宮	夕霧	桐壺帝	薰大将
薄雲	〃	手習		夕顔	宿木	夕霧	桐壺	蜻蛉
306	779	772		28	716	535	2	761
秋司召しの後	九月になりて	八月十余日の程		秋(八月十五夜より以前)	ぎ九月二十余日過ぎ	八月二十日過ぎ	秋	秋
∴春秋いづかたにか御心寄せ侍るべからんと∴	て∴秋の夕暮思ひ出づること多く	∴「また萩原の露にまどひぬ」といひけるかへし	八月ばかり	∴前裁の色々乱れたるを∴	前裁の中に尾花のまだ穂に出でさしたるも∴	∴「しをるる野辺をいづくとして」と申して侍りければ∴	野分だちたる夕べ∴	∴秋の夕べ描きたるに思ひ寄せらるることをやありけん∴
〃	秋の夕べ	秋の野辺		朝顔	(穂の出ぬ)花すすき	秋の野草	萩	秋風・萩

七月七日



299	287
婦鞠負の命	夕霧
桐壺	少女
3	324
秋	秋
ば：草むらの虫の声々催し顔なれ	題しらず
鈴虫	雁がね

秋下部

280	277
冷泉院	
鈴虫	
524	
八月十五夜	
せ：八月十五夜六条院にきこえさせ給ひける	
五月(八月十五夜)	

八月ばかり：

270	265	259	258
将昔小野の尼 の婿中	光源氏	明石の上	中の君
手習	葵	野分	宿木
270	126	386	705
九月になり	衣更も過ぎ葵の上の喪(十月十日)も過ぎ	日 八月の野分の翌	八月十六日
：月出でてをかしきほどに：	風荒らかに吹き時雨したる夕べ	野分の朝よめる	：のどかに吹きくる松風の音も
秋の夜	”	”	”

321

323

320	316	313	312	311	310	309	302
〃	光源氏	女二宮	夕霧	光源氏	薫大将	〃	勾宮
藤裏葉	幻	〃	夕霧	賢木	橋姫	〃	椎木
455	582	527	526	142	626	640	638
十月二十日過ぎ	九月九日	〃	八月廿日ばかり 中の	九月十六日	秋のすゑつかた	〃	八の宮の忌果て 九月二十日頃
冷泉院の行幸侍りけるに菊を折 らせ給ひて	菊の花を御覧じて	返し	霧のただこの軒のもとまで立 ち渡れるに	霧いたう降りてただならぬ朝 ぼらけに	宇治にまかれりけるに霧いと深 く	霧深きあした女に遣はしける	山里に物思ひける人を思ひやり て
〃	菊	〃	〃	〃	霧	鹿・霧	鹿

363

348	347	346	341	339	338
秋好中宮	大君 〃	〃	薫大将	紫の上 〃	光源氏
少女	〃	総角	橋姫	〃	賢木
366	673	672	625	151	150
九月	〃	八月二十余日	秋のすゑつかた	〃	秋二十日の月 (以前)
…長月ばかり	返し	…青き枝の片枝いと濃くもみぢたるを…	…荒らまほしき風のきほひに…	返し	秋の野も御覧じがてら…
〃	〃	紅葉	山おろし	〃	四方の嵐

九月つこもり…

334

329
光源氏
賢木
155
秋二十日の月
…月はなやかなるに…
月

長月の末つ方…

● 「源氏物語」の歌番号は『新編 国歌大観』に依る。

この表を一見すると、「源氏物語」と言えども、物語内での暦日は無視され、「風葉集」秋部を構成する一首の歌として配されていることが理解できよう。同じ巻の歌でも「夕霧」の巻の<sup>535</sup>(『新編 国歌大観』番号)歌が秋上部に、<sup>526・527</sup>(『同』)歌が秋部に、また橋姫の巻の<sup>626</sup>歌が<sup>625</sup>(『同』)歌より先に並べられている。更に賢木の巻の<sup>150・151</sup>(『同』)の贈答歌の前に<sup>155</sup>(『同』)歌が置かれているなど、「源氏物語」中の場面は解体され、どの歌も配列に則り並べ替えられている。無論、この配列が、「花萼」二つにしても穂の出ぬ前から風になびく姿、片側から色付く紅葉の枝の姿などが歌材毎に束ねられているため、同時に進行する季節が平面上に並べ置かれていることも一因として挙げられようが、それだけでは説明がつかない。物語場面やストーリーよりも、歌語による配列展開のためと考えた方がやはり理解しやすいと言える。しかも詞書を読み進めただけでは物語に返した場合の暦日の矛盾には気付かない。詞書は配列鑑賞を味わうべく工夫され、潤滑油の様な役割を果たしていると言えよう。

この中で特に注目されるのは、物語に返した場合暦日では冬の歌が二首存在するところである。「風葉集」秋<sup>下</sup>巻末歌は前述の通り、「九月つごもり…」と詞書が附され、歌にも、「今夜に限る秋のけしきを」と「九月尽」で締め括られている。また冬部巻頭歌も

神無月のついたちに「たくひなくうきわかれちの袖のうへにいとふりそふ初しく

れ哉」といへる人々のへし

たゆみなきのふちつほの女御

364 たくひなく物思ふ人の袖のうへにけさをわきける時雨ともみす

と、「神無月のついたちに」（詞書）で始まることから、暦日では十月一日から冬として  
いると言える。ところが265と320の「源氏物語」歌は、物語場面では十月に入って後の歌と  
思われる。

風あらゝかにふき時雨したる夕へけふのあはれはみしるらんとおほす人のもとにつ  
かはさせ給ひける  
六条院御歌

265 わきてこのくれこそ袖は露けゝれ物思ふ秋はあまたへぬれと

冷泉院の行幸侍けるにきくををらせて給てむかしの青海波のをりををおほしいて、

六条院御歌

320 色まさるまかきの菊もをりをりに袖うちかけし秋をこふらし

265 歌の物語場面は、八月二十日余りに葵の上の御葬式があり、源氏は四十九日の正月まで  
は左大臣邸に籠もっていた。時雨降る十月に入り、衣更の時期となっても源氏は「こまや  
かなる夏の御直衣に、紅のつややかなる、ひき重ねてやつれ給へるしも、見てもあかぬ心  
地ぞする」と、まだ薄色の喪服に着替えないのである。霜枯れの前裁を見、ふと朝顔の宮  
に消息を遣わされる。その中の歌である。源氏の心の時刻は、「物思ふ秋」と葵の上を

失った秋でとまっているのであろう。諸注ほぼ一致して歌中の「このくれ」を「秋の暮れ」と訳出している。

同様に20歌は「神無月の二十日あまりのほどに、六条院に行幸あり」で始まる、冷泉院の行幸の折の歌である。かつて朱雀院行幸の折、若き光源氏は青海波を舞った。今は太政大臣である頭中将が、源氏のかざしに付けた紅葉が散ったので菊を手折って差し替えてくれた―その時を思い出し、また懐しんで自らもまた今菊を手折り詠るのである。歌中の「袖うちかけし秋」は、冷泉院行幸の秋ではなくその青海波を舞った朱雀院行幸の秋のことである。この「紅葉賀」の巻の朱雀院行幸は十月余日のことで、十月に入っているが、田中新（佐五）一氏によると、節月観の「秋」の範圍に留まっていって問題はないと述べておられる。巻の名を示す如く紅葉の盛りに催され、光源氏の青海波と共に承香殿の御腹の四の御子も秋風楽を舞い人々を感涙させている。「源氏物語」の作者自身も冬の暦日を示しつつ、秋の行事として記していると思われる。

以上のようにこの二首の「源氏物語」歌は、物語本文で十月の記として描かれていても、「物思ふ秋」は葵の上を亡くした秋であり、「袖うちかけし秋」は朱雀院行幸の紅葉の宴での秋であり、作者自身も秋として物語を展開させていると言える。「風葉集」撰者は、「源氏物語」本文を正しく読解し秋の部に入れたのであり、物語本文を曲解して部や配列上異なる位置に配したのではないと思われる。今までの論考で、物語に返した場合部や配列の範疇に入らない歌を幾つか指摘したが、果して和歌歌壇において尊ばれた「源氏物語」歌においても当てはまるのか、他の物語と重んじられ方に相違があるのかどうか、他部を分析した上で結論を導きたいと思う。

## 結語

以上、秋上下部の配列と物語本文に返した場合の問題を論じてみた。配列として秋上部は「うつほ物語」歌の、「今日初秋と告ぐるなりけり」と立秋を詠じた歌に始まり、その次に置かれている三首は末句「秋ぞ来にけり」「秋も来にけり」「秋は来にり」の歌が並び、実に見事な配列と言える。以下秋の「初風」「七夕」「萩」「秋の野草」「女郎花」「藤袴」「花すゝき」「刈萱」「朝顔」「露」と続き、「秋の夕」「秋夜」を詠込んだ「秋思」の歌十六首が並べられている。そして秋上巻末は「八月十五夜」を基調とした「月」十四首で締めくくられている。秋上巻に「月」の歌群を位置させているのは、先行の勅撰集としては「千載集」「新古今集」「続古今集」であり、「風葉集」もまたその型通り配されていると言えよう。

秋下部は「雁がね」の小歌群から始まっている。巻頭に「雁」を置いている集は、先行の勅撰集に例がなく、独自の配列と言えよう。以下、「虫の音」「まつ虫」「鈴虫」「きりぎりす」「鹿」「霧」「菊」「月」と続く。その、「月」については、秋上部の「八月十五夜」の「月」とは異なり「九月十三夜」に始まり、名所での月を詠んだ歌を含み、これも勅撰集の型通りである。そして「秋悲」「秋風」「紅葉」「時雨」「暮秋」となし、巻末は「九月つごもり」で秋の部の幕を下ろしている。

また物語に返した場合、配列との問題では、秋上部巻頭の「うつほ物語」歌が、物語本文では「七月十日ばかり」頃詠まれたものだが、「風葉集」の詞書は、「七月のはじめつかた」と後の「七夕」（七月七日）の小歌群を意識し、曖昧な表現に改められたと考えら

れること。「源氏物語」歌についても物語に返すと、場面の順序やストーリーも無視され、「風葉集」独自の配列に准じ並べられていること。ただ物語で十月に入って詠じられている二首は、物語鑑賞の立場で見ると「秋」の歌と考えられ、秋部の概念から隔たっている歌ではないと言えよう。他に、物語本文が存しており、配列との矛盾は考えられないのに「題しらず」と詞書の附された歌などが引き続き問題として浮かび上がっている。他の部を調査し結論を出したいと思う。

〈注一〉この245歌、「うつほ物語」の本文では「さきに立給へる人」として詠者に

ついて明記はない。岩波古典文学体系『宇津保物語』の頭注では、若子君の兄としている。「風葉集」の「おほきおほいまうち君」では太政大臣で若子君の父となり、物語解釈の問題もでてこよう。

〈注二〉「題しらず」歌については、本稿第十章『風葉和歌集』の『よみ人しらず』歌『題しらず』歌について参照。

〈注三〉久曾神昇・樋口芳麻呂・藤井隆三氏共編『物語和歌総覧』昭和五十一年十月 風間書房。

〈注四〉山岸徳平氏校注、岩波日本文学大系『源氏物語一』。玉上玖弥著『源氏物語評釈』。阿部秋生・秋山虔・今井源衛三氏校注、小学館日本文学全集『源氏物語二』。石田穰二・清水好子両氏校注、新潮日本古典集成『源氏物語二』など。

〈注五〉『平安朝文学に見る二元的四季観』平成二年四月 風間書房。





第四節 冬部

更に冬部について、その配列・構成について考えてみたい。冬部の配列の展開を示す一覽表は次の通りである。

歌番号	(364)	(365)	(366)	(367)	368
物語名	たゆみなき	朝倉	かいばみ	女すゝみ	
詠者名	藤壺の女御	皇后宮の内侍	右大将	左大将	勾兵部卿宮
詞書の要約	神無月のついたちに…	題しらず	女のもとより帰りて…	色…しぐれがちなる空の気	神無月のついたちころ…
歌語	袖・時雨	袖・時雨	袂・時雨	時雨 あきはてし	秋果てし
配列	初→ 時雨				秋果てし →

377	(376)	375	(374)	(373)	(372)	(371)	(370)	369
夜の寝覚	れ長月のわか	狭衣物語	うもれ木	やとりかへば	四季物語	あまやどり	やとりかへば	源氏物語
関白	帝	将帝(狭衣大)	少将	臣さきの太政大	時雨の式部卿のみこ	太宰権師重康	みてものの聖	右衛門督
た：常よりもしぐれ明かしたるあしたに遣はしける	遣はさせ給ひける	ば：にはかに曇りしぐるれば	：うち曇りしぐれたれば	う神無月ばかり、時雨いたする日	四季の物語の中に	：紅葉の散るを見て	題しらず	”
時雨の音	袖時雨	涙時雨	涙しぐるる袖の上かな	涙時雨	紅葉は散りぬる	木枯し紅葉ば	秋果てて四方の嵐・木の葉	秋は行きけん紅葉の蔭

(時雨の音)

時雨



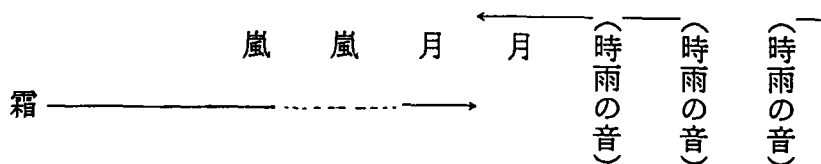
散紅葉

散紅葉

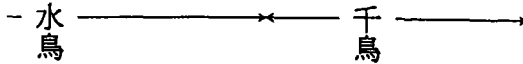
木の葉

紅葉

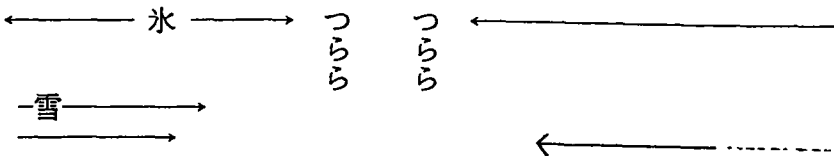
(386)	385	384	(383)	(382)	(381)	(380)	(379)	(378)
四季物語	狭衣物語	うつほ物語	みなせ川	みふね	あひずみ苦 しき	をぐるま	うたたね	おもかげこ ふる
み萩の内侍のか	帝(狭衣大 將)	修理大夫忠章 女(宮内卿忠 保女)	新中納言	太政大臣	源大納言三の 君	麗景殿の女御	后宮	三位中將
四季物語の中	：尾花がもとの草も露深 くなりゆくを御覽じて	：少將仲頼水の尾にこも りゐて侍りける後に：	：冬のころ遣はしける	：ただ帰り侍りける道に 月を見て	：月にはかにかき曇りて しぐるるを見て	：時雨を聞き明かして	：時雨の音まことに聞き なされさせ給ひて	題しらず
朝霜 霜	霜枯れて 道芝の露	霜置く山の嵐	峰の嵐	霜月	時月 雨	おとづれの絶え ぬ時雨	音絶えぬ時雨	時雨の音



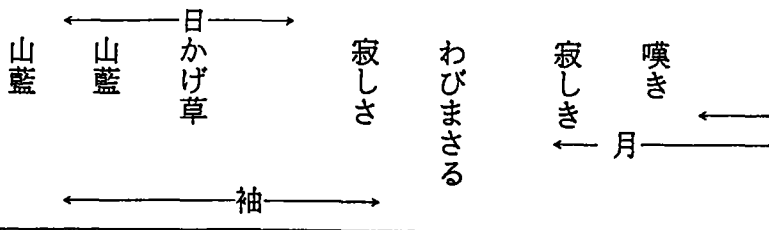
395	394	393	392	391	390	389	388	387
うたたね	おやの中	しもにすむ	しぐれ	源氏物語		うつほ物語	みかにはに咲ける	
帝	内大臣	権中納言	中将これすけ	中の君	薫大将	権中納言忠能 (忠澄か)	女院の御匣	関白
池に水鳥どもの遊ぶを御 覧じ出でて	うらやましく見て 池の水鳥の番離れぬを	きて 水鳥の声をあはれに聞	千鳥の鳴くを聞きて	返し	宇治にてよみ侍りける	嵯峨院のきさいの宮の御 賀の屏風に	返し	女のもとより帰りたる人 に代わりて
かものうきよ	氷閉ぢたる をし鳥	凍る 驚	さよ千鳥	千鳥 暁の霜	千鳥 霜さゆる	氷魚 (多くの冬を)	冬の日 あしたの霜	朝霜 冬の日



(404)	403	(402)	(401)	(400)	(399)	(398)	(397)	396
しあさわけ	源氏物語	夕霧	あささわわけし	四季物語		われから	はしたか	狭衣物語
関白	紫の上	二のみこ	関白	鴨の帥の宮	鳩の君	播磨の守	按察大納言	帝(狭衣大将)
詩歌など奉り侍りけるに	雪の降り積もれるに、月の氷えもいはずすごきに	女に遣はしける	かして忍びてまかりて嘆き明	〃	四季物語の中に	相添ひて侍りける女の	池のをしの鳴くを聞き	池に立ちゐるをしの音なひも同じ御心におぼされければ
池の水 月影	氷閉ち 月の影	袖に氷りつつ	袖のつらら	つらら 浮き枕	にはの浮き巢	霜をし	をし鳥 さゆる霜夜	をしのうきね



(413)	(412)	(411)	410	(409)	408	407	(406)	(405)
物語名不詳	みかきが はら		源氏物語	おやこの中	狭衣物語	源氏物語	つまこひか ぬる	、
五節(?)	大納言典侍	右大臣 (右大將か)	夕霧	内大臣	帝(狭衣大將)	六条院	三位中將	頭中將
忍びたる男の臨時の祭りの舞人にて渡りけるに:	まことに置きたるけるにや:	豊の明りの節会に:	五節の舞姫に遣はしける	女のもとにたびたびまかりて:	吉野川のわたりにてみぎはの水閉ぢ込めて:	薄雲の女院かくれ給ひて後:恨みたるさまにて夢に見えさせ給ひければ	題しらす	、
山藍の衣	山藍の袖 日陰草	日陰草かざす袖	天の羽袖 日かけ	片敷きの袖 寂しさ	水の下 わびまさる	寂しき冬の夜	嘆きわび 冬の夜の月	雪降りしける 夜半の月影



(422)	421	420	419	(418)	(417)	(416)	(415)	414
ふたよの とも	落窪物語	浜松中納言 物語	浜松中納言 物語	めもあはぬ	水あさみ	末葉の露	藻海人の刈る	源氏物語
上人	よみ人しらず (屏風歌)	中納言	中納言	右大臣	左兵衛督	右大臣	権大納言	中の君
雪の朝に：	大納言忠頼の七十賀の屏 風にある所に雪高う降れる家	吉野に住み侍りける人に 遣はしける	：雪の降りければ	：日ごろ心もとなかりけ る雪、かき暗し降りて：	：あられの降りければ	：あられの音のおどろお どろしきを聞きて	世を逃れむとて出でける 道に：	夕暮の空の気色いとすこ うしぐれたる日：
降る雪	雪深く 山里	吉野の山の雪の 深さを	吉野の山 雪	山深く 雪	あられ	あられ	あられ降る深山 の里	あられ降る深山 の里

— 雪 ————— ×————— あられ —————→

(吉野山)  
(吉野山)



(431)	(430)	(429)	(428)	(427)	426	(425)	424	(423)
しのぶ		玉藻に遊ぶ 権大納言	四季物語	かはほり	浜松中納言 物語	吉野	源氏物語	、
新大納言	院	朱雀院	雪の帝	少将	中宮(中の君)	女院	明石の上	上人
まつりしことなど思ひ出 でられし 雪御覽せし御供つかう	ひける 雪の降る日遣はさせ給	ける 雪の朝に遣はさせ給ひ	四季物語の中に	雪の降る日、ひぐらしな がめて帰るとてよめる	同じ山に住みて	吉野山にて雪の降る日よ ませ給ひける	に 雪かき暗し降り積もる	〃
みゆき 小塩の山	白雪 高野山	雪	白雪	雪ふるさと	み吉野の雪	雪積もるらん	雪深き深山の里	降る雪

(高野山)  
(小塩山)

(吉野山)  
(吉野山)

440	(439)	(438)	(437)	436	435	434	433	432
源氏物語	ふきこす風		かやが下 折れ	狭衣物語		源氏物語	源氏物語	
六条院	宰相中將	関白	宣耀殿の女御	齋院 (源氏宮)	後一条院	大君	六条院	冷泉院
仏名などことしばかりにこそはとおぼしめして…	雪の降る日遣はしける	返し	…雪の積もりたる暁の空をいざなひて見せ侍りける	御返し	…雪いたく積もりて…	雪のうちに薫大将まで来て…	御返し	六条院太政大臣にもものし給ひける時…
雪のうちに色づく梅	雪の気色を	雪消え残るべき身	白雪の消え返り	雪の消えも果てなで	白雪の消え返りつつ	雪深き山	小塩山 みゆき積もれる	雪深き小塩の山

→ 仏名

(小塩山)  
(小塩山)

443	442	441
我身にたど る姫君	うつほ物語	、
皇后宮の宰相 (宰相の君)	右大将仲忠	御導師
年の暮れによめる	嵯峨院の後の宮の御賀の 屏風に仏名したるところ	御返し
雪降りて 暮れゆく年の数 ごとに	千代もますらん 仏の数	千代の春 雪
←		
←		←
暮歳		

冬部巻頭歌は、散逸物語「たゆみなき」歌であるが、

神無月のついたちに「たくひなくうきわかれちの袖のうへにいとふりそふ初しく  
れ哉」といへる人のかへし  
たゆみなきのふちつほの女御  
364 たくひなく物思ふ人の袖のうへにけさをわきける時雨ともみす

詞書に「神無月のついたちに」とあり、また歌中に「今朝を分きける」、つまり冬になつた今朝を境にしてと「立冬」を示しており、勅撰集の通例通りである。次に<sup>365</sup>散逸物語「朝倉」歌では「しぐる袖に神無月空さへ」、<sup>366</sup>散逸物語「かいばみ」歌には「神無月しぐれざりせば」と詠み込まれ、「神無月」と「時雨」を含む歌を並べている。そして「秋果てて」という歌語、及び「散紅葉」を歌材とした歌五首が置かれ、秋部との脈略に配慮しながら、秋から冬への微妙な季節の推移を配列に再現していると言えよう。

以下、「時雨」「霜」「千鳥・水鳥」「氷」「月」「霰」「雪」「仏名」「暮歳」と冬の季節を示す歌材が、巧みに時の流れの足跡を見つめる如く置かれてゐる。ただ先行する勅撰集と比すと「落葉」に関する歌は、わずか二首(371、372)のみで、十首前後は入集されている勅撰集の通例からするといささか少ない様に思われる。『物語和歌総覧』の五句索引で「落ちる」「散る」「枯葉」「落葉」等で引いても、非常に少ないことから作り物語にはこの種の「落葉」に関する歌が少なかったのかも知れない。

他にこの配列の中で特に注目されるのは、後半の「月」と「あられ」の間にある、新嘗祭に関する詞書を持つ三首と、巻末近い配列の「仏名」の小歌群であろう。

—

まず新嘗祭に関する詞書をもつ三首について考えてみたい。

五せちのまひひめにつかはしける

夕きりの左大臣

410 ひかけにもしるかりけりなをとめのかあまのはそでにかけし心を

とよのあかりの節会にをみにて侍けるにまかつとて有明の月のおもしろくさえわたれるに  
みかきかはらの右大臣

411 めつらしき豊のあかりのひかけくさかさす袖にも露はおきけり

まことにおきたりけるにうちはらへるけはひをかしかりければ

大納言典侍

412 ひかけくさかさすにいと、霜さえて氷やむせふ山あるの袖

三首ともに、新嘗祭などの祭礼奉任の物忌のしるしとて冠に差す日陰のかずらが「日かげ」或は「日陰草」として詠み込まれている。詞書にも「五節の舞姫」「豊明の節会」と記されているが、この宮中の重要な行事である新嘗祭は普通陰曆十一月の中の日、豊明節会は辰の日、丑寅の両日には豊明節会に舞う五節舞姫のための帳台の試、御前試などが行われる。冬を代表する宮中行事のほずであるが、勅撰集冬部に入集されているのは、八代集では「金葉集」(一首)のみで、次は「統後撰集」まで採られていない。宝治二年後嵯峨院に詠進された「宝治百首」に「冬十首」として「豊明節会」が題に加えられており、この頃から意識されるようになったのであろう。「統後撰集」「統古今集」(二首)そして「風葉集」後の「統拾遺集」(三首)と続けて入集されており、後嵯峨院歌壇の勅撰集で定着し始めたと言えるであろう。この系譜を「風葉集」も受け継いでいるわけである。

また次の物語名不明歌(413)は、詞書から察すると、十一月末の酉の日に行われる賀茂の臨時の祭の折ゆのものであろう。この様にみると、「風葉集」四季部は、勅撰集に比して年中行事をその配列により多く組込んでいると思われ、物語歌集としての一つの特徴、或は独自性と言えると考えられよう。

次に巻末近くに位置する「仏名」にかかわる歌三首をみてみたい。

仏名などことはかりにこそはとおほしめして御導師のさかつきの御ついでによませ給ける  
六条院御歌

440 春まてのいのちもしらす雪の内に色つく梅をけふかさしてん

御かへし

御導師

441 千世の春みるへき花と折置て我身そ雪と共にふりぬる

さかの院のきさいの宮の御賀の屏風に仏名したる所

右大将なかつ

442 かけて折る仏の数しおほければ年に一たひちよもますらむ

この三首は詞書の書かれ方から考察して、「仏名」としてまとまっていると思われる。仏名会は、十二月十九日から三日間宮中や諸寺院等で仏名経を誦し、過去・現在・未来の三世の諸仏の名号を唱えて一年間の罪障を懺悔する法会である。これにより罪を消滅させ、新しい年を迎えるために行う儀なのである。<sup>440</sup><sup>441</sup>の「源氏物語」「幻」の巻の贈答歌は、最愛の妻紫の上を亡くし、自らの身辺整理もすませ、「御仏名も今年ばかりにこそ、と思せばにや、常よりもことに、錫材の声々などあはれにおぼさる…」と行つたものである。「春まで命があるかどうか…」と現世への訣別の気持を込めて詠じる光源氏と、君の永遠なる御栄えを祈る御導師の返歌であり、「源氏物語」正編の幕はもうまもなく下ろされるのである。<sup>441</sup>の「うつほ物語」歌は、「風葉集」にその十二月十二首のうち七首も採歌されている嵯峨院后宮の御賀の月屏風の歌である。物語本文では、四・五句が「としにひ

かりや千代もさすらん<sup>（註二）</sup>」となっている。「恵の光は千年も注ぐだろう」の意であるが、「風葉集」本文だと「年に一度であつても（御寿命は）千年も延びるでありましよう」となり、前歌「源氏物語」の御導師の詠じた歌を受けて、君の長寿を祈る意となると思われる。ただ、「うつほ物語」一部本文に「ひかりや千代もますらん」も存し、「風葉集」独自本文ではない。この「仏名」という歌題であるが、勅撰集冬部において「拾遺集」冬部卷末近くに四首連続して位置しているものの、他の集には全くみられないものである。勅撰集には定着していないと言いつけるであろう。無論「六百番歌合」冬部には題として採用されており、歌題としての「仏名」は目新しいものでないが、配列を味わう歌集としてその流れをみた場合、一つの特筆すべき特色と言えらるであろう。

### 結語

以上、冬部についてその配列と、先行する勅撰集との比較からいささか卑考を加えてみた。冬部については、まず巻頭に「神無月のついたちに」という詞書をもち、かつ「立冬」を詠み込んだ歌を置き、「時雨」「霜」「千鳥・水鳥」「月」「新嘗祭」「穀」「雪」、そして「仏名」「暮歳」と配列されている。これらは、やはり勅撰集冬部の配列をほぼ踏襲していると言える。その中で、「新嘗祭・豊明節会」に関する詞書を持つ小歌群は、「続後撰集」「続古今集」頃から冬部に登場したもので、この「風葉集」もその系譜の上に立っていること。また「仏名会」にかかわる詞書の有する小歌群は、先行する勅撰集では「拾遺集」だけであるにもかかわらず位置させているのは、「風葉集」冬部の一つ

の特色と言えるであろう。

〈注一〉久曾神昇・樋口芳麻呂・藤井隆三共編『物語和歌総覧』昭和五十一年十月

風間書房。

〈注二〉流本系の一部（大橋長憲本・新宮城書蔵本）異本に存する。

#### 四季部まとめ

四季部は、季節の移ろいを配列で再現するという大前提がある。花の蕾がふくらみ、花が咲き、虫が鳴き、鳥が飛びかう。そして更衣等に始まる季節毎の行事・節会・祭など。これらはその季が巡って来れば繰り返されるもの故、逆に四季部の配列には自と限界があると言って過言はないであろう。花の開く順は、狂い咲きこそまれくにあれ、古今を通じて定まっている。各勅撰集の四季部もこの制約を受け、しかしその中で何らかの独自性を持とうと撰者達は苦心してきたに相違ないであろう。「新古今集」で始めて冬部が着目されたものの、やはりその配列構造は凡そ類似したものとなっている。

「風葉集」においても、四季部の配列は春・夏・秋・冬どれも先行する勅撰集のそれと大差はない。歌材・配列ともに際立った差はみうけられない。春下（巻二）部巻頭歌においては、「新古今集」で打立てられた勅撰下命者の歌を置くという形式を、「続古今



集」春下（巻二）部巻頭歌の後嵯峨院詠の歌に模した物語歌を並べること、丁寧なその型を踏襲している。また秋部では、「源氏物語」と言えども物語内での暦日や話の筋道は無視され、「風葉集」秋部を構成する一首の歌として配している。忠実に勅撰集に準じ、配列を展開させようとの工夫であろうがその中で、わずかであっても「風葉集」のみの歌数の増化のみられるものA、或は勅撰集で定着していない、あまり用いられていない歌題の存在Bが指摘できる。これらは、「風葉集」撰者が苦心の末編み出した物語歌撰集「風葉集」らしさ、つまり独自性と言って良いであろう。四季部においての、夏部の「賀茂祭」「あやめ草」はAであり、秋部の「秋思」もA、そして冬部の「仏名」はBと思われる。春部は、勅撰集同様「梅」「桜」を主とした配列故、際立った増減は見受けられない。「加茂祭」「あやめ草」「秋思」「仏名」、加えて「続後撰集」で始めて採用された「新嘗祭」に関する小歌群と合せて考えてみると、「秋思」を例外として、「風葉集」は年中行事をその配列により組んでいる傾向が伺えよう。「賀茂祭」「あやめ（節会）」「新嘗祭・豊明節会」そして「仏名」を並べると、作り物語に必ず描かれている行事ばかりである。主人公達は各行事を機縁として見初め、文を交したり互いの気持ちを確認したりし、物語は展開する。自らの心情を「葵」の「逢ふ日」や、「浮き根」の「浮き音」を借りて詠じる―どれも物語の進行にはなくてはならぬものである。更にその時間的経過を示し、季節を感じさせるものであり、しかも宮廷行事の華麗な描写は読者に興味を抱かせたであろう。自然、物語中のその場面で詠じられた物語歌も多いであろう。

以上の様に考えてみると「風葉集」四季部で勅撰集と比して指摘した幾つかの歌材は、そのまま年中行事を主たる柱とした「風葉集」四季部の構造として結びつけることができ

よう。そして更に、秋部の「秋思」を加えることにより、男女主人公が四季に託した喜怒哀楽の感情を集めた物語歌の集として一つの側面を見ることができであろう。



### 第三章

#### 神祇・釈教部の構成

##### 第一節 神祇部

勅撰集の部立構成において、神祇・釈教両部が深い関係にあることは、すでに指摘されている通りであるが、「風葉集」においてもまたその例にもれない。この両部をもって一巻としてあるだけでなく、その構成においてもきわめて対照的であり、勅撰集の型を忠実に継承していると考えられる。「風葉集」の神祇部は、その配列によって大雑把に三つの歌群に分割できると思われる。(一)、神詠・夢告の歌を中心とした歌群(十四首)(二)、各神社を中心とした歌群(十九首)(三)、八方の神にまつわる歌群(五首)で、各々小歌群に分けられる。

—

まず第一歌群(歌番号 44 (注二) 45) 十四首は、神詠・夢告の歌を中心としたものである。こ

の十四首もその内容から詳しく考究すると更に細分され、(A)神への祈念に対する神の託宣十一首、(B)神詠にみせかけた歌三首である。444から455までは446・447の二首を除き左註が附されており、神詠であることを示している。  
(A)については、各々心にかかることを神に祈念し、それに対する神の託宣が夢告・神詠という形の歌として、神社ごとの小グループに整理されている。

風葉和歌集卷第七

神祇

444 ちきりとて結はすもなき白糸を絶め計や思ひみたる、

これはよ所の思ひのみかと中宮の御事をおほむ心ひとつにふかくおほしめしてよ  
なよな大神宮を拝したてまつらせ給ひておほとこのもるともなき御夢につけ給ひ  
けるとなん

445 やすみしる我すへらきにしたかはてたか誠をか神のうくへき

御夢のうちの御託宣たのもしくおほしめされければ関白春宮の大夫に侍けるとき  
勅使にてみてくらなと奉らせ給けるにことなくかへりのほり侍ける道にてこれも  
ゆめにつけたまひけるとなむ

やはたにこもりてこと事なくきねんすること侍りてかきてはしらにおしつけゝる

いはしみつのいよのかみ

446 ふかくのみたのみをかくる石しみつなかれあふせのしるへともかな  
はうてんよりけたかきこゑにて御かへしとて

447 夢はかり結びおきける契故長き思ひに身をやこかさ

448 神代よりしめ引はへしさか木はを我より外に誰かをるへき  
これはさころもの源氏宮内へたてまつらむとし給ひけるに堀川院の御夢に賀茂よ

りとてはへりけるとなん

449 人しれすわかしめさしゝさか木はををらんといかて思ひよるらん

これはみたらし河の内大臣さい院のいまたちゝみかともしられ聞え給はさりける頃ほのかに見きこえて心にかゝりて寝たるよ賀茂よりとてさか木につけたるふみにかゝれたりけるとなん

450 雲るなる程はみあれのあふひくさ照日のよそに思ふはかりそ

これはよその思ひのみかとおほしめしなけくことを心くるしく見奉りて宰相のすけかもにまうてゝ祈申ける夜の夢にみ侍りけるとなん

451 あきらけてらさんこの世後の世も光をみする露や消なん

これは風につれなきよし野の院の中宮の御さむ近くなりて宇治入道関白かすかにまうてゝ侍けるに夢うつゝともなくいとけたかきさまなる人のつけはへりけるとなん

452 猶たのめなけきなき世のまつのはにかゝれる藤の花のさかりは

これは夢かたりの前の関白女をなくなして世をそむかむと思ひ侍けるもとかくさはりかちに侍けれはかすかにまうてゝさまたけあらせたまふなと祈申けるあかつきかたにうちねふりたるゆめにふちの花を給はすとてのたまはせけるとなん

453 なみのほかきしもせさらんさとなからわか国人に立ははなれす

これはまつらの宮の右大弁宰相のうちたゝ遣唐のそへつかひにわたりて侍ける時

いくさおこりて世のみたれいてきにけるをかのおほやけのいくさにましはりて我  
国の神仏を念しけるに馬くらまてわかすかたにかはらぬ人九人いてきてもるとも  
にたゝかひてことなくしつめ侍にければうちやすみたるよの夢にみえ侍けるすみ  
よしの御歌となんいひつたへたる

454 あふことはいさしら雲のかたく共立かへりみつしるしあらしや

これはかいはみの右大将女のゆくへしらぬことをすみよしにまうて、申侍とて

「思ふ人よにすみよしと思ひせはたちかへりこんきしの白浪」とよみ侍けるにえ  
もいはすけたかきをとこのけはひにてつけ侍けるとなむ

444 は「よその思ひ」の歌であるが、この物語は「風葉集」に二十一首とられ散逸物語

445 としては三位の位置を占める。444 は、中宮のことを深く思う帝が大神宮つまり天照大神を

押し申し上げると、恋が成就するであろうという夢告を賜ったというもの。445 は、その御

礼として遣わされた春宮大夫が伊勢からの帰途夢の中で得た神示である。どちらも長い左

註がつけられ、伊勢神宮にまつわる内容である。446 447 は「岩清水物語」で、八幡神社に籠

り祈念した伊予介の歌とそれに対する神の御返歌である。これも神は、恋が成就するとい

う託宣を与えている。

448 449 450 の三首は、賀茂神社にかかわる内容のものである。448 は「狭衣物語」の歌である

が、詞書の通り源氏宮を入内させようとすると、色々な警告の出来事があり、ある夜の父

堀川院の夢に、賀茂からの神官が手紙を持って源氏宮に参ったのを見る。その手紙の内容

がこの歌である。賀茂の祭神が源氏宮を所望する意で、この歌の場合神の方から積極的に

詠みかけていると考えられる。<sup>449</sup>は散逸物語「みたらしの川」のものであるが、「風葉集」に残されている歌などから「狭衣物語」に似た内容であったらしい。内大臣が齋宮に恋をしたが、その内大臣の夢中で賀茂神が齋院を手をるなと告げているのであり、前歌と同様神の方から積極的に詠みかけている。<sup>450</sup>は<sup>444</sup>と<sup>445</sup>と同様、帝の嘆きを見申し上げた宰相の介が賀茂に詣で得た夢告である。

<sup>451</sup>は春日神社にまつわるものである。<sup>451</sup>は「風につれなき」の現存部分にある歌で、宇治入道の夢に春日明神が中宮の死と一宮の即位を予言するものである。予言通り中宮は亡くなるのだが、このように人の死を予言したものはこの(A)歌群の中ではこの歌のみで、異色である。<sup>452</sup>は散逸物語「夢語り」の歌で、愛する女を亡くして出家しようとした前関白が春日に詣で祈ったところ、夢に出家をとどまり花の盛りを見よというお告げを得たという内容らしい。おそらくこの物語は、この予言が実現して行く経緯を描いたものである。

<sup>453</sup>の四首は住吉神社にまつわる歌である。<sup>453</sup>は「松浦宮物語」の歌で、詞書通り右大弁氏忠が遣唐使の一行として渡っていた折戦乱が起ったが、日本の神仏に祈るとその争いがおさまったというものである。<sup>454</sup>は散逸物語「かいばみ」の歌で、右大将の恋人が行方知れずとなったので、住吉へ詣でて祈念し歌を詠じたのに対する神（「えもいはすけたかきをとこのけはひ」）のお告げである。「かたく共立かへりみつしるしあらしや」とある様に再会まで困難があったと推測される。結局二人は再会し、その御礼参りに参詣した折の歌が<sup>474</sup>に並べられている。



次に<sup>455</sup>「岩垣沼」、そして<sup>457</sup>の「隠れ養」以上三首の散逸物語の歌が、(B)神詠にみせかけた歌として分類されると思われる。

455 秋のよの松ふく風のおとよりも哀身にしむ法のこゑかな

これはいはかきぬまの頭中将すみよしにこもりてと経なとしておこなひ侍ける  
あかつきつほねにたてふみにしてさしおきて侍ける歌なりさるへき人もまうて  
侍らさりければ神の御しわさにやと思ひてひとりこちける

456 かくはかり物思ふ人はあらしよにたれか身にしむ哀なるらむ

左大将かたちをかくしてところぐ見ありきけるころ前齋宮に大式まさかぬかち  
かつきよりけるを大神宮と思はせてさまぐ申けるにおそれおこたり申て出に  
ければよみ給ける

かくれみのゝさきの齋宮

457 我為にあまてる神のなかりせはうくてそやみに猶まとはまし

まず<sup>455</sup>であるが、この歌は形式としては左註の神示の歌の型に則っているが、神詠とは認めがたいことはすでに松尾聡氏、小木喬氏が御指摘なさっている通りである。詞書から察するに、「歌の詠みそうな人も参拝しなかつたからこの立文は神のお告げだろうか」と中将が考えたのである。次に<sup>456</sup>の中将の歌が続く。中将の歌は「私程物思いに沈んでいる

者はあるまいに、それより法の声が身にしみて衰れとおっしゃるのはだれであろう」の意であろうか。神詠と思いつつ半信半疑で詠んだのであろう。そして、<sup>457</sup>であるが、この歌は左註ではない。詞書通り前斎宮に大式あさかぬが近付いたので姿を隠し伊勢大神宮の御言葉と思わせて女を救うのである。「隠れ養」らしい題材である。神詠にみせかける点では<sup>455</sup>と共通しており、一つの歌群と考えられ、又神詠・夢告にまつわり、<sup>(A)</sup><sup>(B)</sup>を第一歌群としてまとめてみた。

以上神詠・夢告に関する歌群であるが、<sup>455</sup>の「岩垣沼」が散逸しているので明言できないが、この歌にわざわざ左註を施しこの位置に配した点「風葉集」撰者が駆使した配列の妙を感じとりたい。また後に続く釈教部においても同種の仏詠・夢告の歌群が冒頭に置かれており、しかも<sup>(A)</sup><sup>(B)</sup>の順に配列され、この両部が密接にかかわりあっているとみてよいと思われる。

### 三

次の第二歌群<sup>458</sup>から<sup>476</sup>までの十九首は、各神社（八幡・賀茂・春日・稻荷・住吉）に関する歌でまとめられていると考えられる。便宜上、<sup>(C)</sup>賀茂神社を中心とする歌群（<sup>458</sup>）<sup>469</sup>、<sup>(D)</sup>住吉神社を中心とする歌群（<sup>470</sup>）<sup>476</sup>）に分けて説明を加えて行きたい。

まず<sup>(C)</sup>であるが、<sup>458</sup>が八幡神社、<sup>469</sup>が春日神社にかかわる歌で、残り十首が賀茂神社にまつわる歌である。またこの歌群は、何らかの形で二首ずつが対応している歌が多く、小物語世界が展開していると思われる。

やはたにまうて、よみ侍ける

をたえのぬまの右大臣

458 ちかひおきし神の心をたのむ哉人の人にあらぬ身なれば

女一宮齋院に給へるもは、はしらすやあらんとおほされてよませ給ひける

秋のよなかしとわふるみかとの御歌

459 ゆふかけてしらすやあるらん思ふ人神のいかきにしめゆひつとも

賀茂の御つけにてみかとしられ奉り給て「さかき葉のさしてをしふる人なくは」との給はせける御かへし

おなし齋院の母后のみや

460 かはるなよさかき葉さして祈こしこやそのかみのしるしなるらん

御出家おほしめした、せ給て賀茂にまうてさせ給てよませ給ひける

風につれなきのよしの、院御歌

461 今はとて祈りかけつるゆふたすきわか世の後は神にまかせつ

かものいつきいまたかはり侍らさりけるととき花のさかりに内大臣まうて、「ち  
らても花の千世をへよかし」と申侍ければ

みたらし河の齋院中納言

462 さかき葉も花の匂ひもたくひなきをる人からに千世もへぬへし

みかたと、人におはしけるととき祭の日みやしろにてみやこにはおとなきほと、  
きすみかきのわたりにはこゑなりにけるをきかせ給て「かものいはかきたつね

きにけり」とのたまはせけるに

さころもの齋院女別當

463 かたらは、神もき、なん郭公思はんかきり声なをしみそ

六条院すまにうつろひ給はんとて故院の御はかにまうて給ける御ともにさふら  
ひて加茂のしものみやしろをかれとみわたすほと齋院の御けいにかりの御する  
しんにてつかうまつれしと思ひいてられておりて御まのくちをとりて聞えけ  
る

源氏の衛門大夫

464 引つれてあふひかさし、そのかみを思へはつらしかものみつかき

やかてうまよりおりてみやしろのかたををかみ給ふ神にまかり申たまふとて

六条院御歌

465 うき世をは今そわかる、と、まらん名をはた、すの神にまかせて

兵部卿のみこのむすめうちにまゐるへしと聞えけるにはかにかものいつきに  
さたまりにければをみなへしにつけてつかはさせ給ける

みかきかはらのみかとの御歌

466 神かきに咲ましるともをみなへし露斗をは思ひわするな

御かへし

齋院

467 ゆふたすきかけても人のわすれすは露のなさけを頼みこそせめ

神無月の十日ごろ平野に行幸侍けるに齋院のわたりのもみちいみしうさかりな

るに御らんしわたさせ給て

さころものみかとの御歌

468 神かきは杉の梢にあらねとももみちの色もしるくみえけり

たいしらす

うつほの参議すけすみ

469 めにちかくおりていのれとかすかのゝもりの櫛は色もかはらす

458 は「無名草子」にもその名がみえる散逸物語「緒絶えの沼」の歌で、八幡詣でを詠んだものであろう。

459 460 の「秋の夜ながむる」は散逸物語だが、女一宮が斎院に卜定されたことから、女一宮の母君とおそらく何らかの恋情があったと思われる帝とのロマンスが浮び上がる。この母君は、「風葉集」の他部に収められている歌から推測すると、後幸福を得たらしいが、ここは何らかの事情で失意にあった折の歌と考えられる。461 は「風につれなき」の散逸部分に属するもので、物語後半部吉野院が出家しようと思いたち、賀茂に詣でた折の歌であらう。

462 は「みたらし川」のもので、恋慕う斎院がまだその位におられるのを嘆く内大臣の歌に対し、斎院女房の返歌である。463 は「狭衣物語」の歌だが、斎院（源氏宮）を慕う狭衣の詠じた歌に対し、斎院別當の返歌であり、この物語場面は前歌とよく似ている。「みたらし川」は「狭衣物語」の強い影響を受けた物語らしく、この二首が第一歌群と同じくここでも相対して並べられている点興味深い。

464 465 は、光源氏が右大臣の怒りを得、須磨へ向う折藤壺入道に暇乞いし、下賀茂神社を  
みながら亡父桐壺帝の御陵に参拝しようと北山に赴く途詠じた歌である。昔の華やかさを  
思い強い調子で神を恨む衛門大夫(464の歌)と、余裕すら見せながら神に判断をまかせる  
源氏の姿(465の歌)が、物語絵巻のように彷徨と浮かび上がってくる。

466 467 は散逸物語「みかきがはら」のもので、入内する予定の姫君が急に齋院に立たれる  
ことになり、我思いを遣した帝の歌と、それに対する齋院の返歌である。

468 は狭衣大将の歌で、平野行幸の折恋慕う源氏宮の住む賀茂神社の紅葉の美しさを詠ん  
だものである。下句「もみちの色もしるくみえたり」は次の469の下句「もりの櫛は色もか  
はらず」と「色」に関しての対応がみられる。469は「うつほ物語」の歌で詞書「題しら  
ず」となっているが、物語本文にかえて読むと、實際中将祐純が春日大社を参詣した折  
の歌ではなく、右大将兼雅の消息文に掛けての歌であり、神祇の場面を持たない。おそら  
く「風葉集」撰者は、それを周知の上で単に歌自体の内容から選び、468との対応でここに  
位置させ「題しらず」としたのであろうと考えられる。この種の「題しらず」歌は、羈旅  
部にも存してあり、更に他部においても調査した上で結論を出したい。以上458 461を除き、  
何らかの形で二首ずつ対応しながら小物語世界を描いていると考えられる。また賀茂神社  
を中心として配列されているためか、齋院にまつわる内容が多い。しかも第一歌群とは逆  
に、恋の実らない、思うようにならないという悲愴感漂う歌が多い。

次に(D)住吉神社を中心とする歌群(七首)である。470は伏見稻荷にまつわる歌であるが、他の六首は住吉神社に関する歌である。

竜吟出家し侍て又のとしの春こそそのむつきにいなりの御幸の御ともつかうまつりて侍けるかさしの杉に雪のふりかゝりたりしなとおほしめし出られければ

あまのもしほひの院御歌

470 祈こし神さへつらしいなり山いつらは杉のしるしありけり

六条院すみよしにまうてさせ給けるにしのひてまゐりてよめる

源しのあかしのあま

471 むかしこそまつわすられね住よしの神のしるしをみるにつけても

おなしをり廿日の月にはかにすみてうみのおもておもしろくみえわたるに霜いとこちたくおきて松はらも色まかひてよろつ的事そゝろさむきに

むらさきのうへ

472 すみよしの松によふかくおく霜は神のかけたるゆふかつらかも

六条院内大臣と申ける時すみよしに御願はたしにまてさせ給ひけるに神の御とくをあはれにめてたしと思ひて申出侍ける

参議惟光

473 すみよしのまつこそ物はかなしけれ神世のことをかけて思へは

すみよしの御しるしあらたに侍けるかへり申にまうてゝよみ侍ける

かいはみの右大将

474 しるしありとたのむ心は住よしの松のみとりのいつかかはらん

みかとてる月の中納言のこときかせ給うて「月かゝりけむすみよしの松」との  
たまはせたまひければ

はつねのせり河の御息所

475 住みよしの神もことわれあはちしま月かゝれとはななめさりしを

かひものかたりのなかに八月十五日すみよしにまうてよめる

あはひかひの左大弁

476 いかはかり神の心もすみぬらん今夜にたる月しなければ

まず<sup>470</sup>は散逸物語「海人の藻塩火」の歌である。前年杉の雪がかざしに降ったことを、  
翌年の春正月に回想し詠じたものである。松に積もる雪から出家した子に思いを馳せる  
もので、雪がその媒介になっている。

471<sup>472</sup>473は「源氏物語」の歌である。三首連続して位置しているが、物語本文に立ち戻っ  
てみると、この三首にさ程の関連は見られず、しかも<sup>471</sup>472は「若菜下」の巻だが、<sup>473</sup>は

「澤凜」の巻と物語においてはその順序は逆である。明石の上の娘明石の姫君は、春宮女  
御となり次の春宮を産む。源氏一族は益々栄え行くのだが、その昔住吉明神に掛けた御願  
を果たそうと、源氏は大勢の供を連れ住吉詣でをする。昔のことを思い尼君の車に歌を渡  
された源氏に、尼君もまた昔を懐しみ、今の幸福を夢かと思う。その胸中を詠じた歌が<sup>471</sup>  
である。<sup>472</sup>は<sup>471</sup>と物語本文では連続しているが、贈答歌ではなく関連はない。源氏の住吉  
詣でに同行した紫の上が、十月廿日の月をめ、住吉の風情を嘆じた歌である。



次に<sup>473</sup>だが、この歌は明石の上が無事姫君を産み、源氏の地位も都で安定してきた。その御礼の住吉詣でをする折のものである。前歌<sup>471</sup>とこの<sup>473</sup>では十七年の隔りがある。こは物語内容からでなく、歌中の「住吉の松」「神」「かける」という歌語の共通から並べられたのではあるまいか。

<sup>474</sup>の歌は、前出の<sup>454</sup>の住吉神のお告げに対する御礼参りの折の右大将の歌である。前歌との関連は「すみよしの松」という歌語の共通、そして神への願い・祈念が成就したその御礼参りの歌ということが一致している。

<sup>475</sup>は次の<sup>476</sup>と同じく、住吉にかかる月をめぐっての歌の配列と思われる。<sup>475</sup>の散逸物語「初音」は、「風葉集」に十五首残されており物語としては中編程度のものである。冤罪で住吉に籠居している月の中納言のことを案じ、御息所が中納言の身になって住吉の神に訴えた歌であろうと考えられる。<sup>477</sup>は「貝物語」であるが、「風葉集」にこの一首（小木喬氏は雑三・<sup>1348</sup>も同じかとされている）のみしか資料がなく、その内容等全く知り得ない。八月十五夜、住吉にあはびがいの左大弁が詣でた折の歌となっており、歌としては十五夜の月をめだたもので他意はなさそうである。

以上(D)住吉神社にまつわる歌群について、住吉神への御礼詣での歌が四首占められていることもあり述懐の歌がめだつ。住吉神社に関する歌が中心並べられているためか、住吉11月と月を詠み込んだ歌が多い。また「又の年の春」(<sup>470</sup>詞書)「廿日の月、海のおもて、霜」(<sup>472</sup>詞書)「八月十五夜」(<sup>476</sup>詞書)等季節感のあふれる様詞書にも工夫されているように思える。

五

さて最後の第三歌群だが、この歌群は内容を検討してみると、特定の神でなく「八万の神」に対しての神祇・神慮を詠じた歌が季節ごとにとまると言える。ただしこのような歌群は先行する勅撰集には見当たらない。神祇部末尾の何首かは、大嘗会和歌群となつているのが通例である。これも或は大嘗会和歌群を意識したものかと考えたが、歌の内容は慶賀とは言えない。「風葉集」の神祇部はここまで忠実に勅撰集の型を踏襲している上、もし物語歌に大嘗会歌があれば採用したであろう。この歌群は撰者の苦肉の作かも知れない。

五節のまひゝめをみてつかはしける

夕霧の左のおほいまうち君

477 あめにますとよをかひめの宮人もわか心さすしめをわするな

登華殿女御にしのひて物申て出ける暁温明殿のわたりをすくとて内侍所のおほしめすらむこともおそろしくて

女すゝみの左大将

478 神もみよかゝるなけきにむすひける契はけふの我心かは

すまにてやよひのついたちにてきたるみの日御はらへせさせ給ふとて

六条院御歌

479 やほよろつ神も哀と思ふらんおかせるつみのそれとなければ

齋院のみそきの日はらへつかうまつるをきかせ給ふていとかう　しく物おそろ  
しうおほされて

さころものみかとの御歌

480 みそきするよほ万よの神もきけもとより誰か思ひそめてし

たゝ人におはしましけるととき御出家おほしめしたゝせ給ひけるを賀茂の大明神  
堀河院につけ聞え給ふことありて御ほいもとけさせたまはせてみやしるにてさ  
ま　御いのり侍りけるをきかせ給て御心のうちに

481 神も猶もとの心をかへりみよこの世とのみは思はさらなん

477 は夕霧が戯れに五節の舞姫である惟光の娘に贈ったものだが、歌中の「豊岡姫」は意  
味不明である。「湖月抄」「花鳥余情」は天照大神としているが、疑問視する説がある。<sup>四五</sup>  
どちらにしる「神」であることはまちがいないらしい。五節の舞は、十一月の丑の日の行  
事である。

478 の「女すゝみ」は「風葉集」に二十二首採られ、「風葉集」に残されている散逸物語  
の歌数からすると第二位を占め、かなりの長編と推定される。歌の「契はけふの我心か  
は」は、どうも女性（登華殿女御）から積極的に働きかけた内容であつたらしい。この場  
合詞書に「内侍所のおぼしめすらむことも」とあるから、この神慮は内侍所に関するもの  
たとえば新嘗祭などかと小木喬氏は論じておられる。<sup>五六</sup>新嘗祭とすると陰曆十一月の中の卯  
の日で、時間配列として<sup>477</sup>の次で位置的には妥当と思える。

479 は光源氏の須磨にての隠遁時代の三月、上巳の祓えをし、源氏が天に訴える気持ちで

詠んだ歌である。この歌を詠じた直後、突然に強い風が吹き初め、空が真暗となり暴風雨が吹き荒れるのである。<sup>480</sup>は狭衣が齋院（源氏の宮）の禊の日その苦しい心中を述べたものである。賀茂祭前の御禊のことで、四月吉日が選ばれる。<sup>479</sup><sup>480</sup>は「八万の神」が歌語共通している。

<sup>481</sup>は狭衣大将の出家の志を知り、父堀河の大殿が出家を引き止めるべく賀茂詣でをした折の狭衣の心情である。この上句は「神であつてもやはり仏であつた本来の心を」と訳され、本地垂迹思想を背景にしていることが分かる。本地垂迹思想を詠んだ歌は「千載集」をはじめ勅撰集に幾つか採られているが最後に位置している集はない。次に釈教部が並んでいることを鑑みれば好位置と言えるのではないだろうか。そしてこの両部がつながり、大きく一つの部として配列されていることを示しているとも言えよう。

### 結語

以上神祇部について種々考察を加えてきたが、配列についてはまず神祇・夢告の歌(A)一首、そして神詠と思わせた歌(B)三首が冒頭に掲げられている。この(A)Bの配置は、次の釈教部においても巻頭に位置しており、この両部は対照的な配列とみて良いであろう。神祇・夢告の歌は、「拾遺集」(二首)に始まり、「後拾遺集」(二首)、「詞花集」(一首)と存するが、巻頭に一つの歌群として配されているのは、「新古今集」(十三首)、「続古今集」(八首)のみである。ちなみに「風葉集」に続く勅撰集「続拾遺集」にはない。特に「風葉集」の直前に編まれた「続古今集」は、「新古今集」を模倣して編纂され

たことは周知の事実であり、そのことから考えると「風葉集」と「続古今集」の成立のかわり、撰者等の問題を含み興味深い。また神祇と思わせた歌は、勿論他の勅撰集にはない。物語歌集としての一つの特色といっても良いであろう。

そして次に、賀茂・住吉神社を中心とする歌群が続く。神社別の配列は、「千載集」で最初に試みられ次の「新古今集」に受け継がれており、いわば勅撰集の通例であるが、「風葉集」も忠実にその型を踏襲していると言える。特に賀茂の齋院をめぐっての悲喜劇は、平安・鎌倉期の物語に枚挙のいとまなく、この配列もそれを中心としている。それ故悲愴感漂う、悲恋の響きのある歌が多い。最後は八方の神に関する歌が、季節を追って位置し、巻末には本地垂迹を元とする「狭衣物語」の歌で締めくくっている。次が釈教部であることを考え合わせれば好位置を得た感がある。

また各勅撰集の比較的多く入集されている日吉大社・熊野神社に関する歌がないが、当時の物語にこれらにかかわる内容が少なかったためであろうか。他に「うつほ物語」の「だいしらす」歌で、物語場面では「神祇」という範疇に入らないと考えられるもの考配列上の問題も表面化してきた。これらの問題は他部を詳細に研究し結論を出したい。

〈注一〉有吉保氏『新古今集の研究―基盤と構成―』三省堂。

〈注二〉引用は、中野莊次・藤井隆氏『増訂<sup>校</sup>本風葉和歌集』による。従って歌番号もそれによる。

〈注三〉松尾聡氏『平安時代物語の研究』東宝書房。小木喬氏『散逸物語研究』平安・鎌倉時代編』笠間書院。

へ注四へ「たいしらず」歌については、本稿の「第十章『風葉和歌集』の『よみ人しらず』歌・『題しらず』歌について」参照。

へ注五へ石田讓二・清水好子校注『新潮古典集成 源氏物語三』によれば、「とよをかびめ（豊受姫）」とし、伊勢外宮の豊受大神であるうとされている。

へ注六へ「注三」参照。以後小木喬氏の御意見はこの御著書による。

へ注七へ「おもふことくみてかなふる神なればしほやにあとをたるるなりけり」（「千載集」神祇1258・後三条内大臣）「みちのべのちりに光をやはらげて神もほとけのなるなりけり」（同1259・崇徳院）。



## 第二節 積教部

「風葉集」の積教部の構造は、冒頭に仏詠の歌群を配し、神祇部の冒頭と対照的に並べられているという大きな特色を持つが、それとともに「源氏物語」「うつほ物語」からは一首も採られていない部としても一つの意味があると思われる。言いかえれば、積教部は「風葉集」において、「源氏物語」「うつほ物語」の歌の存しない唯一の部なのである。どのような物語の歌が入集されているかと言うと、散逸した小物語群でほとんど占められていると考えられるのである。積教部は歌数四十一首、そのうち現存物語は四（「狭衣物語」「風につれなき」「いはでしのぶ」「有明けの別れ」）但し「風につれなき」「いはでしのぶ」は散逸部分の歌である）各一首ずつで、残り三十七首が散逸物語の歌なのである。

以上の点を整理してみたい。次の表は、「風葉集」入集物語で、「無名草子」成立時確実に存したと思われる物語数を調べたものである。無論「無名草子」筆者が、その当時のすべての物語を手に入れることができたとは言えないのだが、一応目安として、古い物語・新しい物語の一線を引く年代として考えてみたい。

「風葉和歌集」に存する物語において、「無名草子」にその名があらわれているもの、「六条斎院物語合」に見えている物語（○印の付してある）の入集歌をすべて部立ごとに分類し作成した。但し、詞書中の歌は含まない。



合計	所集不明	巻													部立	物語名						
		三	二	一	六	五	四	三	二	一	十	九	八	七			六	五	四	三	二	一
180		10	8	8	13	4	5	10	2	3	20	3	6		7	14	17	13	13	12	13	源氏物語
110		9	1	6	14	4	3	1	7	17	5	3	2		1	3	8	6	6	8	5	うつほ物語
56		1	1	2	8	7	2	5	4						1	5	6	2	5	5	2	狭衣物語
29	1	3	5	1		2		2			1	2	5			3		1	1	1	1	浜松中納言
25		4	7	2		2		1			4					1		1		2	1	夜の寝覚
20		1	3	4	3			5	1		2			1								有明の別れ
19			2		1			2	2			4	6		1					1		松浦宮物語
8									2				2			1				1	1	落窪物語
7		3						2		1	1											住吉物語
6			2		1		1						1							1		今とりかへばや
3		1											2									竹取物語
1									1													逢坂越えぬ 權中納言○
20	1	1	3	1	2	1			2	1	1				1		2	2		2	2	朝倉
17		2			2	5	3												3	1	1	うきなみ
16			1	2	1	2	3	2	2						1					2		結絶えの沼
15				4	2			1		2	3						1		2			袖ぬらす△
13					1	2	1	2	3		2					1	1					五箇に遊ぶ 權中納言○
12			2	2	2			1	1	1		1				2						古とりかへばや
12					2	2		5								2				1		みかほに 笑ける
11		1	1				1	2						1	1					2	2	隠れ裏
10					2					1				1			2	2	1	1		心高き 尊宮直旨
9			1						1	2		1			1	1	1				1	末葉の露
7			1	1	1			1		2		1										露のやどり
7			1	1	1			1	1											2		川霧
5			1					1		1	1				1							夢語り
4																				3	1	あらはあふ 涙く辰都郎○
4								1							2					1		岩垣沼○
4					1			1										2				岩うつ波
4				2									1							1		宇治の河渡
1						1																はこやの刀自
4					1									1		1				1		海人の刈藻
3			2	1																		観へだつる 中務宮○
2							1								1							うもれ木△
2										1				1								かばね 尋ねる宮△
1						1																胸迎へ
12		1		1													2	2	2	2	2	(まよふ草のか)○
2								1										1				(をぐら山 たづぬる)○
668	2	35	42	38	50	39	16	44	30	30	46	16	27	6	19	37	33	36	45	37	29	合計
(1420)	12	78	78	98	104	74	40	98	79	59	99	31	48	41	38	80	78	75	77	74	59	風葉集合計
46.9		44.7	53.9	38.7	48.0	51.3	40.4	42.7	39.2	50.8	46.4	51.6	56.2	14.6	50	46.3	42.3	48	58.4	50.5	49.1	割合(%)

現  
存  
物  
語  
  
散  
逸  
物  
語

まずこの表を見ると、前述したように「源氏物語」「うつほ物語」の歌が一首も採られていないことが目を引く、この両物語とも各部に平均して入集されているのに、釈教部にだけ存しないのである。とともに、この部には「無名草子」成立以前の古い物語が極端に少ないことが知られよう。逆に言えば、「無名草子」以降「風葉集」編纂までの約七十年間程の間に誕生した新しい物語の歌で、そのほとんどが占められていると思われるのである。ところで「源氏物語」「うつほ物語」に「釈教」という部立にふさわしい歌が存しなかったであろうか。「源氏物語」五十四巻、出家・仏事等枚挙にいとまない程仏教にかわる物語場面は数多い。「うつほ物語」にしても、仏道の描かれている箇所は数多い。「風葉集」愛誦者達は、春部から詠み進みこの部に至って、その採歌・配列を見何か異質なものを感じとったのではないだろうか。撰者は、この釈教部において、作爲的にこのよくな入集形態をとったのだろうか。次の配列を詳細に考察した上で、再び論究してみたい。

一

釈教部は大きく三つの歌群に分けられると考えられる。第一歌群として冒頭の仏詠（夢告）の歌八首、第二歌群は、「法華経」を中心とする法文を詠み込んだ経旨歌と西方浄土願生の歌合わせて二十一首そして第三歌群は、仏事や修行中詠まれた法縁歌と来世の成仏を願った歌で十九首、各々小歌群に分割できると思われる。

まず第一歌群だが、(A) 仏詠（夢告）の歌七首、(B) 仏詠にみせかけた歌一首が配列されて

いると考えられる。(A)はすべて左註が附され神祇部と対照的な形である。

釈教

482 むかしより心つくしの契にてなげかむことも此世はかりそ

これはあまのかるもの権大納言思ふこと侍りてはつせにこもりてかゝる思ひやめ  
給へと申ける夢にいぬふせきよりうるはしきそうのさしいて、申侍けるとなん  
483 こよわ<sup>へ</sup>ふる心はやみにくらすとも雲るの月をよそに詠めよ

これはちゝにくたくる左大臣もの申ける女の後にたち給にけるをしらてなげきけ  
るころの夢に石山よりとて巻数のふたにかきつけたりけるとなん

484 かけならへすまむことこそかたからめいりかた近き山のはの月

これも石山の観音みたらし河の内大臣のゆめにつけ給ひけるとなん

485 までしはしみちくるしほの時のまをかひもなきさと何恨らん

これはちくまのかはの中の君おとゝひとところ にまうてゝ身のゆくへを祈け  
るにあねのきよみつにてあらたなるしるし侍けるを聞て石山にこもりて「おこし  
けるひろきちかひのなかにしも我身ひとつのなともれにけん」とよみ侍ける御か  
へしの夢の中にとなん

486 かれはてん後をうらみよ埋木も花さく春も有とこそきけ

これはうつせみしらぬの内大臣の中行へしらぬさまになり給ひ頭中将も世に  
かしこまることなと侍けるころきよき水にこもりてかれたらんうゑ木もと経よみ

けるをきゝて「花さかむ事をいのりしうもれきはさてたにくちてねさへかれめや  
」と思ていさゝかまとろみて侍けるにこのてらの師の大とくとおほしきか申侍け  
るとなむ

487 はかなしや夢斗なるあふことに長きうれへをかへてしつまん

これはかさぬる夢の大將いとせちにおもふこと侍て法輪にこもりておこなひ侍け  
るに夢うつゝともわかたきこゑにてつけ侍りけるとなむ

488 しはしこそせきもとゝめゝ妹せ川終に末にはななれあひなん

これはなるとの侍従いもうとの行へしらぬことをなけてくらまにこもりたりけ  
る夢に見侍けるとなん

ところく見ありき侍けるころほうしの女のをとらへて侍けるに仏のの給ふやう  
にてみゝにいひいれ侍ける

かくれみのゝ左大将

489 たもたすてあやまつとかをみる時ををしへし法もくやしかりける

まず<sup>483</sup>は散逸した古本の「海人の刈藻」<sup>へ世三</sup>の歌で、初瀬寺へ詣でた権大納言が「思ふこと」  
を祈り、夢にそのお告げがあったものである。改作本と思われる現存する「海人の刈藻」

「から察するに、この「思ふこと」は中宮との恋であったらしい。歌によるとその恋は  
前世からの因縁で心づくしの恋愛であるが、来世は救われるという大意がくみとれる。来  
世での成仏を暗示しているようにも思われ、そうであれば釈教部最後の歌群とも呼応して

配されていると考えられよう。

483 は「ちぢにくだくる」の左大臣が、女が后に立っているとも知らず、その行方を求める祈禱を石山寺に頼み、その夢で仏が巻数の札に書いて示されたものと解釈される。この483 から三首、石山寺にかかわる歌、つまり石山観音の仏詠（夢告）歌が続く。484 は散逸物語「みたらし川」のもので、やはり夢で女との恋が困難であることを論じている。485 は「ちくまの川」の歌で、夢に御返歌として答えられたもので、しばらく待てば幸福を得ようという内容のものか。散逸物語「ちくまの川」は「風葉集」に二首採られているだけに資料はない。もう一首も同部（493）にとられ、どうも寺社縁起にまつわる内容の多く盛り込まれた物語であったかと推測される。

486 は、清水寺の大徳らしい僧が夢に現われて詠じた歌で、詞書等から「千手陀羅尼經」が詠み込まれている。この「埋れ木（枯れたる木）にも花咲く」は、その表現通り今は不遇の身でも待てば意外な幸福が巡って来るといふ意である。この句は、平安・鎌倉期物語には頻繁に引用され、この釈教部でも494 496 にもみられる。「梁塵秘抄」の歌は有名であるが、不思議と勅撰集にはあまり採られていない。平易でわかりやすく、恋愛・出家等で懊悩する当時の主人公達を論す言葉として、物語読者うけしたのである。ここは捜し求めていた中宮も見つかり、又「世にかしこまる」頭中将も解け、内大臣一家は春が来ることを示しているのであろう。

487 は法輪寺の仏の夢告である。法輪寺は京都嵐山にあり、「狭衣物語」「平家物語」

「あさぢか露」そして散逸物語「雪のうち」「緒絶えの沼」「秋の夜ながむる」にも登場し、鎌倉期の物語の舞台によく選ばれた寺である。この寺の名は院政期以降の私家集に多

くみえ、不遇感を慰む場として意識されていた寺であるらしい。<sup>(註六)</sup>「重ぬる夢」の大将が、その思いの叶うことを強く念じたものだが、「長きうれへをかへてしつまん」とはどういう意であろうか。神祇部冒頭の神詠歌群にもやはり死を予言する歌(451)が存するが、対照的に並べられたとも考えられる。<sup>488</sup>は鞍馬寺に籠った折の夢に告げられた歌で、捜し求めてゐる「いもうと」に「ながれあひなん」とやがて再会することを言い得てゐるのであろう。

以上七首すべて左註歌であり、仏の夢告歌が並べられているが、次の「隠れ養」の歌<sup>498</sup>は(B)に類する。女の手をとらえた法師の耳に隠れ養で姿を消した左大将が仏の言葉にみせかけ詠じた歌である。この(A)(B)という配列の型は、神祇部冒頭と全く同じである。

## 二

次の第二歌群は、法文を詠み込んだ経旨歌(C)とお経を詠み後世を願うという関連から西方浄土を希求する歌、そして六道を詠んだ歌(D)という配列になっていると考えられる。

八月十五夜によみ侍ける

雪のうちのひしり

490 いかで猶わしのみ山にすむ月をこのみるはかりさやかにもみん

かへし

うめつほの女御

491 はれかたきいつくの雲をはらひつゝ君そ心の月はすむへき

なき人のために普賢菩薩つくりあらはしたてまつりておこなひ侍ける夜あかつき  
かたの月くまなうさし入て御かざりともゝきらゝと見え給ひければ

風につれなきの関白

492 ちかひあらはかゝる光をさしそへてまよはん闇を照さゝらめや

きよみつにこもらせ給ひけるにむねのみてはたてまつりぬるといふ夢をみ給ひて  
かもにまうてさせ給て院の御車にたてまつるとて

ちくまのかはの女院

493 夢のうちにさつくとみえしむねのみてのちかひたかはぬ時至りぬる

おなしてらにこもりて思ふ事かなふさまに侍りければ

恋に身かふる頭中将

494 あなたふとかれたる木にも花さくととける誓は今そしらるゝ

すゝめのものかたりの中に方便品に若人散乱心乃至以一華供養於画像漸見無数仏

495 何となく手向し花の一ふさにかすの仏をみる身とそなる

人記品

496 かれはてしふかき山へのうもれ木に思はず花の咲にける哉

観持品

497 心くまわれはへたてゝ思はぬになにゆゑ人のうらみかほなる

神力品

498 いひおきしこのことのはを思ひ出てなからん跡のかたみにもせよ

院のふたんの御経ちやうもんして侍けるにいつくかことにたふとき人の申侍ければ

499 水のあわうきてはかなき世中をいとへととける法そうれしき  
あまのもしほひの院新中将

兵部卿のみこのはてにさまかへ給はんとて

500 涙のみくもる袂にかけてみよころものうらの玉やにこさむ  
なみのしめゆふの冷泉院女一宮

女院の御ごことにこゝちかきりになりて侍けるにいのりの僧の若人有病得聞是経といふわたりをよむを聞て

501 きゝ<sup>へせ</sup>えたるみのりのかひもあらしかし絶にし人にかきるいのちは  
いはてしのふの一条院内大臣

なにはえの宮に八講おこなひて聴聞せさせ給ひけるに

おのれけふたき右大将

502 君か為つとめてもとめてこと更にひろむる法の心しらなん

此世をわかれてはやのほいもさすかなる身の程に思ひわひてくるまにのるとて

水あさみの内大臣

503 何せんに思ひの家をゝしむらんみつの車にのりをねかはて  
経よむはいむなりと人のいひければ

あまやとりの女御



504 たかせ舟のりもしらてはしら浪のきえなん後そ悲しかるへき

右大将のはゝのために宇治に堂たて、供養し侍とてよめる

ひちぬいしまの関白

505 さり共とたのまるゝ哉さしわたるみのりの舟の道しるへは

をはりにのそみて善しき心にかなふへきこととて七重宝樹のありさまなとと  
聞かせ侍りければ

あれまくの大納言大君

506 なゝへなるうゑきをしらてもみちはのやしほになとか心そめけん

いり日を見はへるとて

つゝらこの式部卿宮北方

507 こくらくを思ひやりつゝ今いくか西にいりひの影をたのまん

さかの院の中宮の御すゝをとりにて半座のうへにてかさし奉らんとて

かやかしたをれの関白

508 おなしよのつらさもさてやわすれなんともまつへき契くちすは

大僧都御加持にさふらひけるにあふきにかきてさしいてさせ給ひける

あまもしほひの皇太后宮

509 むすひつるたゝかはかりをかことにてしつまん後の世をたにもとへ

たいしらす

みふねの皇后宮

510 幾度かゆきてはかへるむつの道くるしみならぬ処あらしを

490 491 は「雪のうち」の贈答歌であるが、歌に「靈鷲山の月」が詠み込まれ、内容から察するに「法華経」の「如来寿量品」をふまえての経旨歌であろう。この詞書「八月十五夜」というのは、釈教部詞書としていささか唐突な感じを受けるが、元来勅撰集の釈教部にも仲秋八月十五夜を詠んだ歌は存し、また釈迦が入滅した日が旧暦二月十五日であるから十五夜を詠じた歌も多く、しかも月は西に沈むということで西方浄土へと結びつき、「月」に関して詠んだ歌は数多く存する。散逸物語「雪のうち」は「風葉集」にもう一首残存するがやはり仏道を詠んだ歌で、仏教色濃い小物語であったかと推定される。492 は同じ「月」が詠み込まれているが、亡き人の供養のための歌で、「月」はその人の成仏を照らす光として言い表わされている。「法華経」の「如来神力品」の「如日月光明。能除諸幽冥」を念頭に詠んだものかと思われる。

493 は 485 と同じく「ちくまの川」の歌であるが、どうも歌・詞書とも難解である。「むねのみてを奉りぬ」の「むねのみて」だが、樋口氏は「胸の御手」の字を当てられるがその意が何かもう一つ分からない。諸本一致しているので、誤字もなさそうである。この前後経文を踏まえている歌が多いので、経文と関係あるかと思われるが今のところ不明である。この物語「風葉集」に四首（うち詞書に一首）のみ残されているもので、清水寺・石山寺・賀茂神社の靈験をテーマにしたものらしく、「風葉集」成立時に近い頃の小物語であろう。494 は、「風葉集」にこの歌のみが残されている、「恋に身かふる」の歌である。「おなじ寺」は前歌の詞書の受け継ぎ、清水寺のことであろう。清水寺に籠って祈願が叶い詠じたもので、「かれたる木にも花さく」は 486 にも前出している。この物語は、中世小説

「雨やどり」の原物語と言われ、仏の御利益を主題としたものであるらしい。

次の<sup>495</sup>から<sup>498</sup>までの四首は、「法華経題品和歌」として、その心を詠じ品順に配されている。この「法華経題品和歌」は、勅撰集としては「後拾遺集」からみえ以後その数は漸増しており、「風葉集」もその型をそのまま踏襲していると言えよう。ただ「すずめ」物語は、この四首が残されているだけの散逸物語であるが、いったいどういう内容なのだろうか。「法華二十八品」を詠う歌会、あるいは法華会等の催しを中心にした物語なのであろうか。詠者名が記されておらず、その詞書のつけ方も他と非常に異なっている。「方便品・人記品：等」の詞書は、勅撰集の「法華経題品歌」の型にならっているが、これは物語からそのまま採ったのか、それとも内容に準じ撰者が附しその型のように配したのか、散逸している以上何とも言えないが、興味ある詞書のつけ方である。

<sup>499</sup>は散逸物語「海人の藻塩火」の歌で「風葉集」に十五首残されている。そのうち神祇・釈教部に四首採られ、内容からみても高僧の伝記を物語化したものと思える節がみられる。この院新中将の歌はこれのみなので、主人公竜吟（大僧正）や院とどのような関係にあったのか分らないが、この歌は内容から察するに経文賛嘆の心を表していると思われる。「水のあわうきてはかなき」は「維摩経」の「方便品第二十喻」の「是身如聚沫。不可撮摩。是身如泡。不得久立」の部分をつまえているのではないだろうか。「世」（<sup>499</sup>歌）と「身」（維摩経）が異なるが、時代は下るがやはりこの経の影響をうけた「方丈記」の冒頭と響き合うように思えるのである。「維摩経」を詠じた歌は、「後拾遺集」以降多く存し、「千載集」釈教部卷頭歌はこの歌とよく似通っている。

<sup>500</sup>は、散逸物語「波のしめゆふ」の歌で、兵部卿宮の一周忌頃に出家されるという詞書

だが、この冷泉院女一宮は宮の正妻であろう。「ころものうらの玉」は、「法華経」の

「五百弟子授記品」にある「以無価宝珠 繁汝衣裏」を詠んだものである。501は、「いはでしのぶ」の散逸部分に存する歌である。一条内大臣が病の床に臥し、女院が病氣治療のため読経を行う場面である。「若人有病。得聞是経」は、「法華経」の「譬喩品」末尾近くの「若人有病。得聞是経病 消滅。不老不死。宿王華」を示すものである。しかし読経のいかなく内大臣は息を引きとるのである。(「風葉集」・恋四・1031)

502は、「風葉集」に三首しか資料のない「おのれけぶたき」の歌である。歌に「君が為」とあることから、故人の供養のための法華八講かと考えられる。下の句「ひろむる法の心しらなん」は「法華経」の「勸持品」の心かと思ふがどうであろうか。503は、散逸物語「水あさみ」の歌である。この物語は「大和物語」百六段の元良親王と平中興女との恋愛譚を原物語とする内容で、物語名も平中興女の歌から導き出されたものと考えられている。「みつの車」は「法華経」「譬喩品」の「羊車・鹿車・牛車」のことであり、また「思ひの家」は「ひの家―火宅」を踏まえていると考えられる。「のり」は車に「乗る」と「法」が掛けられている。

504は、「風葉集」に二首残されている「雨やどり」の歌である。お経を詠み後世を願っているのだが、この歌特定できる経文も見出せない。次の505と同じ「舟」がよみ込まれ、彼岸への橋渡しの役割の「舟」という意で並べられたものか。505は散逸物語「ひぢぬいしま」の歌であるが、右大将が亡き母の供養のため宇治に御堂を建てて詠んだ法縁歌である。「舟」「わたる」(505)は「法」の縁語として、また西方浄土へ渡る「舟」として元来多くの勅撰集で詠まれている。次の506が極楽に関する歌だけに、「舟」を詠み込んだ歌とし

て位置していると思われる。以上ここまでを(C)とし、法文を踏まえた歌が配列されている。西方を願う月を詠んだ歌を最初に据え、題品歌、経文を織り込んだ歌、そして「のり」「舟」と極楽・入日（浄土）へ続くよう工夫されていると言えよう。

次の(D)の最初の歌は「あれまく」のものであるが、この物語は「風葉集」にこの歌一首のみしか残されておらず、他に資料がない。大納言の大君の臨終にのぞみ、善知識が極楽の有様を説き聞かせ、その大君が詠んだ歌である。<sup>507</sup>の「つづらこ」も、この一首しか資料がない。「あれまく」「つづらこ」とも短編であつたらうと推測される。入日を見ながら極楽世界に思いをはせている歌である。

<sup>508</sup>の「かやが下折れ」は「風葉集」に十五首残され中編程度の物語であろう。そのうち六首に関白の詠者名が記されているので、主人公と考えられる。御数珠を「半座のうへにてかへし奉る」が意味不明である。おそらく霊前に供える何か仏教儀式であろう。夫婦は死後も同じ蓮の上にあるという来世願望の歌と解される。<sup>509</sup>は、大僧都の加持を受け来世も救ってほしいと詠んでいる歌であろう。

<sup>510</sup>は、散逸物語「みふね」の歌である。「だいしらず」となっており、詠じられた状況は分からない。ただ「風葉集」の題しらず歌は、物語場面と部立内容や前後の詞書等の配列と一致しない場合もあり、ここも必ずしも仏事、仏道修行にかかわる場面とは言い切れないであろう。この歌の「むつの道」は六道のことであり、六つの迷界に輪廻する苦しみで、それ程この時の皇后宮の苦悩は深かったのであろう。「むつの道」は古くから歌に詠まれ、有名な赤染衛門の歌などがあるが、勅撰集に入集され始めたのは案外新しく、「続

後撰集」が最初である。「地獄」については和泉式部の詠んだ歌が「金葉集」に存するが、これは詞書にあるように地獄絵を見て詠じた歌で、深く六道まで追求したものではない。「続後撰集」(一首)「続古今集」(一首)そして「風葉集」の後の「続拾遺集」(一首)「新後撰集」(一首)「玉葉集」(三首)と受け継がれており、「風葉集」もその流れを踏襲していると言えよう。

三

次の第三歌群は、(E)仏事及び仏道修行中詠まれた歌(八首)、(F)来世の成仏を希救する歌(四首)で構成されていると思われる。(E)の歌は、第二歌群にも存したが、大きな相違は、第二歌群は「のり」に対し第三歌群(E)は「蓮」「露」が歌中共通して詠み込まれていることであろう。

いひてわたり侍ける女の仏事しけるにさゝけものでうしてつかはし侍とて

さかのゝ二のみこ

511 せはからぬはちすの花ときく物をもらすへしやはかゝる露まで

かへし

中務卿のみこのむすめ

512 にこりなき池のはちすの花なれば此世の露はすゑぬなるへし

おこなひなとし侍けるをさまたけてゆくすゑなかきことをちきり侍ける人に

513 このよにはゆく末とても限あるを長く蓮のうへをちきらん  
こゝろ高き後冷泉院の宣旨  
おこなひすとてねふると人のわらひければよめる

514 きえぬへき露の我身を夢にてもはちすの上におくやとぞ思  
うたゝねのかつらの尼

515 うきしつむ池のみくつとなしはてゝ空にひらくる花ときかはや  
かはねたつぬる三のみこ  
すみわたりける女かくれてのちあかつきの念仏のゑかうにもいまさらもよほされ  
侍ければ女の母に申つかはしける  
なひて思つゝけ侍ける

516 いつかまた蓮のうへにあひもみむ露のやとりに心まとはて  
あひすみくるしきの内大臣  
式部卿の宮の北方

517 今はとてはちすのうへを思ふにも露けきは猶この世なりけり  
いせをの前関白三君  
さまかへてのちよみける

518 にこりなき蓮のうへの露計いかてこの世にこゝろとめし

511 は散逸物語「嵯峨野」の歌で、中務卿女の仏事に二の宮が捧物を調じ贈った折の贈

答歌であるが、中務卿女の返事は何とつれないのであろう。「此世の露はすゑぬなるべし」と強い調子で断っている。二の宮の一方的な恋情であつたろう。

<sup>513</sup>は、「無名草子」「物語二百番歌合」にも採られている「心高き春宮宣旨」である。資料も多いことから、諸先生方よりかなりの内容が復原されている。移り気な内大臣が恋し、物思いにふける日々を過している宣旨が、寺にでも籠り仏道修行していたのであろう。それを聞き、さすがにあわれと思ひ内大臣を訪問し、行末長きことを契つた折のことと思われる。道綱の母の山寺（鳴滝）参籠を彷彿とさせる場面である。

<sup>514</sup>は「風葉集」に六首残されている散逸物語であるが、この詞書・歌は実にユーモアあふれ愉快である。仏道勤行を努めながら眠ってしまうのを人が見て笑つたので、「現世では消えてしまふはかない我身を、夢だけでも極楽の蓮の上に居たいと思つてね」とやり返すのである。以上ここまでの四首は、仏道修行中といつてもさほど深刻な響きは見られない。ところが次の五首は、愛する人を亡くしその供養中に詠じられたもので、悲愴感が伝わってくるように思われる。

<sup>515</sup>は、「更級日記」「狭衣物語」にもその名がみえる「かばね尋ぬる宮」物語の歌で、「風葉集」に二首存する。この物語の復原は、多くの先学の諸氏が試みられ、特にこの歌の解釈については何度も議論が重ねられてきた。釈教部の配列を鑑み、この歌を解釈して行きたい。まず詞書だが、「人目を憚つて通つていた女が亡くなつて『つみふかきさま』にみえたので、出家し女のために廻向しながら菩提をとむらうことを思い続けまして」くらしい解釈か。「つみふかきさま」であるが、ほとんどの諸先生方が「夢に」を補い、夢にその女が現われてまだ成仏できていない様子に見えたと解されている。「風葉集」には、



夢に人（生きている人・亡くなった人・神・仏）が現れたという詞書が三十二ある。そのうち現在残っている物語の歌は六首で（現存物語でも散逸部分に属する歌は除く）、どれも実に丁寧に「夢に」或は「まどろませ給へるに」が記されている。脱文ならともかく、どうもこの箇所だけ「夢に」の語が省略されていると考えるのは、少々不審である。何か実際「つみふかきさま」にみえた事があったのであろう。次に歌であるが、上句については小木喬氏が「法華経」の「提婆達多品」の「女人成仏」を詠んでいとされていながらうであろうか。勅撰集（八代集）の「女人成仏」の歌を調べてみると、すべて「法華経」の通り「海」「わたつみ」が詠み込まれており、ここのだけ「池」とするのはどうも合点がいかない。また経文を踏まえた歌は、前述した様に第二歌群にまとまっている。しかもこの歌群は八首に「蓮」、そのうち六首に「露」がよみ込まれた歌が配列されている。「蓮」は来世極楽を表し、「露」は、はかない現世を示している。この<sup>515</sup>の「花」は当然「蓮」のことであろう。故にこの上句は現世、つまり今の状態であり、下の句は望んでい

る来世を表現していると考えた方が妥当ではないだろうか。「浮き沈む池のみくずとはなし果ててしまわないで、極楽にひらいて蓮の花となってほしいものよ」、上の句は、池に投身自殺した女のことを言い表しているであろう。

<sup>516</sup>は「あひずみ苦しき」の歌で、詞書に「女の母に申しつかはしける」とあるので、<sup>517</sup>はその女の母の返歌であろう。意味の上からも呼応していると思われる。「すみわたりける女」とあるから、永年連れ添った正妻であろう。その妻が亡くなった後、暁の念仏の廻向にも改めて涙がもよおされるので、その母に自らの心情を書き贈ったのであろう。上の句に来世での妻との再会を希望し、下の句にただ今の住みかである「露の宿り」——つまり

はかない現世を詠み込んでゐる。それに対し式部卿宮北の方は、上の句で我子の極樂往生を願い、下の句ではかない現世で涙にくれる我身の上を詠じてゐる。

<sup>518</sup>は、散逸物語「いせを」の歌である。出家した後詠んだ歌であるが、その理由は何であろう。配列から考えると、愛する人の死に会ったからかと推察されるが詞書に何も記されていない以上断定はしない方が良いでしょう。 「露ばかりいかでこの世に心とどめじ」と強い調子だが、逆に俗世に絶ち切りがたい何か強いほだしがある様にも感じられる。ままならぬ恋か失恋による出家かもしれない。上の句は、小木喬氏の述べられている様に「露」を導き出すための序詞であろう。「露」「蓮」の歌語にひかれて並べられ、来世への願望、現世での悲痛↓現世への訣別という順序の配列がされているのではないだろうか。

次の(F)歌群(四首)であるが、便宜上(E)と分断したが、配列の内容から考えると継続していると思われる。この(F)歌群は、釈教部の到達点とでも言おうか。廻向の結果成仏した者からの歌・中有に迷い成仏を願う者への鎮魂歌・仏道修行の結果仏の境地まで達した者の歌・そして永遠恒久この世に生きる人すべてに対し来世の救いを願うことのできる部をしめくくっている。<sup>519</sup>をはじめ「法華経」の「化城喻品」を念願にしているため、三首に「闇・光」にまつわる歌を歌中に収めている。

さころものみかとあすかゝるうせにけりときかせ給てのちのことなととふらはせ給てうちまとろませ給へるにありしなからのさまにてみえ奉りけるうた

<sup>519</sup>くらきよりくらきにまとふしての山とふにそかゝる光をそみる

わらはにて心と、めたりける女のくらくておそろしきにしそくさしてといふ夢に  
みてなくなりけるにやとて光明真言よみてその印結ひて思ひやるとよめる

あまのもしほひの大僧正

520 なか空にたゝよふやみは深くとも光をかはせやまのはの月

あつまのかたに修行し侍けるに頼義朝臣かせめけんころもかはのたちに思ふ心あ  
りてそとはたてなんとして

521 すくはんと思ふちかひをたておけはうへも仏のすかたなりける

入道前関白太政大臣さかにてわつらひ侍けるに行幸ありて常行堂のみあかしの事  
などおほせくたさせ給うてよませ給ける

有明のわかれのみかとの御歌

522 すゑの世を久しくてらせかゝけおくけふのみゆきの法のともし火

519 は「狭衣物語」の飛鳥井姫君の遺詠である。狭衣大将が飛鳥井姫君が亡くなったこと  
をお聞きになり、来世のことなど弔いなさると、その夢に生前の姿で姫君が現われ詠じた  
歌であり、成仏できなかった我身が、狭衣の懇ろな法会により救われ、その御礼を述べた  
のである。

520 は「海人の藻塩火」の大僧正（竜吟）の歌である。「童にて心とどめたる女」は、  
大僧正がまだ修行の身の頃、心通わせた女性新宰相のことで、この淡い恋は女の死という  
形で終わっている。（雑一<sup>1235</sup>に新宰相の病床の歌がある）その新宰相が夢に現れ、「暗く  
ておそろしきに紙燭さして」と述べたという。竜吟はそれにより女の死を知り、迷ってい

る女を救うべく光明真言法を行ったのである。「なか空」は「中有」のことで、人が死んで次の生を得るまでの四十九日間の体のことである。521の「うべも仏の姿なりける」は、すでに悟りの境地まで達したことが伺える。この歌には詠者名が記されていないが、前歌の主人公大僧正が、春下部99では吹越（今の山形県月山）まで修行に赴いていることや、高僧であったことなどと考え合わせると、「海人の藻塩火」の歌として良いのではないだろうか。狩野氏旧蔵本が頼朝となっており、頼義か頼朝かで成立年代に隔りがでてくるが、作り物語に史実が直接描かれているのは例が少なく、誰かモデルがあるのかもしれない。522は「有明けの別れ」の末尾近く、嗟峨に隠棲している入道前関白太政大臣の病い重くなり、帝の行幸を得ることになる。帝は阿弥陀堂の堂内を次々拝みなさり、入道のためお堂のお灯明のことなど仰せなさって詠まれた歌である。この歌の背後には、慈円の「ねがはくばしばしやみぢにやすらひてかゝげやせまし法の灯」（「新古今集」・釈教<sup>1932</sup>）や伝教大師の「あきらけく後の仏のみよまでも光つたへよ法の灯」（「新拾遺集」・釈教<sup>450</sup>）等があるように思われる。迷いの衆生を来世にて救われるようにとスケールの大きな歌として、神祇・釈教部を締めくくっているとみてよいのではないだろうか。

### 結語

以上、釈教部について種々考察を加えてきたが、まず仏詠・夢告の歌、そして仏詠と思わせた歌（第一歌群(A)(B)）が冒頭に位置し、神祇部と対照的な配列をみる事ができた。この両部の冒頭に神詠・仏詠群が存するのは、先行する勅撰集では「新古今集」だけであ

る。「風葉集」の直前に編まれた「続古今集」には、神祇部冒頭に神詠の歌群を有してはいるものの、釈教部に仏詠歌群を含んではない。だが、「続古今集」自身「新古今集」をめざしたというものの、撰者間の不協和音がみられ、それがそのまま編集結果となって表われているとされている。「風葉集」において、他部について配列等考究した上でないと明確には言い切れないが、「新古今集」―「続古今集」「風葉集」という一つの流れがあるのではないかと考えられる。少なくとも全く意識していなかったとは言えないであろう。特に「続古今集」とは、部立、配列においても、類似していることから、撰者等問題も含み、これからもっと研究されて良い問題であろう。

「法華経」を中心とした経文を詠み込んだ歌の歌群は、日常性を反映し当時の物語歌においても「法華経」全盛であったことを示している。また短編が多いことから、「風葉集」成立に近い頃、仏教結縁・縁起等をテーマとした小物語が頻出したことを伺わせよう。第三歌群(E、F)の来世での成仏を願う歌の配列は、極楽での後生を望む歌が次第に深刻になるように並べられ、救われた者の歌を含め、衆生の濟土を訴えた「有明けの別れ」の歌で幕を閉じた、誠に工夫された配列と言えよう。

ところで、この釈教部に「源氏物語」「うつほ物語」の歌がないという事実についてだが、いったいどういうことであろうか。この両物語に入集すべき歌が存しなかったのだらうか。有名な藤壺の法華八講をはじめ「源氏物語」には数々の供養・仏事場面が描かれている。経文を詠み込んだ歌、来世を願う歌等数多く有する。同じことは千首近くの物語歌を持つ「うつほ物語」でも言えると思う。主題の一つである琴の秘曲伝授は、仏教信仰と密接なかわりを持ち、またもう一つの主題あて宮求婚譚には、出家した仲頼・放浪する

実忠の姿が描かれ、釈教に関する歌も存しないわけではない。これらのことを考え合わせると、やはり意図的に両物語の歌を採らなかつたと考えて差しつかえないのではないだろうか。前述した様に、釈教部には「無名草子」以前と思われる物語の歌があまりにも少ない。その九割程が「無名草子」以降の新しい物語と考えられる。しかも「風葉集」に一、二首しか採られていない短編を九物語有しており、このことは「風葉集」成立時に近い頃書き上げられた仏教色濃い小物語を数多く採用していると言えよう。釈教部で一番古いと考えられる物語は「隠れ妻」で「源氏物語」以前の作と言われている。また「かばね尋ねる宮」が「源氏物語」成立直後と推定され、後「狭衣物語」「海人の荻藻」「心高き春宮宣旨」「有明けの別れ」と続くが、この六物語を唯一例外として、新しい物語が多いということは、この部の一つ大きな特色とみて良いのではないだろうか。そしてそれは、撰者が作爲的に「源氏物語」「うつほ物語」の歌を一首も採らず、新興の仏教色濃い小物語の歌を数多く収めることによって、印象付けようとしたのではないだろうか。

#### 神祇・釈教部まとめ

神祇・釈教部について考察を加えてきたが、その結論として、一、この両部は、神詠・仏詠歌群を冒頭に持ち、対照的な配列がなされている。同様の歌群を持つ先行する勅撰集の「新古今集」或は「続古今集」を意識したものと思われ、これらの勅撰集と何らかのつながり（撰者等）があると考えられる。二、釈教部は、唯一「源氏物語」「うつほ物語」の歌が省かれており、かわりに「風葉集」成立時に近い頃書き上げられた仏教色濃い小物

語を多く起用している。三、「うつほ物語」の「題しらず」歌など、編集態度・成立過程に何らかの疑問を投げかける歌があることが浮かびあがってきた。

以上、幾つか大小問題点を出すことができた。特に一・三の問題は「風葉集」編纂過程にかかわるだけに、これから他部を調査研究し続けた上で、結論を出したいと思う。

〈注一〉他に「無名草子」にはその名を見い出せないものの、「更級日記」「狭衣物語」に記されている「かばね尋ねる宮」、「狭衣物語」「拾遺二百番歌合」に採られている「袖ぬらす」、「枕草子」に名が見える「うもれ木」をつけ加えた。(△印を付す)但し、「六条齋院歌合」にその名が見える「浦風にまがふ琴の音」は「風葉集」の「まよふ琴のね」と同一かどうか不明であり、同じく「をか山たづぬる民部卿」も「風葉集」の「をぐら山たづぬる」と同じ物語を示しているのか明確でない。しかし同一説の方が有力であり( )を附して書き加えた。

〈注二〉狩野本・図書寮本・竜大本・類従本・嘉永本は「こひわふる」。

〈注三〉現存本の方が草稿本ではないかという説もある。

〈注四〉「万の仏の願よりも、千手の誓ひぞ頼もしき。枯れたる草木も勿ちに花咲き実生ると説いたまふ」(「梁塵秘抄」口傳集卷第十)

〈注五〉八代集では「千載集」の「たのもしきちかひは春にあらねどもかれにしえだも花ぞさきける」(釈教<sub>1238</sub>・前大納言時忠)他に「続詞花集」(釈教)に「梅

の木のかれたる枝に鳥のゐて花さけさけと鳴くぞわりなき」等がある。

〈注六〉法輪寺が院政期以降の歌会によく登場することは、松野陽一氏により御指摘いただいた。

〈注七〉狩野イ本・嘉永本「きこえ」丹鶴本「きゝわたる」

〈注八〉「八月ばかり月あかかりける夜阿弥陀聖人のとほりけるをよばせさせ給ひてきとなる女房のもとへいひつかはしける　あみたぶとなふるこゑにゆめさめてにしへながるる月をこそみれ」（金葉集・雑下<sup>630</sup>・選子内親王）など。

〈注九〉「二月十五日のよなかばかりに伊せ大輔がもとへつかはしける　いかなればこよひの月のさよなかにてらしもはてでいりしなるらん」（後拾遺集・釈教<sup>1181</sup>慶範法師）など。

〈注十〉「寄月念極楽といへる心をよみ侍りける　いる月をみるとや人はおもふらん心をかけてにしにむかへば」（千載集・釈教<sup>1208</sup>・堀川入道左大臣）など。

〈注十一〉樋口芳麻呂氏校注『王朝物語秀歌選上』（一九八七年十一月岩波書店）参照。

〈注十二〉嘉永本「院新中納言」。

〈注十三〉「維摩經十喻、この身は水のおわのごとしといへる心をよみ侍りける　ここに  
きえかしこにむすぶ水のおわうきよにめぐる身こそ有けれ」（千載集・釈教<sup>1202</sup>前大納言公任）

〈注十四〉「為説是經故。忍此諸難事。我不受命。但借無上道。」参考歌「諸人の命にかふる法なればひろむるかひのなからさらめや」（拾玉集）

〈注十五〉「屏風絵に天王寺西門に法師のふねにのりて西ざまにこぎはなれいくかたか



きたるところをよめる あみだぶつととなふるこゑをかぢにてやくるしきう  
みをこぎはなるらん」（『金葉集』・雑下<sup>647</sup>源俊頼朝臣）など。

〈注十六〉「めぐりけむほどかなしきおくれてはひとりや六の道にまどひし」（赤染衛  
門集）

〈注十七〉「地獄絵につるぎのえだに人のつらぬかれたるを見てよめる あさましやつ  
るぎのえだのたわむまでこはなにの身のなれるなるらん」（『金葉集』・  
雑下<sup>644</sup>和泉式部）

〈注十八〉「つみふかきさまをみて」の内容であるが、女が何らかの形で残していった  
形見の品を見たと考えられないだろうか。入水自殺を計る女主人公が形見の  
品を残していった物語として、「狭衣物語」の飛鳥井姫君の扇、散逸物語  
「交野」の大領が女の袴の腰紐（各々女の辞世の歌が書き残されている）が  
存する。この「かばね尋ぬる宮」の物語については、松尾隠氏『平安時代物  
語の研究』（昭和三年東宝書房）小木喬氏『散逸物語の研究平安・鎌倉時代  
編』（昭和四十八年笠間書院）以外に、三谷栄一氏『九条家旧本蔵本 狭  
衣物語の研究』（昭和三十八年 未刊国文資料）、三谷栄一氏・関根慶子  
氏『狭衣物語』（昭和四十年）岩波古典日本文学体系関根慶子氏訳注『更  
級日記<sup>上下</sup>』（昭和五十二年 講談社学術文庫、樋口芳麻呂氏、「かばね尋  
ぬる宮」物語考」（昭和五十四年『愛知教育大学研究報告』第二十八輯）大  
槻修氏、「かばね尋ぬる宮」の物語」（昭和五十六年三月『語文叢誌』）  
「かばね尋ぬる宮」の物語」（昭和五十五年十二月『日本のことばと文

芸<sup>四</sup> 第二集 甲南女子大学国文学会)の参考文献がある。

〈注十九〉女主人公が入水自殺を計る物語は「源氏物語」「狭衣物語」、散逸物語とし

て「朝倉」「交野」などが知られるが、そのうち

○「狭衣物語」―飛鳥井姫君入水直前の歌「早きせのそこのみくづになり  
きとあふぎの風も吹きつたへよ」

○「朝倉」―朝倉の姫君が身を投じたことを聞き、関白が打出近くで詠んだ  
歌「恋ひわひぬ我もなきさに身をすてゝ同じもくつと成やしなまし」(風  
葉・恋四)

と「もくつ」「みくつ」と類似の表現がみられる。

〈注二十〉「有明けの別れ」の成立年代は「無名草子」成立に比較的近い頃と考えられ

その意味では特に古い物語とは言えないであろう。拙稿(旧姓 原田)「

『有明 けの別』成立年代試論考」『中古文学』二十四号。

○勅撰集の引用は『新編 国歌大観』、「法華経」の引用は『大蔵経』による。



#### 第四章 離別部の構造

離別部というものの性格については、松田武夫氏が、『古今集の構造に関する研究』「第八章 離別部の構造」で、また有吉保氏が『新古今和歌集の研究』「第四章 離別部の構成と特質」の中で各々詳しく論じておられるが、主として別れに際しての人間の心の動揺悲愁を写したものであると考えられる。人と人とが離別する場合、それが親と子・兄と妹・主人と従者、そして友人同志・恋人同志とそれぞれ情感が異なり、かつ詠われる性質も異なる。採歌し、その上多種多様の様相を持つ離別歌の配列を、何等か秩序だてようとするその創意工夫が撰者の腕の見せどころなのである。そこに撰者の意図が働いていると考えられ、何らかの「風葉集的なもの」が見られるのではないだろうか。

「風葉集」離別部は「第一章：部立構成」で前述したようにその詠歌数において、勅撰集の時代的流れの中離別部が衰退するという傾向の中で、ただ一つ増化がみられるのである。この点を考慮に入れて、「風葉集」の離別部の構成と特質を考えて行きたい。

まず最初に、詠歌内容からいくつかの歌群に分け、その構成を探って行こうと思う。

〔第一歌群〕

中宮のをさなくおはしましけるくしきこえてむすめのみやこにのほり侍けるによめる

源氏のさきのはりまのかみ

523 行さきをはるかにいのる別路にたへぬは老の涙なりけり

おなし中宮六条院にわたり給ひけるときよめる

あかしのうへ

524 末とほき二葉の松に引わかれいつかたかまかけをみるへき

をさなきむすめをみやこにおきてあつまへくたり侍けるによめる

よみひとしらす のしま

525 思はずなまた二葉なるひめ小松引わかれゆくなけきせんとは

よし野に侍けるころあねを関白のむかへ侍ければちゝみこわかれをしみ侍けるついでに

いまとりかへはやのよしのゝみこの中君

526 いつかたへ身をたくへましとゝまるもいつるもともにをしき別を

523 の歌は「源氏物語」「松風の巻」に存する歌で、明石の上が源氏のもとへ引取られるため、妻尼君もついて行くことになり、明石入道が尼君達との別離の場面で詠んだものである。すぐ後に尼君、明石の上の答歌と、入道の別れの言葉が続く。「源氏物語」中の数々の別離の中で、古来有名な場面の一つである。特にこの歌は、老いの身で再び妻や子

に会えるかどうかという深い悲哀感を漂わせ、かつ別れ行く者の将来の幸福を願う意を含み、離別部冒頭に位置する歌としてふさわしいものと考えられる。

524 526も同様親子の別離の歌であるが、524は、明石の上が娘の将来のために三歳になる娘を手放す時の歌であり、その「二葉の松」を受けて525は「二葉なるひめ小松」と詠んだ歌を並べている。525の「のじま」は散逸物語であり、詠歌事情は詞書より察するしか術がないが、その意から考うるに、おそらく男について東に下るのだが、何らかの事情で幼い娘を残して行かなければならないその哀感を詠んだものである。小木喬氏が論じられるように、幼い娘を京に留めるのはその男との間の子供ではないからであるとすれば、この別れには再会の望み薄い、深い悲哀が含まれるであろう。526「とりかへばや」歌は、吉野の大君中君が大将に引取られることとなり、中君が父と離れる心境を表したものである。以上この四首は、父と妻子・母と幼い娘・娘と父という親子の悲別に際する関連で一群となっていると言えよう。

〔第二歌群〕

すまにうつろひ給はんとするころまやうたいにより給ひてこよなうこそおとろへにけれとて

六条院御うた

527 身はかくてさすらへぬとも君かあたりさらぬかゝみの影ははなれし

御かへし

むらさきのうへ

528 わかれてもかけたにとまる物ならばかゝみをみてもなくさめてまし  
そのあかつきになりて

六条院御うた

529 いける世のわかれをしらて契つゝ命を人にかきりけるかな

むらさきのうへ

530 をしからぬいのちにかへてめのまへの別をしはしとゝめてしかな

この四首は、源氏が須磨へ流浪するに際し、紫の上と交した歌である。官位を剝奪され、いつ許されて都に戻れるか分からず、それに加え最愛の人と別れねばならない心情が切々と詠い上げられている。「源氏物語」中の別離場面で秀逸とされる箇所であり、特に527 530の歌は「物語百番歌合」にも採られている。

元来、勅撰集に贈答歌を配すると、その部分だけ前後の流れと分断され、独立性が強まるという性格をもつ。この場合、527 528の贈答歌と、529 530の贈答歌の間には二人の別れがたい心情に筆を尽くされており、文面の隔たりがあるにもかかわらず、組み合わせるのには、撰者が源氏と紫の上の別離を一つの世界として独自に表現したい意図があったためではないかと思われる。

〔第三歌群〕

中納言もろこしへ思ひたち侍とていとまきこえけるに月いとあかゝりければ

はま松の東宮

531 いかはかり涙にくれて思ひ出んにしにかたふく月を見つゝも  
御かへし

532 古郷のみかさの山を思ひいて、我もいかゝは月を見るへき

参議のうちたゝ遣唐のそへつかひにわたり侍けるにしたひくたりてまつらの宮に  
ととまりてよみ侍ける

まつらのみやのあすかのみこ

533 けふよりや月日のいるをしたふへきまつらのみやにわかこまつとて  
同したひかの宰相にしひてつかはしける

かむなひのみこ

534 もろこしのちへのなみまにたくへやる心も共に立かへりみよ  
もろこしにわたるとて道より女のもとにつかはしける

はま松の中納言

535 身にそへる面影のみそこきはなれゆく波ちともをくれさりけり  
みかとなりのくにへいてたち給に御そてうしたてまつるとてたもとにむすひつ  
け給ひける

みことかしこき后

536 別ち唐錦にもあらなくにたゝまくおしきたひ衣哉

中納言すゝしのふきあけに人々まかりてかへりけるにぬさてうしてをくるとて少  
将なかよりに

うつほのきのかみたねまつ女



537 今はとてたつとしみれはから衣袖のうらまで塩のみつ哉  
めのとのちくこになりてくたりけるに

なるとの中務卿のみこの女

538 いかにせんはか身をさらぬ涙たに松こそいつれとまりやはする  
つくしにて見なれける女にのほるとてよめる

たなはたのつたへの太宰大式

539 かさねけんことそくやしきから衣袖のみぬるゝつまと成けり

山の僧正の母

かへし

540 から衣たちはなれなは我のみそうらむる袖もくち果ぬへき

この九首は、別れの歌を贈る相手は各々異っているが、再会することができそうにない不安を詠んだ点に特色ある一群である。<sup>531</sup>から<sup>536</sup>までの歌は、すべて唐土へ旅立つ者と残る者の離別歌である。当時の航海技術では無事唐土へ到着できるかどうか、そして再び日本<sup>531</sup>の土を踏めるかどうか、その深い悲愴感が別れ行く者と見送る者との間に漂っていると言えよう。

<sup>531</sup>は、「浜松中納言物語」の歌だが、現存本になく、佚亡首巻に含まれていたものと推定される。主人公中納言が、唐の第三皇子として生まれ変っているという夢のお告げにより、父会いたさに唐へ出発しようとする朝廷に暇を乞い、幼きみでかつライバルでもある式部卿（後の東宮）と交<sup>532</sup>した歌と考えられる。<sup>533</sup><sup>534</sup>は、遣唐副使として唐へ渡る大将に、母

と恋人が贈ったもので、特に<sup>533</sup>の歌は「松浦宮物語」の命名となった歌である。この<sup>531</sup>から<sup>536</sup>まで、唐へ旅立つ別離の歌が並べてあるのだが、ただ単に集めてあるのではなく、その配列をみると、<sup>531</sup><sup>532</sup>は宮中での歌の贈答、<sup>533</sup>は太宰府で詠んだ歌である。<sup>534</sup>は、物語展開上は<sup>533</sup>の前に詠まれた歌だが、恋慕う女性からの歌として<sup>535</sup>に続く役割を果たし、「なみま」「波ち」と言葉の連続も工夫されている。その<sup>535</sup>は「もろこしにわたるとて道より」とあるように、旅の途中であり、<sup>531</sup>から順々に詠じられる場が都から九州へと移動し、悲愴感を深める効果もかもし出している。

<sup>537</sup>は、旅立つ地は前歌とは共通性はないが、<sup>536</sup>の歌から続いて「唐」「衣」という語、及び「涙」の縁語を含む歌が並べられている。<sup>536</sup>に「唐錦」「たひ衣」、<sup>537</sup>に「から衣」「袖のみぬるる」、そして<sup>540</sup>では「から衣」と歌語の類似で構成してある。<sup>531</sup>から<sup>540</sup>まで、すべて「唐土」という語で共通性をもたせていると言えよう。

#### 〔第四歌群〕

すまひの節すきてつくしにかへりくたらむとてすけの中将のもとにまかりてよめる  
すまひの修理のすけ

<sup>541</sup>数ならぬ身こそゆくともしたかはぬ心は君にたちもはなれし

かへし

右中將

<sup>542</sup>とゝむるも心はみえぬ物なれば猶おもかけそこひしかるへき

あけむとしも又のほるへきよしなと申て

<sup>543</sup>都いてゝまたこん秋の空まではおほつかなくそ侍わたるへき

かへし

修理亮

544 中々に都の月をみそめては心つくしにわれそなかめむ

この「すまひ」は、散逸物語で「風葉集」に十首入歌しているだけであり、他に資料はない。「風葉集」選歌の歌数と物語量は比例していると言われており、その点を考慮に入れると、この「すまひ」は短編と言わざるを得ないであろう。他の歌、及びその詞書から判断すると、修理亮が中将を恋慕うという特異な内容の物語と考えられているが詳細は不明である。541と542、543と544の各贈答歌間には、543の詞書に「あけむとしも……」とあることから、少なくとも一年の年月が存すると考えられる。つまりこの二組を並べたことは、前述の源氏と紫の上の贈答歌と同様、前後と分断された一つの独自の世界を表現したかっためではないかと考えられる。「つくしへ下る」という点では、前歌<sup>540</sup>と続いているが、おそらく、今までの九首の離別場面の単調な流れに変化を与うべく、この四首をここに配列したのではないかと考えられる。

三

〔第五歌群〕

石山にこもらむとて出侍けるあかつきに女に

みなせ河の左中将

545 今こむと思ふ物から心をはとめてそいのるあかつきの月

かへし

入道一品宮中納言

546 かへりこむ程をもまたすきえはては此あかつきや限なるへき

もろこしよりかへりわたり侍けるにかのくにの人ともおくりにまうてきてふみつ  
くりなとしけるついでによめる

はまゝつの中納言

547 おなしよのしはしの程と思ふたにわかれてふ名はいかゝ悲しき

かへし

もろこしの宰相

548 あふこなみ雲のきはめをへたてきていつともあらし君をごふらく

あすかのみこをつくしにおくりおきてかへりのほるとてよみはへりける

まつらのみやの大将冬明

549 しらさりしわかれにそへるわかれ哉これもやよゝの契なるらむ

かへし

あすかのみこ

550 いかなりしよゝの別のむくいにていのちにまさる物思ふらん

参議うちたゝかへりわたらんとし侍けるによませ給ひける

まつらのみやのもろこしの后

551 秋かせの身にしむころをかきりにて又あふましき世のわかれ哉

御かへし

552 ゆく舟のあとなきかたの秋の風わかれてはてぬ道しるへせよ

つくしにくたる人にのたまはせける

おちくほの中宮

553 をしめともしひて行たにうき物を我心さへなとかおくれぬ

かへし

大納言たゝよりの四君

554 身をわけて君にしそふる物ならはゆくもとまるも思はさらまし

これら十首を一つの歌群と見る理由は、各々贈答歌となっており、言葉で連続させながら、一つ一つ小さな物語世界を彷彿とさせるよう工夫されているようである。

545 は、散逸物語「みなせ川」のものだが、「風葉集」に存する他の歌よりこの入道一品宮中納言は、入道一品宮家に仕える女房と考えられる。前歌<sup>544</sup>の「月をみそめては心つくしにわれそなかむる」を受け、この歌は「心をとめてそいのるあかつきの月」と呼応し、月に託する思いが、「ながむる」から「いのる」へと、歌に詠じられた悲しみは深刻になつて行くように工夫されている。また、<sup>547</sup>と<sup>549</sup>の歌は、「わかれてふ名」（「わかれてふる」という伝本もある）と「わかれにそへる」（但し、続々群書類従本「に」が「て」に、狩野本は「へ」が「ふ」となっている）と類似し、連続させようとする試みが見られる。<sup>550</sup>の「よゝの別」が<sup>551</sup>の「松浦宮物語」歌の「よのわかれ」と共通している。しかも、その返歌<sup>552</sup>の「ゆく舟」という語が、<sup>554</sup>の「落窪物語」の「ゆくもとまるも」で、「ゆく」という語の共有がみられ、各独自の物語世界で離別部の流れが分断されているという感じは受けない。

#### 四

〔第六歌群〕

ふき上に人々まうてきてひころあそひてうつきの朔日頃にかへり侍ければよめる

中納言すゝし

555 かたらはぬなつたにもくるけふしもや契し人のわかれゆくらむ

齋宮せきこえ給ひぬときこしめしてよませ給ひける

<sup>（註四）</sup>ひとるかたのみかとの御歌

556 別てふつけのをくしもさしてしをまたせきこゆと聞そ悲しき

みやつかへに出たち侍けるにあねのふるさとにとまりて侍りければ

すゑはの露の中納言典侍

557 わするなよ心にもあらてわかぬる此夕くれそかたみなるへき

母御息所のすみ侍ける所をほかへうつろひ侍とて

しのふくさの先帝姫宮

558 なき人のかたみとみつる宿をさへ又わかぬるけふそかなしき

をとこの心かはれるさまに侍ければ外にわかるとてかのをとこのいもうとなる人

に

ゆめちにまとふ大納言女

559 行すゑにたちかへるへき身なりせはわかれもかくは思はさらまし

関白のむすめ

かへし

560 ちとせまてすむへきものを君か為別といふ名はかけすもあらなん

左大将まのゝうらにこもりゐて侍けるころまかりてかへるとてよめる

女すゝみの中宮権大夫

561 君をおきてかへらぬたひの空にたに露けかるへき袖のうへ哉

心ほそくおほえけるころすこしへたゝりぬへき人に

みなせ川の入道一品宮中納言

562 風をまつ露のいのちはえそしらぬたゝかり初のわかれなりとも

たゝにもおはしまさゝりけるにほとちかくなりていてさせ給ふとて

風につれなきのよしのゝ院中宮

563 かり初と思ふへきかはわかれなはさためなき世のいのちまつまに

宇治にすみ侍けるか心ならずみやこへいつとて

宇治の河なみの式部卿宮北方

564 いのちをそかきりと思ひしやなれとさらて別るゝ方も有けり

世中はしたなきことゝもありて女二宮うちを参り給ふにきこえ侍ける

みなせ川の左大将

565 なにせんとさらぬわかれをなけきけんかゝる限の道も有けり

ちゝ大式になりてくしてくたり侍ける女をえとゝめ侍らてよめる

つゆのやとりの権大納言

566 行末のさらぬわかれを思はずはなけかさましこゝろつくしを

つれなかりける女につくしへくたりけるにこかねしてかまと山のかたをつくりて

あたりをこかしてをとこのうちみあけたるをつかはすとて

いはやの左兵衛督

567 かまと山もゆる思ひもひとしくて我はけふりにたちおくれぬる

かせのたよりにてみちのくにへくたりてのほりけるにかしこなる女に

うらみしらぬの所の衆

568 花かつみかつみてたにも恋しきにあさかのぬまをいかてゆかまし

この十三首は、前の第五歌群とは異り、贈答歌は一組だけで、後は皆贈歌か答歌かを単独で配列してある。この歌群は、男女の関係が疎遠になり嘆く歌が多く、しかも読み進むにつれその別れの心情が単なる離別の情よりさらに深刻な哀傷感を漂わせるよう構成してあるように思われる。555「うつほ物語」は、前歌の「ゆく」を受けて「くる」という語が使われ、連続させている。556の歌は、散逸物語「ひとりごと」と思われるがその詞書から察すると、齋宮御別れの儀式で、帝自らつげの櫛を齋宮にさしなされたが、その齋宮が逢坂の関を越えられもう逢うこともできないという悲しみを詠んだもので、おそらく帝は、この齋宮となられた女性を秘かに恋慕っておられたのであろう。556と558は「かたみ」という語で続き、559、560の贈答歌は、心変りした男への恨言を切々とその妹に訴えているものである。

561から566までは、いくつかの歌語で各歌がつながっている。561の散逸物語「女すゝみ」歌「露けかるへき」が562の「露のいのち」と関連をもたせ、その「いのち」が563の歌中に存している。また、562と563の歌は、「かり初」という語の共通もみうけられる。しかも、563の「いのち」が、564において「いのちをそかきり」と続き、「さらて別るゝ」が、565の「さらぬ別れ」と配列されている。悲しみの涙を表わす語「露」から「いのち」へと続き、そして「さらぬ別れ」へと続いていく。この「さらぬ別れ」は、「伊勢物語」八



十四段の業平と母宮との贈答歌、

○老いぬれはさらぬ別れのありといへばいよ見まくほしき君かな

○世の中にさらぬ別れのなくもがな千代もといのる人の子のため

この歌を響かせ、「避けらぬ別れ——死別」を指し示すものであろう。この「さらぬ別れ」が<sup>567</sup>で「けぶり」となり、永遠の別れへとつながり、<sup>569</sup><sup>570</sup>の「竹取物語」へと橋渡しの役目を担っている。

ただし、<sup>568</sup>の歌については異文が多いため物語名自体はつきりせず、資料もこの「風葉集」一首のみでどうも歌の意味がとれない。しかし、ここに位置している以上、何か「永遠の別れ」に関する内容の歌であろうと推定はされる。

〔第七歌群〕

天の迎ありてのほり侍けるにみかたとにふしのくすりたてまつるとて

たけとりのかくやひめ

<sup>569</sup>今はとてあまのは衣きるをりそ君を哀と思ひ出ける

御かへし

<sup>570</sup>あふことの涙にうかふ我身にはしなぬくすりもなにゝかはせむ

とてふしのくすりもこの御うたにくしてそら近きをえらひてふしの山にてやかさせ給へりけるとなむ

この二首は「竹取物語」末尾の有名な歌だが、「風葉集」では贈答歌の形式として並べら

れているが、樋口芳麻呂氏が、<sup>（まじ）</sup>

「御かへし」と詞書に記すのみであると、かぐや姫の昇天の場に御門も同席していて歌の贈答を行なったようにも解されて——幸い『竹取物語』は現存するのでそんな心配は

杞憂にすぎないが——詞書として適切であるのか問題が残ろう。

と述べておられる通り、物語本文では贈答歌として記されていない。<sup>569</sup>歌は宮仕えできなくなつた事情——そのおわびを述べた手紙に、壺に入った不死の薬を添えて頭中将に託した際詠じた歌である。それに対し<sup>570</sup>歌は、かぐや姫の昇天後、戦わずして戻つた中将は、帝にかぐや姫からの手紙と不死の薬を奉り、その折かぐや姫との再会が未来永劫不可能になつたことを悟り、絶望の思いを詠んだ帝の歌である。かぐや姫には届かない答歌である。<sup>569</sup>この<sup>570</sup>歌は、<sup>569</sup>歌の「けふり」を受けて、かぐや姫より奉られた不死の薬を焼かせしその煙とともに別離の涙の尽くることはない——と続き、離別部巻末を飾る歌として実にふさわしい選択と言えるであろう。配列を優先させるべく、詞書を工夫したと言えるのではないだろうか。

### 結語

以上の如く、七種の歌群に分け構成を検討してみたが、親子の別離の歌を冒頭に据え、次に古来人々に愛誦されている源氏と紫の上の別れの歌を一つの世界として並べ、幾つか

の歌語で関連付けながら悲愴感を深めて行く。それは次第に哀傷世界の様相を帯び、最後は月の世界へ戻るかぐや姫と別離を悲しむ帝との贈答歌の形で締めくくっている。

このように離別部を詳しく考察すると、実に細かい配慮がなされており、かつ哀傷歌的世界へと誘うその配列は見事であると言えると思われる。「風葉集」が歌数の点だけでなく、その構成上も離別部に力を入れたのではないかと考えられ、一つの特筆すべき現象と言えるのではないだろうか。

〈注一〉松田武夫氏「第六章 離別部の構造」「古今和集の構造に関する研究」

昭和四十年九月 風間書房。

〈注二〉有吉保氏「第四章 離別部の構成と特質」「新古今和歌集の研究」 昭和四十

三年四月 三省堂。

〈注三〉小木喬氏「散逸物語の研究平安・鎌倉時代編」昭和四十八年二月 笠間書院

〈注四〉<sup>556</sup>歌の物語表記は、京大本・続々群書類従本は「ひとりごと」となっており、

この「ひとりごと」では、意味が通じず、「ひとりごと」（独り言）か。

〈注五〉<sup>558</sup>の歌の物語表記は、京大本「かゝみしらぬ」、神宮文庫本「かゝみしらぬ

「他、「かみしらぬ」「うらみしらぬ」と多岐にわたっている。どちらにしても、「風葉集」では、この歌のみを採られている物語と思われる。

〈注六〉「風葉和歌集」の入選歌——「竹取物語」「落窪物語」を中心に——「鈴

木弘道教授退任記念 国語国文学論集」昭和六十年三月。

第五章 羈旅部の構造

羈旅歌は、離別部が旅への出発に当り相別れる瞬間の悲哀を詠じるのに対し、もっぱら旅中の感情を詠んだ歌を指すと言われる。「風葉集」羈旅部において、各物語内に立ち戻り、その物語場面が「羈旅」という範疇に則っているかどうか調査しながら、その配列を考究して行きたい。

—

「風葉集」の羈旅部は、大きく分けてテーマ別に二つの歌群から構成されていると考えられる。前半は京から東国へ下る旅程が場所・時間を追って配列され、後半は京から唐国へ行く旅程となっている。まず前半を第一歌群とし考察を進めていくが（第一歌群 571～587・第二歌群 588～601）その中第一歌群を便宜上 571 から 582、583 から 587 と二つの小歌群に分け論を進めて行きたい。

〔第一歌群（571～582）〕

あふさかをこゆるとてよめる（一）

とりかへばやの新中納言

571 あさほらけゆふつけ鳥ともろこゑになくなくこゆる相坂の関

石山にまうて侍けるにあふさかをすくとて

風につれなきの兵部卿のみこ

572 又こえむと人にもかたれあふ坂の関のしみつに袖そぬれしと

みちのくにくたらんとてあはつといふ所にとまりて侍けるに水うみのおもてに月のいみしうあかきを見ても思ひいつることおほくて

あさくらの皇太后宮大納言

573 しらしかしおきよりをちにかけはなれみし有明の月をこふとは

はゝそひていせにくたるへきにて侍けるにわつらふことありてとまりにければあふみたち給日つかはしける

ひとりかとの齋宮の女御

574 あふみてふ名をたのめともひとりけふたつはかひなししかのうら浪

かへし

按察大納言女

575 もろともにたゝまし物をよそにのみ聞そかなしきしかのうら浪

いせのみてくらの使にてくたり侍けるときすゝか山にてよみ侍ける

よその思ひの関白

576 またき秋のしくれふりぬるすゝか山ならはぬ袖に色そうつろふ

あつまへまかりける時みちにてよめる

のしまの三位中将

577 物毎にあはれなりけりたひの空わきていつれと人にかたらん

よみ人しらす

578 なかめわふる旅のあはれのかきり哉月かけかすむ明ほのゝ空  
579 うちなけきいく宵々の草まくら末こそ露はふかくなりけれ

右大将仲忠

たいしらす

580 たひ人のひもゆふくれの秋風は草の枕の露もほさなむ  
581 色そむる木のはまきて旅人の袖にしくれのふるそわひしき

のしまにまかりて月まちいてたる折しもしかのなきけるに思ひいつること侍  
れはよめる

のしまの三位中将

582 おもかけを浪よりいつる月にみてあかぬ名残をゝしか鳴也

この十二首は、京（逢坂の関）から東国（野島）へ行くその旅中過程を示していると考えられる。571は詞書に「あふさかこゆ」、歌中に「あふさかのせき」とあり、まずこの配列の出発地は、「百人一首蟬丸の歌にも詠まれ有名な逢坂の関である。東北・北陸等諸国への往還の通路として重要な関であり、物語歌・和歌においても「逢う」に掛けて古来から数多く詠み込まれている。東下りの出発地として冒頭に選ばれたのも当然であろう。この歌は、散逸してしまった「古とりかへばや」のものであるが、「物語二百番歌合」にも採られ、その詞書に「よをうらみてあふみのうきはしといふところにこもりてなむとて 右大臣四君」とある。詠者が異なる点が問題であるが、「風葉集」の誤りではないかと指摘されている。仮にそうだとすると、右大臣四君が何らかの事情で世間から追われ近江に籠る

うとして、その道中逢坂の関を越えた時詠んだ歌となる。この四の君は、「無名草子」に「四の君こそいみじけれ。あらまほしくてよき人にて侍り」と評され、古本においては悲運にもあそばされた、不幸な女性として語られていたらしい。「風葉集」愛誦者は、その物語場面にまでたち戻りこの羈旅部冒頭を味わったであろう——とすると、この東下りの出発は悲哀漂うものと考えねばなるまい。

572 は、「風につれなき」の散逸部分に属していたとされ、この歌の周囲についての詳しい状況は分からない。詞書に「あふさかを過ぐとて」とあり、前歌より一步東へ踏み出したことになる。歌中の「あふさかの関の清水」は、実際その地がどこにあったかは明確でなく、「無名抄」に記されている程度だが、歌枕としては有名である。この歌では「そぞぬれし」を導き出すものとして詠み込まれ、歌の背景にあるのは哀感を胸に秘めた石山詣であろう。前歌と響き合うように考えられよう。

573 は、詞書より朝倉の姫君が、この歌を詠んだ地は、粟津であることが知れる。粟津は地としては近江国に入る。「枕草子」にも「原は、粟津原」と書かれ、有名な地である。「朝倉」は散逸物語であるが、歌は、「物語二百番歌合」にも採られており、それらの詞書や「風葉集」の他部入集の歌などから、女主人公である朝倉の姫君入水直前に詠んだ歌ということが推定される。おそらく物語読者には知られた場面のものであったろう。逢坂の関から粟津までの空間的移動のみならず、571 から 573 にかけて悲愴感が深くなる様配列されていると考えられるのではないだろうか。

574  
575 は散逸物語「ひとりごと」において、斎宮とその母の贈答歌であるが、詞書に「あ

ふみたち給日つかはしける」とあり、その詠地が近江であることが分かる。近江といつても広いが、「しがのうらなみ」が歌中にみえる故琵琶湖畔で、しかも「伊勢にくだるべきにて」（詞書）から京都から伊勢路・美濃路の分岐地草津（滋賀県草津市）あたりかと推測される。物語終末には女御となり栄えた女主人公であるが、ここは斎宮として伊勢に下る失意の運命にあり、しかも頼みとする母は病を得、一人で行かねばならなくなった。おそらく「ひとりごと」の中において読者の涙を誘う場面であつたらう。

576 は「よそのおもひ」の歌であるが、夢のお告げ、御託宣などの内容が盛り込まれていた物語らしい。「風葉集」に二十一首採られ、散逸物語として「風葉集」三位の位置を占める。関白が春宮大夫の頃、勅使として伊勢神宮へ参つた折途中鈴鹿山で詠じたものである。昔東国へ通う道は、京都から伊勢にかかるものと、近江・美濃へかかる道と二つ存した。「伊勢物語」の業平や「海道記」の作者は、伊勢路へ出て海道を下った。それに対し阿仏尼や「東関記行」の作者は近江路を通り東へ下っている。この二路は今の名古屋あたりで合流していた。鈴鹿山は伊勢路にあり、この鈴鹿峠を越え木曾川を渡ると尾張の国へ入るのである。歌の内容はさほど深刻な響きはなく、初秋の景を詠んだものようである。旅の道中を楽しむという雰囲気で、571 から 575 までの悲愴感漂う歌群とその背景には大きなひらきがある。

577 は、詞書に「あづまへまかりける時、みちにてよめる」とあり、また歌中にも「たびのそら」とあって、東国へ下る途中詠じた歌と考えられる。

578 の歌は、詞書なく詠者も「よみ人しらず」と記されているが、「風葉集」離別部に「をさなきむすめをみやこにおきてあづまへくだりけり侍けるによめる よみ人しらずの



のじま」(525詞書)という同じ散逸物語「のじま」の歌がある。物語場面も類似しており、<sup>578</sup>この二首も同じ「よみ人しらず」の女性が東国へ下る途中詠んだものと考えられ、<sup>579</sup>歌集の常例とも鑑み<sup>577</sup>と同じ詞書を略したものとして差し支えないのではないだろうか。歌に、「たびのあはれ」「いく夜のくさまくら」と詠み込まれ、都から東国までの長い道中、空・月・夜等自然と対することで募る不安感・寂寥感が映し出されている。

<sup>580</sup>581は「うつほ物語」の歌で、詞書「題しらず」となっている。次の<sup>582</sup>の歌が東国へ到着した折のものと推されることから、この二首は<sup>577</sup>から続く東国への旅中を表すべく配置されたものではないだろうか。歌中には<sup>580</sup>「たび」との「くさまくら」<sup>581</sup>「たび人の」と旅中を示す歌語を含んでいる。「くさまくら」「露」は前歌<sup>579</sup>と共通しており、「たび」との「<sup>580</sup>581に言葉の連続としてみられる。また<sup>576</sup>「まだき秋」・<sup>578</sup>「月かげ」・<sup>579</sup>「露」<sup>580</sup>「あきかせ」「露」そして<sup>581</sup>「いろそむる」と秋の深まり行く景を見せるべく位置しており、その配列には尾張から東海道を下る距離と時間的推移が噛み合わされていると言えるのではないだろうか。

<sup>582</sup>は詞書により野島に到着したことが知れる。野島は武蔵国金沢で三浦半島の東岸、金沢文庫のある地の一部野島(今の横浜市金沢区野島)或いは千葉県安房郡白浜の野島崎のどちらかであろうとされる。この東下りの配列は一応この野島が終点の地となる。その間尾張・三河・遠江・相模等の地が略されているが、これは平安・鎌倉期の物語群にそれらの地を含む内容のものが少なかったためであろう。「のじま」が多用されていることを見ても、他に用うべき物語がなかったことを示しているのではないだろうか。鎌倉に幕府が置かれ、政の中心が移行しつつあったにもかかわらず物語作者、そして読者には馴みの薄

い地であったのかもしれない。

さてここで注目せねばならぬのは、580の詞書「題しらす」の「うつほ物語」の歌である。この二首を物語本文へ返してみると、「風葉集」羈旅部に配列されていることによって幾つかの問題を内包しているからである。この二首が物語において順序からするとその位置は逆になるということも一つだが、他に第一点として581の歌第三句「たび人」は、「うつほ物語」諸本では「捨人の」となっていること、第二点として580の二首とも物語場面にたち戻ると、旅の途詠じられた歌とは考え難いことがある。580は「内侍のかみ」の巻中のもので、七月下旬に催された相撲の節会の後の管弦に際し、仲忠は藤壺に隠れた折、あて宮を前にして詠んだ歌である。あて宮との贈答から「日もゆふぐれ」と「紐結ふ」を掛け、独り寝の自分を旅人に、その涙を露にたとえたものである。581は「嵯峨の院」の巻の歌で九月廿日の夜仲忠は仲純と夜一夜物語などして夜を過ぎた折詠んだものである。第三句「たび人の」が、本文では諸本一致して「捨人の」となっている。逆に「風葉集」は諸本「たび人」なのである。日本古典文学体系・校注古典叢書各々の頭注には「旅」の草書を「捨」と誤写したとも見えるとしているがどうであるか。「風葉集」の撰集過程ともかかわり一概に何とも言えないが、「風葉集」羈旅部のこの位置に「捨人の」として配列させると、世捨人的雰囲気を強く漂わせる様になり不適當とは言いつれぬ。ただ前後の歌の歌語の連続等から考えると「たび人の」の方が響き合う感じはする。他の部において「風葉集」本文と物語本文との異同が存する歌で、配列等鑑みこのような箇所がないか調査し結論を持ちたい。

次に第二点の問題だが、この二首は「内侍のかみ・嵯峨の院」の各巻において旅中に詠じら

れた歌ではない。少なくとも二首とも東海道上の道中詠まれた歌であるとは言えないであろう。ここで私見を加えるならば、歸旅部配列として逢坂の関から東へ下ったが、その旅程をしめす地として配せる物語歌が見当たらない、そこで苦肉の作として「うつほ物語」のこの二首と歌材のみを重視して選び出し、「題しらす」として並べたのではないだろうか。しかも季節の推移・歌語の連続等鑑み配列されたため、「うつほ物語」の場面に立ち戻ると巻の順序が逆ということになったのであろう。以上この580 581の歌は「風葉集」の採歌基準・成立過程など種々の問題を投げかけ興味深い。

二

次の歌群は583から587までの五首で、主として望郷の思いを綴った歌で占められている。都から東海道を下って行った前の十二首と、配列からみて一線を境していると考え歌群を分断したが、588から唐国行きの旅程の歌群と対比すると東下りとして第一歌群に収められるべきものである。

〔第一歌群 (583～587)〕

笙のいはやにこもりてよめる

はな宰相のみこ津師

583 とほさかるいはやの中のとひねにはこのはの衣こけのさむしろ

旅に侍ける夜ふる郷の女の夢にみえ侍けれは

ひちぬいしまの内大臣

584 古郷になかめやすらん草まくらたひねの夢にこゆる俤

ふきあけよりかへらんとし侍けるにみやことりなくを聞て

うつほの右少将仲頼

585 名にしおはゝせきもこえし都鳥こゑするかたを百敷にして

兵衛佐に侍けるときさつまのくにゝうつされけるにいよのみなとゝいふ所にて  
みやこ鳥をみてよみ侍ける

あたなみの中関白

586 都鳥恋しきかたの名にあれとわかふる郷のことつてもなし

こゝろにもあらすふる郷をはなれてさすらへけるに初雁のなくをきゝて

ふせやの関白北方

587 雁かねよしはしとまりて旅の空こひなくかたの物かたりせよ

583 は散逸物語「はな宰相」のものであるが、「風葉集」に三首残されているだけで内

容等全く知り得ない。詞書や歌から、旅をしながら修行している律師の姿が描き出されて  
いると言えよう。

584 は、旅中故郷に残してきた女の夢を見詠じた歌で、約束でもした女なのであろうか。

「ひぢぬいしま」は散逸しており、「風葉集」に十四首採られているものの内大臣の歌は  
この一首のみなので、人物・関係・状況等是不詳である。ただ羈旅部後半の第二歌群末尾  
にも「もろこしにてふるさとの女を夢にみて」(598 詞書)とあり、対照的に配列されたも

のと言えよう。

585 は「うつほ物語」の歌で、この場合は旅中詠じたものである。紀伊の関での離別歌だが、次の586の歌とともに都鳥を詠み込んだものとして配せられたものであろう。都鳥と言え、**「古今集」**の在原業平の有名な歌があり、古来から望郷の思いをかりたてる舞台回しの鳥として詠み継がれてきた。ここは配列から鑑み、東国へ下ったものの故郷への尽きぬ思い・哀愁を表わす意味で位置しているのであろう。

586 の散逸物語「あだなみ」の歌は、詞書に「いよのみなど」という地名がみえる。伊予といえ、**四国**、今の愛媛県である。しかしこの場合前後の配列から察すると、その地名をくみ取るよりも、**前の585の歌と同じく都鳥**―望郷の歌として置かれていたと見た方が良さであろう。

587 は散逸した「ふせ屋物語」の歌で、この歌が羈旅部前半の第一歌群東下り編の最後となる。585 586 の都鳥から雁となる。ここでは初雁の声が故郷へと思いを呼びさまし、その思いを詠じさせている。望郷の念を思い起こす歌材として、鳥が取り上げられ並べられていると言えよう。詞書に「心にもあらず」とあり旅に赴いた理由は、人に陥れられたという様な内容のものであろうか。そうであればこの歌の詠じられた場面において、主人公の胸中複雑な思いが去来したであろう。羈旅部前半の東下りは、失意の念を漂わせた歌でしめくくっているのである。

この587から587までの小歌群について、松野陽一氏から貴重な御教示を賜ったので補わざ

せていただきたい。この小歌群は、京から東へという第一歌群・京から西へという第二歌群をつなぐ歌群として、京を中心とした畿内を表すものではないかという御説である。詳しく分析してみると、<sup>583</sup>の「はな宰相」は詞書「笙のいはや」とあり、詠地としては、奈良県の大峰山系文殊岳に存する岩屋である。<sup>584</sup>は散逸物語で、内大臣がどこへ旅したのか、その地は不詳である。また物語の題名「ひぢぬいしま」は、小木喬氏により「ひぢぬ石間」ではないかと論じられており詠地の手がかりとはなり得ない。<sup>585</sup>の「うつほ物語」の歌は、物語本文によるとこの歌に詠まれている関は紀伊の国境である。その関で、客は京へ守は紀伊の館へ帰ろうとする丁度その時、都鳥が遠くで鳴いているのが聞こえたのである。<sup>586</sup>と次の<sup>587</sup>は散逸物語であるが、各々改作本といわれる。「一本菊」「伏屋」が存している。<sup>586</sup>は室町時代物語「一本菊」においては「いなのみな」とある。「いな」がどの地なのか、今のところ前後の文脈から「あだなみ」の詞書の「いよ」の誤写であろうとする説が有力である。伊予は先程記した通り、今の愛媛県である。<sup>587</sup>は中世物語「伏屋」によると、

いたはしやのもせひめはせたよりひがしをさしてくだり給ひしがならはせ給はぬ事  
なればあゆみかね給ひ十町ばかりゆきてとある所にしばらくやすらひ給ひけり<sup>（注六）</sup>

として、歌が記されている。その後姫君は鏡山を通過しており、この歌の詠地は瀬田付近となる。

□以上のように考察して行くと、五首中三首は畿内、一首は愛媛、残り一首は詠地不詳と

なり、現時点では京を中心とした畿内とは断じ難い。ただ「ひぢぬいしま」の詠地が畿内と判明されればこの御説は有力となるので、ここに御紹介した次第である。

三

〔第二歌群 (588〜601)〕

すみのえに侍けるを関白いさなはれて都にのほりけるに霧のたえまより松の木  
すゑはかりはるかにみえれは

すみよしの関白北方

588 はかなくてわかすみなれし住のえの松の梢のかくれぬる哉

すまよりあかしにうつろはせ給てみやこなる人につかはさせ給ひける

六条院御うた

589 はるかにも思ひやる哉しらすりしうらよりをちにうらつたひして

えかたかりける女のゆゑにすまにこもりゐて侍けるころかの女のもとにつかはしける

はつねの入道太政大臣

590 引かさねうらみし袖の涙にもいとかくはかりしつまさりしを

父にくしてつくしへくたりけるにふなこともあら しきこゑにてうらかなしくもとほくきにける哉とうたふを聞てこひしき人もありければよめる

源氏のさきの小式女

591 ふな人もたれをこふとかおほしまのうら悲しけに声のきこゆる  
つくしよりのほるとて

玉かつらの内侍の督

592 行さきもみえぬなみちに舟出して風にまかする身こそうきたれ  
もろこしへわたりける道にて

松浦宮参議氏忠

593 天の原おきつしほあひにうかふあわをともなふ舟の行へしらすも

参議安部関丸

594 かすかなるみかさの山の月影はわか舟のりにおくりくらしも  
よのちいとわつらはしきことありてかうらいといふくにゝはなちつかはされけ  
るみちにてよめる

ゆめかたりの宰相中将

595 なみ枕しらぬたひねのかなしきにく世を限る道の空そも  
つくしへかへりくたりける道にて海のわたりをおりてみるかひなとをてまさく  
りにして右中将のなつかしうかたらひしを思ひ出て

すまひの修理亮

596 あさりするあらいそよりも都にてみるかひありし君ぞ恋しき

舟よりおりたるになみの高くうちかくれはよめる

597 こしかたも又ゆくさきもはるかなる浪のなかにもましりぬる哉



もろこしにてふるさとの女を夢にみて

はま松の中納言

598 日の本のみつのはまゝつ今夜こそ夢にみえつれ我を恋ふらし

秋の夕をながめて

599 おく露も霧たつうらもしかのねも雲るの空もかはりやはする

おなしくにゝて月をみてよめる

まつらのみやの参議氏忠

600 みることにをば捨山のかすそひてしらぬさかひの月そ悲しき

雨のふる日(この詞書京大本なし)

601 しらざりし思ひをたひの身にそへいとゝ露けきよるの雨哉

後半部の十四首は、京から唐国へ旅立つその道程を示している。順を追って考察を進めたい。まず<sup>588</sup>であるが、この歌は「住吉物語」でも一部の諸本にしか見当たらず、伝本関係からも興味深いものである。物語末尾近く、姫君が関白にいざなわれて舟に乗り京へ出発する場面である。詠地は住之江で、現在の大阪市住之江区あたりである。住之江と言えば海上の守護神で後に和歌の神となった住吉の神の地で有名な所である。以後海路の配列がなされている点を鑑みると、ふさわしい出発地と言えるのではないだろうか。物語ではこのすぐ後舟は淀に着いている。唐国行きの配列からみると、厳密に言えば、船先の方角は逆である。

589 は、光源氏が須磨・明石に流浪していた折都にいる紫の上に遣わした歌である。詞書

に記されている様に須磨からさらに遠く明石の浦に移った時の心寂しさを詠ったものだが、配列は住之江―須磨―明石と順に西へ向っている。

590は、散逸物語「はつね」の歌である。この物語は「風葉集」に十五首入集されており、その内容は中編程度と言える。590の歌が詠じられた物語場面は光源氏の須磨・明石への隠遁と同様の背景かと思われる。主人公である入道太政大臣が若かりし頃、何らかの事情で須磨にこもりその原因となった女に遣わしたもので、詠地としては須磨であろう。ただ問題は都から西へ下る配列からすると、この歌は前の589の歌の前に位置せねばならないはずである。歌語をみても特別意味あるものも見出せず、どうしてここに配されているのか不審である。

591は、「源氏物語」の歌で、夕顔の姫君（後の玉鬘）の乳母の娘が父の赴任にともない九州へ下る際その舟上で詠んだものである。物語内に戻してみると、直後「金の岬を過ぎて、…」とあり、また歌中の「おほしま」は筑前の大島（福島県宗像郡大島）とされ、筑前の少し手前ぐらいと考えられる。しかし詞書に「つくしへくだりけるに」とあり、大雑把に都から筑前までの海路上と判断する程度でよいのではないだろうか。589 590 591とこの三首には「うら」の語が歌中共通して詠み込まれており、言葉が連続している。

592は玉鬘の詠じた歌で、大夫の監の手から脱出すべく筑紫から船出した折のものである。船旅の心細さに加え我身のはかなさを詠んだものだが、物語本文に戻るとこの地は厳密には北九州の松浦から兵庫県のひびき灘の途である。この歌は詞書に「つくしよりのぼる」とある様に、船先は588の「住吉物語」と同様西へ下る配列からすると逆になっている。

593 594は「松浦物語」の歌だが、詞書に「もろこしへわたりける道」とある様船はずでに

日本から唐に向けて離れているのである。この二首以降の配列は、中国大陆への海路を示している。物語本文では北九州の松浦宮を出発しその海上での歌となっており、七日後に明洲に到着している。

<sup>595</sup>の「ゆめがたり」は「風葉集」に五首残されている散逸物語だが、どうもその内容は明確に知り得ない。詞書に「はなちつかはされける道にて」とあることから何か無実の罪によって高麗へ流されたらしく、その船上で詠まれたものである。高麗がこの物語において具体的にどの地を指し示しているのか詳しいことは分らないが、やはり出発の地は松浦あたりであろう。松浦は、古くから大陸へ渡る船の最後の寄港地であったことからこの地から大陸及び朝鮮半島をめざしたものと考えられるからである。奈良・平安時代大陸へ行く路としては、難波津を出帆し瀬戸内海の諸港・津に泊りを重ねながら、北九州の港に着き使人一行は太宰府に寄る。そこから更に西航し松浦や五島列島の浦々に泊まる。これらの地が日本最後の宿泊地となり、船は東支那海に渡り揚子江をめざす。その上陸地点は浙江省の明洲あたりであったとされ、そこから長安に至ったらしい。

<sup>596</sup>は散逸物語「すまひ」の歌だが、詞書「つくしへ帰り下りける道」とあり唐国行き  
<sup>597</sup>の順序から考察すると<sup>592</sup>の後に位置すべきものである。ただこの次の<sup>598</sup>の歌が唐で詠じたものであることを考え合わせると、<sup>596</sup>の詞書「海のわたりをおりて」<sup>597</sup>詞書「ふねよりおりたるに」より目的の地に下船した瞬間の歌として配列されたのではないだろうか。

<sup>598</sup><sup>599</sup>は「浜松中納言物語」の歌で、入唐した後日本を懐しみ詠じたものである。<sup>599</sup>は、第一歌群末尾近くにやはり「ふるさとの女の夢にみえ侍ければ」(<sup>584</sup>詞書)とあり、夢に気がかりになる女性が頭われ望郷の思いをつのらせるという歌が、配列に則って対照的に置

かれていますのであろう。この二首とも物語本文に戻ると歌中多少の異同があるが、配列上問題となるべきものではない。

600 は詞書に「同じくにて」とある様唐に到着した後詠じた歌である。599 の歌より故郷を思い起こす媒介として「秋の夕」「月」「雨」と自然が用いられ、題詠的な並べ方の感もする。第一歌群末尾が「都鳥」「雁」となっている点、好対照と言えよう。「松浦宮物語」本文に戻ると600と601は順序が逆になっている。それをあえて601の歌を最後に配列させたのは、「雨」||「涙」で羈旅部の幕を引きつけたのであろうか。興味深いところである。以上第二歌群は、第一歌群に比べて順序に数首の例外があり、また唐への往路復路が順々に押さえられる様配列されていると言えよう。

以上、羈旅部の配列を論究してみたが、どちらかと言うと悲愴感漂う歌が多いのは、平安・鎌倉時代物語群が貴種流離譚をその主要なテーマの一つとして受け継いでいるためであろう。男主人公・女主人公達が、運命の悪戯から住む場所を追われ、失意の旅に出るという内容が盛り込まれているからであろう。また東下りを先に位置させているのは、「風葉集」編纂当時政治の實際の中心が鎌倉に移行しつつあった時代である。東国を取扱った物語が少かったとしても「風葉集」愛好者達の興味を引くべく、撰者が工夫を凝らしたものとみるべきであろう。東下りと唐国行き、この二つのテーマを羈旅部配列の柱とし、前者は陸路後者は海路と対照させ、各々末尾には望郷の思いを詠じた歌を詠じた歌を配している。この様な配列は、「千載集」羈旅部冒頭の数首にその形がみられる程度で「風葉集」以前の勅撰集にはないものであり、その独自性は評価されて良いであろう。またこの

配列を楽しむ上で、詞書の持つ役割の大きいことも挙げられよう。羈旅部の詞書にはだいたい詠地が明記されており、詞書に誘われ配列の妙を味わう様工夫されているのではないだろうか。この部では詞書の持つ意味は大きいと思われる。他部について調査した後、詞書については結論をだしたい。

### 結語

以上「風葉集」羈旅部について、その配列を各物語内へかえした場合の矛盾等いささか卑考を加えてみた。配列については、前半第一歌群十七首は東国へ下る旅程に並べられ、望郷の歌で締めくくっている。そして後半第二歌群は、唐国へ行く順に配され、やはり望郷の歌が末尾に位置している。二つの歌群が対照的に並べられ、その独自性は評価されて良いであろう。ただ各物語場面に返した場合、「題しらず」と詞書の附された「うつほ物語」の二首が、旅中詠じられた場面とは考え難い。これは配列の妙を優先させたため、その旅程を示す地として配せる適当な物語が見出せなかった故、歌の素材のみに着目して選び出し、「題しらず」として並べたのではないかと考えられる。この配列を味わう上で、詞書の役割は無視できない。詞書は潤滑油の働きをしているように思われる。

### 《補足》

「風葉集」の撰者は、樋口芳麻呂氏の詳しい御考察（佐七）より藤原為家が有力視されている。その為家の年譜を調査してみると、建長五年十月から十二月にかけて関東へ下向し、「三

島社奉納百首」「十一月鎌倉日吉別当尊豪法印勸進」等の和歌を詠じていることが知られている。この頃為家は、歌道精進のため「毎日一首歌」を続けており、この関東への旅の歌も数多く残されている。「藤原為家集」からこの旅中詠歌を拾い集め、その道程を辿ってみると、羈旅部前半の配列と道筋が類似しているのに気付く。「風葉集」羈旅部の配列は先行する勅撰集等にはみられない特筆すべきものであり、この為家の関東下向が何らかの遠因になるとも考えられるのではないだろうか。ただ羈旅部後半の唐国行きに相当する旅程は、為家集から見出せない。ここではあくまで参考資料として補わせていただく。

〈注一〉底本、次に575の歌の題詞以下580の歌までが記され、571の題詞から574の歌まではそのあとに記されるが、京大本により歌序を改める。

〈注二〉「だいしらす」歌については、本論「第十章「風葉和歌集」の「題しらす」歌「よみ人しらす」歌について参照。

〈注三〉小木喬氏「散逸物語の研究 平安・鎌倉時代編」（昭和四十八年二月 笠間書院）。

〈注四〉河野多麻校注「宇津保物語一」（昭和三十四年十二月 岩波書店） 野口元大校注「うつほ物語一」（昭和四十四年四月 明治書院）。

〈注五〉〈注三〉参照。

〈注六〉「伏屋」「室町時代物語集 第三」。

〈注七〉「風葉和歌集序文考——風葉集の成立・撰者について——（上）（下）」

『国語と国文学』（第四十二卷第一・第二号 昭和四十年一月・二月）。



## 第六章 哀傷部の構造

まず哀傷部そのものの存在について考究してみたい。「哀傷」とは、死に際して生じる悲哀の感情を詠んだものであり、「万葉集」では死者を葬る折柩を挽く者が歌う義の「挽歌」がそれに該当する。「古今集」においては、葬送・服喪・追悼そして辞世の歌等を主たる柱として巻十六に哀傷部が打立てられた。後「千載集」「新古今集」になると、更に無常を詠じた歌もその範疇に加えられる。ただこの哀傷部は、四季・恋・賀・雑・離別各部の様に勅撰集に必ず存する部ではなく、定着した部とは言い難い。八代集について哀傷歌自体は何らかの形で雑部に収められていても、哀傷部そのものとして独立して打立てられていない勅撰集は、「金葉集」「詞花集」がある。十三代集まで拈げてみても、「新勅撰集」「統後撰集」、「風葉集」の後に編纂された「統拾遺集」「新後撰集」には置かれていない。哀傷歌そのものは集に収められていても、部が打立てられているか否かは、その部をどの程度評価しているかにつながるであろう。まして採用歌の多いということとは、少ないよりその部を重視していることが原則として言えよう。

次の表は、「風葉集」と「風葉集」に先行する十一の勅撰集の哀傷部の採歌数が、全歌数のどのくらいの割合かを調べたものである。(猶、「風葉集」を中心として、散逸部分のある雑部を抜いたためこの数字は絶対的なものではない。大凡の目安としてみていただきたい。)



A | 各勅撰集の四季・神祇・釈教・離別・羈旅・哀傷・賀・恋部の歌数の合計。

全歌数	A	哀傷部歌数	歌数 勅撰集
1100	815	34(4.1)	古今
1425	1197	40(3.3)	後撰
1351	855	78(9.1) → 55(6.1)	拾遺
1218	870	68(7.8)	後拾遺
650			金葉
415			詞花
1288	1043	61(5.9)	千載
1978	1563	100(6.4)	新古今
1374			新勅撰
1371			続後撰
1915	1550	96(6.2)	続古今
(1420)	1152	99(8.6)	風葉
1459			続拾遺
1607			新後撰
2800			玉葉

● ( ) の数字は、各勅撰集のAに対するパーセントである。  
 ● テキストは、「新編 国歌大観」を用いた。「金葉集」の歌数は三奏本である。

この表を一見すると、まず哀傷部そのもの定着していない部であることが容易に理解されよう。「風葉集」の編纂された頃は、部そのものが打立てられていない集も多かったと言える。次に、「風葉集」の哀傷部の採歌数が秀でていることも挙げられよう。割合としては「拾遺集」の方がまさっているが「拾遺集」の哀傷部には二十三首の仏教歌が入集されているためである。またこの哀傷部の採歌数は、「風葉集」内の各部の歌数からみても四季・雑・恋に次ぐものであり、これら四季・雑・恋の各部が勅撰集の主要な部立三本柱というべきものであることを考えれば、「風葉集」哀傷部の比重の大きさは評価すべきではないだろうか。

—

次に、哀傷部九十九首について、その内容の展開・配列を示す一覧表を掲げてみたい。

603	602	歌番号
いはでしのぶ	いはでしのぶ	物語名
関白(一条内大臣)	皇子宫	詠者名
弔問	父の死	哀傷の分類
おなじころ…	：年もたちかへり侍にければ…	詞書の要約
あらたまる春	ん年のかへるら	歌語
年改る	年改る	配列

⑥12	⑥11	⑥10	⑥09	⑥08	607	⑥06	⑥05	⑥04
袖ぬらす	れかやが下折		らみかきがは		源氏物語	れかやが下折		われから
女院	中宮	関白	皇太后宮	春院	夕霧	関白	宣耀殿少納言	兵衛佐
院の死	院の死	弔問		父の死	柏木の死	妻の死	弔問	母の死
…花を御覧じて…	その花にかきつけ…	…花をさしいれて…	御返し	…花のさかりを御らんずるにも…	…さくらのいとおもしろきをみて…	返し	…梅の花につけて…	…梅壺のこうばいのおもしろきを見て…
花	花 今年の春	花 今年の春の花	花 昔の春	花 花こそ春の花	やどの桜	花	花	花

桜

梅

春

⑥21	⑥20	619	⑥18	⑥17	616	615	614	⑥13
夜の寢覚	朝倉	源氏物語	初音	かやが下折れ	源氏物語		源氏物語	夜の寢覚
中宮	関白	六条院	入道太政大臣	按察典侍	紅梅右大臣	致仕太政大臣	六条院	右大将—まさこ君
母の死	女二宮の死	紫の上の死	弔問	弔問	兄(柏木)の死	息子(柏木)の死	紫の上の死	母の死(偽死)
御ふくにおはしましけるころ…	…ほととぎすのなきわたるも…	…ほととぎすのなきけるをきかせ給ひて	…あやめにつけて…	…まつりの日—とせ		…花のちりたる梢どもをみて…	…花のさかり…	…花をおりて…
秋の夕露	時鳥	山時鳥	根夏衣	神のいかきも	花の散りけん	春霞の衣	春のかきね	花の色

